
美食ハンター乱入！

響竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美食ハンター乱入！

【Nコード】

N6314Q

【作者名】

響竜

【あらすじ】

とあるマッドサイエンティストの実験の為に拉致られ、改造され、モンハンの世界の送り込まれた主人公が美食ハンターとして生きてゆく物語です。

オリジナル設定・モンスターなどが多く含まれるのでそれらが嫌いな方はUターンしてください。

※皆様からの新モンスターや食材を募集しています！設定や名前が面白いやつや凝ってるやつなど待っています！

プロローグ前編

なんなんだ、こりゃあ？いきなり目の前が真っ白なんだが？

？「おっ、転移成功したみたいだねえ。」

転移だあ？なんかとんでもない事言わなかったか？

？「ありや、あんまり驚かないんだねえ。」まあ、そっちの方が話しが早くて助かるよ。」

っーか誰？

そう思っていると段々と真っ白な視界：煙が晴れてきて自分の状況がわかってきた。

「タ○ラント？」

何か狭いな、と思っていたら自分はカプセルのような物に入っていた。

？「あ、今から出すからねえ。」ポチッ。

その音と共にカプセルがスライドして開き、やっと外に出られた。
そこで初めて声の主をみる。

？「やあ、こんにちは。」

すると目の前にいたのは白衣を着ていかにも科学者です、という20前半ぐらいの青年がいた。

ビター「まあいろいろと聞きたい事はあるだろうと思うけどとりあえずは自己紹介からだねえ。僕の名前はビター、見ての通り科学者だ。君は？」

：確かに聞きたい事は山ほどある。が、一応自分も名前言っとくか。

「…自分は葛原、葛原紅葉だ。」

これはとあるハンター…いや、美食ハンターの物語である。

プロローグ前編（後書き）

プロローグ後編からモンハンの世界に行きます。
こんな感じですがよろしくお願いいたします！

ブログ後編（前書き）

ブログ後編です。

感想いただけると嬉しいです。

プロローグ後編

ビター「紅葉くんか、良い名前だねえ。じゃあさっそくだけど君が聞くであろう質問に答えておこうか。」

しゃべらせてくれないのかよ… まあ別にいいが

ビ「まず一つ、なんで自分はこんなところにいるのか。それは僕がワープマシンを使ってゲームをしていた君を拉致したからだよ。」

自分で拉致って言っちゃったよこのヤロー、しかもワープマシン？こいつとんでもない天才かイカれ野郎か？

ビ「二つめ、此処は何処？。此処は僕の研究ラボだよ。少なくとも君の世界ではないね。」

確かに：周りにポットや変な色した葉があるから研究ラボってゆうのはわかる。あれ、今聞き逃せないこと言わなかったこいつ？じゃあここ別の世界ってことか？

ビ「そして三つめ、自分が連れて来られた理由は何？それは僕の研究の実験に付き合ってもらおう為さ。他に質問あるかい？」

おっ、やつとしゃべれるか

紅葉「じゃあ質問だ、俺は帰れるのか。」

二次創作じゃ色々問題があって帰れないとかがほとんどだからな

ビ「帰れるよ。」

…意外に軽いなオイ、でも実験って何するんだ？気になるな…

紅「ちなみに…その実験ってのは何をさせんだ？まさかショッカー
みたいに人体改造するんじゃないだろうな…」

ビ「んゝちよつと違うけどだいたいそんな感じだね。」

軽い冗談で言ったの当たっちゃったよ

ビ「そして君がやっていたゲーム、モンスターハンターの世界に送
り込んでその経過を『ちよつとまで！』ん？なんだい？」

紅「今モンハンつつったな？クック先生がいるあのモンハンだよな

！？よっしゃ、その実験付き合ってやる！」

やったぜモンハンの世界だぜ！ヒャッハア！

ビ「ずいぶんな変わり身だねえ。まあ実験に付き合ってもらわなければならないけど。じゃ、さっそく」

そう言うないやビターは、ポッケからなにかを取り出し

紅「で、具体的にはなにを『プスリ』……は？」

思いつきり紅葉の首根っこに注射を突き刺した。

…え？なにこれ？刺さってる？首に？え？

ビ「人体改造はそれだよ。君には僕が造ったある強化細胞を打ち込んで進化する身体になってもらう。そしてモンスターハンターの世界で更にその性能をあげてもらおうよ。そうだな…名前をつけるとしたら君のみていたマンガからとって【グルメ細胞G】なんてどうかなあ。」

名前なんてどうでもいいけど大丈夫なのこれ？命に関わったりしな

いの?……あれ?何か身体が痛くなってきたんだけど?あっ痛タタタタタタタタタタタタああ!?

ビ「うーん。拒絶反応ではないと思うよ?多分身体全部を作り変えてるだけだと思うから?」

呑気に解説なんてすんなアアアア!俺の身体がアアアア!

………やっと収まった。まるで細胞一つ一つを針で刺されたようだ……いや、よくわからんけど

ビ「いやーおめでとうゝ。君が初めての実験で初めての成功品だよゝ。」

初めての!?!それを先に言え!あと品って言うな

ビ「まあ、実験も成功したことだしモンスターハンターの世界に送らせてもらうよ」

何事もなかったかのように……ま、まあこれでモンハンの世界にいけるわけだ。それに自分から承知しちゃったしな。ん?【グルメ細胞】って確かトリコの……

ビ「それでは充電開始。」

っていつの間にか、またあのカプセルに入れられてる！いつ入れた
！？

ビ「あと9…8…7…6…」

紅「あつ、あともう一つ質問があったんだ！

5…4…3…

アンタってさあ！

2…1…

いったい

0…

何者なんだよ！

その瞬間、まばゆい光が視界をおおった。そしてその隙間からニヤケた顔の科学者が確かにこう言った。

ビ「最初に言っただろう？僕はただの

科学者だって。」

そしてそこで俺の意識はなくなった。

プロローグ後編（後書き）

次からやっとな主人公をモンハンの世界で暴れさせれます。基本更新はランダムです。

到着（前書き）

モンハンの世界にきました。

到着

…ブヒブヒ…ブヒブヒ…

紅「…ん？着いたのか？」

うつすらと目を開けると一番最初に見たのは

…モスのどアップの顔だった

紅「うおっ！」

びっくりしたー！いきなりブタのアップかよ

急に起き上がると、むこうはあまり驚いた様子もなく俺の下にあったキノコを呑気にたべている。

なんか負けた気分だなあ…つとそんなことより

自分の周りを見渡す

そこらじゅうに原生林が生えており変な色や形をした木の实から甘そうな匂いが漂わせて実っているまさに、密林という所にいた

紅「おお…ゲームでみた密林じゃないか。まさか本当に来れるとは

…ん？」

そこで自分の体に違和感を感じる
まず服装が違っていた。

紅「何故にアーロンさん？」

思いつきFFXのアーロンさんが着ている着物みたい服だった。
いや、好きだからいいけどさ…あ、ポッケになんか入ってる
えーと一つはアーロンさんのグラサン、後一つは…紙切れ？なんか
書いているぞ

なになに…

《あまり死なない程度に生きてねえ。それとその世界はモンハン
と良く似た平行世界だからもしかしたら、君が知らない文化やモン
スターがいるかもしれないから気をつけてねえ。》

P・S

その服は君が好きだったゲームからとってみたが気に入ってくれた
かな？特別製だからかなり丈夫だよ。武器は自分でどうにかしてね
え。

ちなみに元の世界に戻すにしろそこに住むにしろ随分先になるから。
byビター》

まあ戻らないけどね。こっちの方が面白そうだし親も早死にしちゃ
ったしな。…ちょっと悲しいけど

紅「さてと、いろいろやることはあるがとりあえずは

グウウゝ”

…腹ごしらえだな。」

とりあえず紅葉は食べ物を探しに歩くことにした。

到着（後書き）

次話から戦闘シーンを入れていきます。上手く書けるか心配ですが
…。

狡猾な狩人…を狩るもの（前書き）

初戦闘シーンです。ですが短いです。

狡猾な狩人…を狩るもの

紅葉が食料を探して密林を歩き回る事約一時間。なんとか湖が見える所までこれたが肝心の食べ物は…

ゝカプツ、シャリシャリ…”

紅「いまいちだな。」

青色のリンゴのような果物を見つけたので食べてみたが…感想は甘味も酸味も薄いなかの味だった。もちろん美味しいとは言えなかったが他に食べれる植物なども分からないので仕方なしにかじっていた。

紅「それにしても【グルメ細胞G】か…」

送り込まれる前にあのマッドサイエンティストが自分の身体に打ち込んだ強化細胞の名前。

マンガのトリコの化物じみた身体能力を可能にした【グルメ細胞】の改良版ということか？【G】ということは

紅「いろいろ試すのは後にしてとりあえずは人に会いたいんだかなゝ『ガサッ』っ！」

慌てて身構える。後ろの草むらから出てきたのは…

ブヒッ”

紅「お前かよっ！」

さっきのモスでした。またキノコを探しているのだろうか。だがそんなこと今はどうでもいい。

紅「ハンターだったらよかったんだがな。生憎お前に用事はないんだ、じゃあなモス。」

そう言って紅葉はハンターを探そうと踵を返した。

が、

「ギャアギャア！『カブツ！』ブヒィィィ！」

後ろでモスの断末魔とそれを狩る側の声を聞き、急いで距離を取り振り返る。

「ギャアギャア！ギャアギャア！」

そこにはさっきのモスがただの肉塊となっておりそれを貪る青い鱗と赤いトサカが特徴の肉食竜、ランポスがいた。

チッ！こんなときに会うなんて！一旦ここは逃げるか

今ランポスはモスをうまそうに食っておりまだ、こちらには気付いていない。出来るだけ慎重に後ろに下がってゆく。だか、

「ギャアッ！」

紅「！おっと」

隠れていたもう一匹が飛びかかってきたので、それを横に跳んでかわす。

紅「そーいやランポスって集団で狩りをするんだったな：」

襲ってきたランポスのほうを苦い顔で見る。よく見ると二匹いたよ
うで、さっきの奴も行動していたらしくモスを食うのを止めて紅葉
を三匹で取り囲み始めた。

「ギャア！ギャア！」

自分達が優位だと言わんばかりに鳴くランポス達。はっきり言って
鬱陶しいことこの上ない。

紅「三匹か：よし、逃げるのは無しだ：。」

だが紅葉の反応は違っていた。自分の能力の手慣らしそして、生き
る為にこの世界に来て：いや、元の世界でもなかった、生き物を意
識して殺す”という覚悟を決めた。

そしてランポス達は知る。目の前の獲物の人間がただ者ではないと
うことに。

「ギャア！」

まず一匹が紅葉に噛み付こうと走り出す。つられて二匹も動き出し、
片方は同じよう紅葉に向かう。もう片方は一定の範囲外から回り込
む。

対して紅葉は何も反応しない。ただ最初に向かってきたランポスに
集中して睨み続ける。距離はどんどん縮まってゆく。

あと三步…ランポスが牙がある口を開く

あと二歩…紅葉が右手を手刀のように構える

あと一歩…ランポスの口が目と鼻の先に近づく

あと零歩…その牙は目の前の獲物に…

届くことはなかった。

「カ…!?!」

なぜならその前に紅葉の手刀がランポスの首を綺麗に切断したからである。

頭を失った体は血を吹き出しながら倒れた。

「ギ!?!」

それに驚いた二匹目は、驚き足を止める。

そして三匹目は驚きながらも背後から飛びかかる。

紅「よつと。」

しかしそれを紙一重で避けた紅葉はそのまま三匹目の尻尾を掴むと紅「オラァァァ!」

軽々と振り回し二匹目にぶち当てた。

「…!?!」

悲鳴さえあげれずに吹っ飛び、木に叩きつけられた二匹目はそのまま倒れ、三匹目は

紅「オラオラオラオラオラアア！」

何度も地面に叩きつけられた後真上に投げられそして…

紅「フィニッシュ！」

文字どうり胴体を真っ二つに手刀で切り裂かれた。

吹っ飛ばされた二匹目は立てずに仲間がやられてゆく様を驚きながら見るしかなかった。そして彼にも死期が近づいてくる。

紅「なんだ、まだ生きていたか。」

今や狩られる側になったランポスは恐怖の眼で目の前の化物を見上げることに出来ない。そしてもっとも恐ろしい未来を告げられる。

紅「さっきの二匹はもう腐りかけているなあ…。じゃあお前はそのまま焼けば食えるか？それじゃあ…

いただきます。」

狡猾な狩人…を狩るもの（後書き）

次は新キャラを出そうと思ってます。上手く書けるかなあ…

群れを率いるもの現る（前書き）

新キャラ登場です。

PV5000超え…だど？　こんな小説見てくれてありがとうございます。
作者もできるだけ早く更新しますのでどうかお付き合いください。

群れを率いるもの現る

「パチパチ…」

紅葉の目の前にはさっきまで自分を襲おうとしたランポスがいた。ただし、串刺しになって、こんがり焼かれた状態で。そして紅葉は良い焼き加減になったのを確認すると片手で持ち上げ、かぶりつく

「うん、イケなくはない。ちょっと臭みはあるが…肉質は鶏肉と似ているな。」

瞬く間に骨だけになったランポスを捨てるとそんな感想を言った。

「いやゝ意外と出来るもんなんだな。トリコのナイフ。」

紅葉のやったことは単純だった。自分の手をナイフにイメージして降り下ろす、ただそれだけ。だがそれに一番驚いたのは紅葉自身でだった。

なぜなら前の世界では信じられない体のスペックをさっきの狩りで体感したからである。堅い鱗と丈夫な皮をも切断した手刀、小型といえど人よりも重いランポスを片手で振り回した筋力、そして五感すべてで気配を感じる能力、どれもが人間離れしていた。

この世界じゃ随分とチートだなこの身体。まあ、これくらいなきやさっきのランポスで死んでたな…そこだけは感謝しようあの、ビタ―（マッドサイエンティスト）に…

「それじゃあ人探しを再開しますか…あ？ランポスの鳴き声？」

それだけなら無視していただろう
だが、

「人の声…！」

微かに声が聞こる、それとなにか金属がぶつかりあうような重い音も。

「ハンターか？とりあえず行ってみるか。」

耳を澄まし位置を確認しながら走ってゆく。そしてここでも自身の身体能力が発揮される。

紅「おっ？体が軽い、早いぞ早いぞ」

獣道や悪路もほぼひとつ跳びで進んで行く。そのスピードは軽く人の限界を越えていた。

「？？？サイド」

「ハアッ！」

今自分はとても辛い状況に追い込まれている。油断したわけじゃない。けど相手のことを少々認識不足だったと思う。まさかこんなことになるなんて…

「ギアアギアア、ギヤツギヤツ！」

「くっ…。」

休む間もなく奴らは…ランポス達は襲ってくる。相手は五体。少々多いが、普段はランポス程度ならなんとかなるものだが…

ギャアッ”

一匹が噛み付こうとしてきた。それに対して横に避けてかわし、自身の武器…双剣とよばれる二対の剣を喉元を狙って振るう。しかし…

ヒョイツ

ランポスはそれを深追いせずにバックステップで距離をあける。

ギャアッ!”

「っ!…うっ!」

そして武器を振った後の硬直を見逃さず死角から別のランポスが狙う。それに一瞬遅れて避けようと反応するが少し肩に喰らいつかれた。

「くっ…このっ!」

ズバッ

ギャアッ!”

痛みに顔をしかめながらももう片方の剣でランポスの喉を切り裂く。上手く入ったらしくその一撃でランポスは血を吹き出し苦しみがら動かなくなった。

「ハア：ハア：つつ！」

だが相変わらずこちらの状況は圧倒的に不利だ。いや、一匹減ったとはいえ片腕が動かせない分さつきよりも悪くなった。

「やっぱり：ちょっと僕には：早かったのかなあ：？」

疲労やダメージ、さらにはこの絶望的な状況で思考が段々と暗くなつてゆく。といってもこの状況では大体の人が諦めたくなるが：

「いや：ここまでできたんだ：それに：僕は：ハンターなんだ：！」

（そう、自分はモンスターを狩るもの、ハンターだ。決して狩られる側では終われない！）

その強い意識を込めて狩りの対照を睨む。自身の能力もさることながら、ランポス達に統率力を与えて何倍も手強くしたランポスの頭ランポスよりも一回り大きい体と鋭く尖った手足の爪、そして立派なトサカを生やしたドスランポスを。

「ギャウツギャウツ」

ドスランポスは声を放つとランポス達を一気に獲物に向かわせた。恐らく弱っているのを感じてこれで止めを刺そうとしているのである。最後まで自身は手をださずに。

ランポス達は自分達の優位を確信し目の前の獲物に襲いかかろうと

跳びかかる。

ハンターは最後まで抗おうと動かせる腕に力をいれる。たとえばやられようとも最後までハンターであろうと。

狩り場では予想外の事が起こるのは日常茶飯事だ。普段だったら問題なく倒せるランポスにボスが加わるだけで状況が逆転したりすることも、ハンターにとって最悪の出来事になるのもそして

「おい、死にたくなけりゃあ体下げろ。」
おもわぬ乱入者に助けられるということも

その声が聞こえた瞬間
背筋に悪寒が走った。

「!? うわっ!」

その声に従いすぐ地面に伏せると見えない何かがすぐ上を通った。
そしてそのまま

「ギャッ!? グアアッ!?」

自分に跳びかかってきたランポス達をまとめて薙ぎ払い、遠くまで飛ばした。

「んゝやってみるもんだな。」

隣から声がしたので慌てて横を見ると見慣れない服装の青年がそこ

に立っていた。

（ハンター！？いや、でも武器は？ボウガンの音も弾もない？じゃあどうやって…）

「あ、あの。」

「話は後。まずあのトサカ野郎を潰してからだ。俺も聞きたい事があるしな。」

そう言うのと次の瞬間には居なくなっていた。

「え？」

く紅葉サイドく

着いた時にはちょうどランポス達が一人のハンターに跳びかかっている所だった。

いやくせっかく見つけたのに死なれちゃ困るからな。ちょっと遠かったから焦ったが、ワンピースの海軍がやってた六式の内、嵐脚ならなんとかなるかな。と思ってやってみたが…

完全には出来なかった。原作では鋭い切れ味の鎌鼬を放つが自分が出来たのはせいぜい烈風を繰り出すことだけ。やっぱり簡単には出来ないか

まあ今はそれより…

同じく六式の剃を使ってドスランポスの後ろに回りこむ。

地面を素早く10回以上蹴って移動する体技だが六式の中でも一番

簡単らしくすぐにできた。まあそれでも普通の人からしたら一瞬で移動したように見えるから凄いが…それはドスランポスも同じだったようだ。

「ギャ？ギャギャ？」

突然乱入してきて手下を倒した奴がいきなり消えるだもんなそりゃ驚くわな。だが手加減はせん。

片方では重そうなので両手を使って尻尾を掴む。そしてさっきのランポスのようにぶん回す。ただし重いのでジャイアントスイングだ。

「ギャ…！カ…！」

ドスランポスは今の自分の状況に反応出来ないようだ。なすがままにされている。そしてそのまま

「おりゃアアア！」

地面に全体重を頭にぶつける。

「カ…ハ…」

相当食らっているようだ。あまりの威力に地面が陥没している。

そのまま胴体を手刀で切ろうとするが…

ガッ、ブシュッ！

「むー」

一応切れたが表面上だけで致命傷にはならない。さすがにドスは一

般的な奴より頑丈なようだ。なら首ならどうだ？

そう思い首を狙うがドスランポスもやられてばかりではないようだ。

グ…ガァァ！
カブツ！

「っつ！」

さっきの攻撃でキレたようだ。目が血走って鼻息も荒い。首だけを曲げて腕に喰らいついた。

「あっ！」

むこうのハンターが心配するように声をあげた。が、心配は要らない。確かに痛いがこのチャンスを逃さないつもりだ。

「はっ、覚悟しろよこの
トサカ野郎。」

威圧を込めるとドスランポスは危険を感じたのか急いで牙を離す。
たが

スパツ、ボトツ

それより俺の全力の手刀が当たる方が早かった。綺麗に切れた首は空中を回転したあと地面に落ち驚いた形相のままこっちを見ていた。

「?? サイド」

今自分は夢を見ているねだろうか

一瞬でドスランポスの後ろに回ったと思えば掴んで振り回しそのまま地面に叩きつけた。その時はちょっとした地響きがしたのに驚いた。どんな威力だ!?

極めつけに肉質が柔らかい首元とはいえ素手で切るなんて…
一体何者なんだこの人は!?

そんなことを考えていると急に辺りに威圧感が立ち込める。

(えっ!?)

慌てて辺りを見渡す。だがモンスターはいない。いるのは突然現れた青年だけ。ということは…

(あの人から!?! でも、なんで!?!)

人からドスランポスを超える威圧感が放てるところにも驚きだが今なぜそんなことを? という疑問がうかぶ。

よく見ると彼の目線は先程吹き飛ばしたランポス達に向かっていた。

(あっ、さっきのランポス達。全然気がつかなかった…。)

威嚇を当てられたランポスはみんな堪らずに散りじりと去って行った。

「さて…と、おいそこのハンター。」

呆然としているとむこうから声を掛けてきた。

「ハ、ハイ！」

「えーと、とりあえず…名前はなんてゆう？」

な、名前？

「ぼ、僕の名前はラディ、ラディⅡバンクルッス！」

「ラディか、俺の名前は葛原紅葉。ん、こっちじゃモミジⅡクズハラか。じゃあラディ、質問だけだよ…」

むしろこっちが聞きたい事だらけなんですが…と聞けるはずもなく
「な、なんスか？」

次の瞬間僕はまた驚かされることになる

「このドスランポスよお…食っていい？」

「……………へ？」

これが彼、モミジⅡクズハラとの衝撃的な出会いだった。

群れを率いるもの現る（後書き）

新キャラとの初コンタクトは前から考えていました。

こんな奴モンハンの世界にいるかWW。みたいな感じで。

次は予想外のキャラを出そうと思っています。
それでは

やはり食はいいものだ(前書き)

食べるシーンって書くの難しい…

感想待ってます！

やはり食はいいものだ

ドスランポスを倒した後、ラディというハンターの怪我の手当やクエスト達成を知らせる為に狩場の拠点であるベースキャンプに戻ることにした。

帰る途中に猪のブルファンゴや、でかい蟹のヤオザミなどが襲って来たが今は喰う気は無いので軽く威嚇をすると、とっとと逃げて行った。そのたびにラディもビクツとしていたが…

「あっ、着いたッスよ」

前には湖が広がる砂浜に後ろは高い崖がそびえ立ち、ふたつの道は極端に狭くなっているるのでモンスターは通れない所にベースキャンプはあった。まあ、まんまゲームで見たのと同じだったのでちょっと感動してしまう。

「ちょっと待って下さい…よっと。」

ラディは荷物を置いている所からなにやら筒状のものを取り出しそれを

ポッ、シュルルル…パーン！

上に向け発射した。それはしばらく上昇すると赤い光を放った。

「これで明日には迎えの馬車が来るはずッス。それじゃあ焚火をするんで…」

そう言うのと日も暮れてきたので準備をするが片腕が痛むのか少し手間取る。

「いや、自分がやる。あんたは傷の手当てをしていてくれ。」

さすがに怪我をしている人にやらせられないので強引にやらせてもらう。

「えっ？でもモミジさんも怪我してるんじゃない？あれ！？」

ラディが驚くのも無理はない。腕を見せるとさっきの傷がもう塞がりかけているのだから。

そう言えばグルメ細胞は治癒能力も高かったな。美味しいもの食べば更に早いらしいが

またもや驚くラディをよそに焚火の火を着ける。ただし、指パッチンで

後ろから「なんでもありッスか…」と声が聞こえる。確かに今の自分人間離れしているな。嫌じゃないが

そうしていると火が大きくなって焚火が出来た。

「それじゃドスランポスを捌きますか」

ラディからは討伐した証として頭と幾分かの素材を剥ぎとってもらって後は好きにしていると、許可をもらっているのでまず鱗を手刀で削ぎ落とす。そして鋭い手足の爪を取り腹を割いて内蔵をかき出す。ちよっとグロかったが食欲が勝ったので水で洗ってなんとか下準備が終わった。

後は串刺しにし、焼き上がるのを待つ。

「さ〜と、それじゃ何から話し合おうか？」

その間にいろいろ解決しておこうじゃないか、お互いの疑問を

「は、はい。じゃあ改めて…僕はラディⅡバンクル、ラディでいいッス、ヤクモ村っていう村のハンターッス。さっきはどうもありがとうございました。あっ、そう言えばまだこれ脱いでなかったッスね。」

そう言うトラディは装備のヘルムを脱ぐ。

その中から現れたのは大きくクリクリとした目に褐色でハリのある肌、肩まである黒髪と頭に巻いたバンダナ活発そうな表情が似合う10代前半くらいの美少年だった。

ちらりと装備を見る。防具は新人ハンターが好む、鉄鉱石や小型の草食獣の毛皮を各所にあしらったハンターシリーズ。武器は比較的に入手しやすい鉱石で作られた大きめナイフのような双剣、ツインダガー。

この装備からみて新人ハンターなんだろう。

「そんじゃ俺も改めて…モミジ、モミジⅡクズハラだ。職業は…」

そこで一瞬言い留まる。自分はハンターか？それとも美食屋か？…いやちよつと違うな

「…美食ハンターだ。美味しい食材やモンスターを見つけたたり食ったりするのが目的だ。あと敬語は使わんでいいぞ。」
笑顔でそう言ってやった。

「ラディサイド」

ちよつと予想外だった。武器は持っていないし見慣れない服装だったけど同じハンターだと思っていたから。

殺す為に狩るんじゃないかって食べる為に狩る…似てるけど違うハンターの在り方

モミジさんを見る。威嚇をしていた時は恐かったが改めて顔を見ると精悍な普通の10代後半の青年だった。

「おつ、もうそろそろだぞ。お前もどうだ？」

本当に食べるのが嬉しそうだ

そう言って切り分けた肉を受け取る。さっきまで自分を殺そうとしたドスランポスとは思えないほどこんがり焼けてうまそうな匂いを放っており自分の胃袋を刺激していた。さっそく食べようとしたとき

「いただきます。」

モミジさんが手を合わせてそう言った。

「モミジさんそれなに？」

「ん？ いや、俺はいつも食事になる生き物に対して感謝してんだ。まあ礼儀だな。」

生き物に感謝…いいなそれ

「いただきます。」

自分も見習ってやってみる。このドスランポスに感謝して

まず一口、…美味しい、それが感想だった。肉質は鳥に似ており皮がパリパリしててボリュームがありとても美味しい

二口、このドスランポスがさつき自分を仕留めようとした場面を思い出す。とても恐かった。

三口、モミジさんが来なかったら生きていただろうドスランポスを思い浮かべる。彼もただ生きようとしただけなんだろう。

ポタッ、ポタッ

「うっ、ううう。」

気づけば泣いていた。なんに對してだろう。あの時の恐怖を思い出したからだろうか。それともドスランポスに對しての罪悪感からだろうか。

わからない わからない

「はっはっは、泣くほど美味しいのか？」

「グスッ…うん…とっても…うっ…美味しい…グスッ。」

泣くのが止まらない。けど泣くのをやめたらなにかが壊れそうだった。

肉を食い終わった所で睡魔が襲ってきてそのまま意識が遠くなっていた。

く紅葉サイドく

「寝ちまったか…。」

そのままにするのもあれなのでテントのベッドに寝かせ、外にでる。

多分、初めて死に直面した恐怖とかがあって泣いたんだろう。本当はわからんが…

それにしても1日目からいろいろあったな…

初めて狩りをして、初めてあったハンターが殺されかけているのを助けたり初めてモンスターを食ったり…

「はっ、あんとき断んなくて良かったぜ。」

元の世界じゃ一生出来ない体験だからな。せいぜい楽しませてもらう、この世界を

「ふわくあ、さて、俺も寝るか。」

近くにある木に登り、ちょうどいい枝で寝そべり目を瞑った。

こうしてこの世界の1日が終わる。

次の日

早朝にギルドから馬車が来て、今はそれに乗ってラディのヤクモ村に向かっている途中だが：

ガタッ、ガタガタッ

酷い悪路なのだ。おまけに最低あと1日はこの状態が続くとあって早くも気持ちはグローだ。

「アニキ、大丈夫？」

ラディが心配して聞いてきた。ちなみにアニキというのは早く起きたラディが

「モミジさんのことアニキって呼んでいい！？」

と非常にキラキラした目で言ってくるので

「別にいいよ」

と軽く言ったらやたらとアニキ、アニキと呼ぶので少々うるさい。

「ぜんぜん、なんでお前は元気なんだ？」

「ふふーん。田舎ハンターをなめないで欲しいね！いつもこうだから慣れているんだ！」

それ自慢できんの？

そんなやりとりをしていたが：

ガクンッ！

「おおっ！？」

「うわっ！？」

いきなり馬車が止まったのでラディが俺に抱きつくような格好で倒れてきた。

「なんだなんだ？なんで馬車が止まったんだ運転手さん！？」

そう言うのと運転手：しゃべる二足歩行の猫のアイルーは慌てて答える。

「ニヤニヤ！ランポス達が道の先にいて進めないのニヤ！」

ランポス？昨日の奴らか

「わ、わ、アニキ！」

見るとラディが俺の腕の中でもがいてた。

「おっとごめんよ。」

慌てて離すとラディはとても動揺したように首をブンブンと振ってる

「い、いや気にしてないから！む、むしろ嬉しいくらいで！」

おいその発言はやめろ。俺はシヨタコンではないんだ…って今はそんなことよりランポスだ。

外に跳び出て前方を見る。そこには

「ギヤアギヤアッ！ギヤアッ！」

ランポス達を10体程引き連れた昨日の奴よりもでかいドラランポスがいた。

「ギャアッ！」

よく見ると昨日吹っ飛ばした傷があるランポスもいる。
新しいボスを見つけて復讐ってか？

「うわっ！なんでまたドスランポスが！？」

後ろの方でラディが驚いている。もっともだ
多分あのドスランポスは他のエリアから流れてきた奴で偶然時期が
重なったんだな。

考えているとドスランポス達は一斉にこっちに向かってきた。
面倒だな。本気で威嚇して帰ってもらうか…！？

その時横から何かの気配を感じた。

慌てて後ろに跳ぶ。

ランポス達はそのままこちらに向かっており、すぐ目の前に来た瞬間

ドスランポスは横からきた何かに一撃で食いちぎられた。

「ギャ…！？」

残ったランポス達もいきなりボスが食われたので硬直してる。

紅葉も落ち着いて乱入者を見る。と、その正体がすぐにわかってしまった。

「おいおい…」

モンハンに良く似た平行世界だから…

あの紙に書いていた事を思い出す。

みるからに堅そうな鱗

視界に収まりきらない巨体

それを支える8本の足そしてドスランポスを一噛みだけで絶命させた強靱な顎。

マンガのトリコに出てくるガララワニがそこにいた。

「平行世界ってそう言うことかよ…！」

「カロロロ…」

やはり食はいいものだ（後書き）

ヤバい、書いている内にテンション上がってしまったW W。

基本作者は行き当たりばったりで書きます。

激突！ガララワニ！（前書き）

初めて主人公が本気で戦います。

PV10,000突破アア！

ありがとうございます。始めたばかりですがよろしくお願いします！

激突！ガララワニ！

「カロロロ…」

バキッ、バキッ

ドスランポスは突然乱入してきたガララワニに一瞬で噛み砕かれラ
ンチにされている。だが、ガララワニは足りなかったのだろう
残った肉片を飲み込むと体をこちらに向けた。その威圧感、迫力は
ドスランポスの比ではない。

「なっ…なんで狩猟レベル8のガララワニがここに!？」

ラディはかなり驚いてる。確かに俺もこれには驚いたぞ…。あと狩
猟レベルってトリコの捕獲レベルみたいなもんか？

「ガウッ！」

といきなり足を使ってその巨体で跳びかかってきた。てか、思っ
たよりはやっ!？

慌ててラディの襟首を掴んで「ぐえっ!」横に跳ぶ。

だがそこで油断したのが悪かった。ガララワニはその長く丸太のよ
うな尻尾をこちらに振ってきた。

「なっ!?!グウウッ!」

「アニキ!」

ラディを庇うように避けようとするが一足遅かったようで、背中に大木で殴られたような衝撃が襲ってきた。そのまま木を薙ぎ倒しながら吹き飛ばされ、なんとか地面に着地する。

「クソッ…怪我ねえか…？」

なんとか立てるがかなり効いたぞ今の。

「ア、アニキ…」

ラディを見ると泣き顔にはなっていたが怪我はないようだ。それに安心するとラディを離し、ガララワニを見る。

既にこちらに向かっておりその口の合間からなにかが蠢いていた。

それに気づき自分の腕を見る。すると数匹のヒルが貼り着き血を吸っている。

「ラディ！自分の肩の傷をみてしろ。」

「えっ？一体なんで…うわっ！なんか引っ付いてる！？」

ラディの肩にも同じようにヒルが付いており血を吸っていた。

そういやガララワニは口の中にヒルを飼ってそれを獲物に寄生させて血の臭いで居場所を探るんだっけ。

てことはもしかしたら昨日から奴にばれてたかもしれんな…

まあ今はどうでもいいそれより確かアイツの肉ってワニのなかでも最高級だったよな…

食ってみてえ…！

「ア、アニキ…？」

突然紅葉から放たれる殺気にラディがたじろぐ。

本能に訴えかける殺気や威圧感というのは慣れるものではない。それはハンターも同じで防具から得れるスキルや薬以外では防げないものだ。

ただ、相手の強さなどは漠然とわかってくる。だから熟練のハンター達は自分に当てられる殺気などから敵うか、どうかを経験してゆき死なない工夫をする

しかし今この場を覆っている空気は熟練ハンターでも足がすくんでしまう程重圧なものだった。

「あ、あ…」

そんな空気に経験の浅いラディが耐えられる訳がなく腰が砕け地面に座りこみ後ずさる。

「ラディ…ちつとばかり下がってろ…。」

無言で何度も頷くラディを一瞥すると目の前のガララワニを見据える。

「ガララワニよ、そっちがその気ならこっちも本気で行かせもらうぞ…！」

ガララワニは動けないでいた。生まれて初めて死の恐怖を感じたか

らだ

だが固まっているだけでは相手は止まらない。ならば自分からいくまで…！

その恐怖を振り払うよいにガララワニは口を開け再び跳躍する。自慢の顎で噛み砕こうと

対して紅葉は跳んでくるガララワニの口に向かって自身も跳ぶ。知らない人が見れば自殺行為だと思うだろう。

だが彼は普通ではない。

その口に届いた瞬間

彼は上顎を思いつき蹴り上げた。

「カロ…！」

かなりの威力だったのだろう

巨体がほんの少しだが浮かび上がり体が無防備になる。

もちろんそれを逃すはずはない

紅葉は次の瞬間開いた口に向かって

「嵐脚」

鋭い鎌鼬を蹴りだして真正面から横に真っ二つに切り裂いた。

ドシャツ、ドサツ

「よつと。」

何事もなかったかのように着地した紅葉からは先程の殺気はすっかり消え去っていた。ただし返り血がついままだが

そして動かなくなったガララワニに向かい手を合わせ

「感謝する。ガララワニ。」

自分の食事になるであろうガララワニに感謝した。

「さ〜とと」

後ろでまだ腰を抜かしてるラディに笑顔で

「じゃ、一緒に食うか！」

そう言うときまだ涙目だが安心した表情で返事をした。

「は、はい！アニキ！」

あの後、全部は馬車では持ち運べなかったので4分の1程載せて後は食べてしまおうということになった。そしていつも通りに丸焼きにしている。

パチパチ：ジュ〜

落ちる肉汁がいかにも肉がジューシーな事を知らせていた。

「お〜、うまそうだ。」

「い、今までこんな良い匂い嗅いだことないよアニキ！」

肉を切り分けるとその断面からは肉汁が滴り落ち、適度にのった霜が更に食欲を誘った。

「そんじゃ、いただきます。」

「うん！いただきます！」

二人同時に口に入れ、ゆっくりと咀嚼し飲み込む。そして二人同時に

「う、うまい！！」

笑顔でそう言った。

上質な牛肉よりも美味い霜が口の中で広がり適度で齒ごたえのある赤身も味とボリウムがあり満足である。

「アニキ！僕もつと食べたい！こんな美味しい肉食べたことないや！」

「おう！俺も食ったことねーや、こんな美味しい肉！それにまだまだ肉はあるんだ、腹いっぱい食おうや！」

「うん！僕アニキに会えて良かったよ！凄いやアニキ！」

「はっはっ！嬉しい事言ってくれるじゃないか！」

二人の手と口は止まらない。みるみる肉は減っていった。

「あつ、そういえばアニキ。もぐ…」

「ん？なんだ？むしゃ…」

「クエスト以外の中型、大型のモンスターの無断狩猟って禁止され

ているんだけど…どうする？かぷ…」

「えっ？…まあ食うために狩ったんだからいいだろうあむっ。」
「うーん、いいのかなあ…？」

「いいんだよ。それより肉食わないんだったらもうぞくパクツ！」

「あ！僕の肉！アニキいー！」

とりあえず二人はこの瞬間はこの味に舌鼓をうつことにした。ガラ
ラワニに感謝しながら…

激突！ガララワニ！（後書き）

次から人がたくさん出せます。
あとちよつとした秘密も…

ヤクモ村到着。後、ちょっとした秘密（前書き）

今回戦闘シーンはありません。主に会話です。

ヤクモ村到着。後、ちょっとした秘密

「ところでアニキってどこの出身？着ている服は防具じゃないんでしょ？僕の村にも似たような服はあるけどアニキのは何か違うような気がするし：名前は東方の人の名前に似てるから村長と同じ東方出身？」

ガララワニを狩った次の日

馬車の悪路にも多少慣れ、これといってやることも無いのでラディと世間話やお互いのことについて話し合っていた。基本的に俺が聞く事が多く

ラディの住むヤクモ村の温泉が素晴らしことやふたつの鍛冶屋があること、ユクモ村の村長とヤクモ村の村長が知り合いだとゆうことなどたわいもない話しをしていた時に自分の事について聞かれた。

まさかバカ正直に、変な科学者に改造されて異世界から来ましたなんて言えないので

「いやゝ実はよくわからないんだ。物心ついたときから一人で旅していて名前も自分で付けたんだ。」

咄嗟にしては良い言い訳だと思う。

「そうだったんだ：じゃあアニキがやった技とかも全部我流？いたいどれくらい厳しい修行をしたらあんな動きができるの？」

「いや、俺の身体は生まれつき特殊で、強いモンスターや希少な食材を食べるたびに身体能力が上がるんだ。だからあんな人間離れした動きが出来るんだ。」

後半は嘘は言っていない。現にドスランポスとガララワニを食った後自分の中に力が満ちるのを実感したからな。

「な、なんかずるい：僕なんて最初のクエスト受けるのにあの鬼教官から厳しい訓練させられたのに：うう卑怯だ卑怯だ！」

そう言ってラディは少しむくれて拗ねてしまった。

そんな事言われても：

「でも：アニキが居てくれなかったら僕は今ここに居ない：だから、ありがとうアニキ！」

そんな眩しい笑顔で見らんでくれ

俺以外の奴だったら男でも惚れるかもしれんぞ？

しばらくそんなことをしているとラディが外の方に顔を向けた。

「ほらっ、アニキ！あれが僕の村だよ！」

つられて見ると確かにところどころ湯気が立ち登っている村の門が見えてきた。

「それじゃあアニキ：」

ラディは誇らしげな笑顔で

「ヤクモ村へようこそ！」

歓迎の言葉を言ってくれた。

□ □ □

「はあく綺麗な所じゃないか。」

階段を登り村を歩いて第一印象はそれだった。

村の店や家は3rdのように、どこか昔の日本のような雰囲気の家が多く、人もほのぼのとした中に活気がありみんな楽しそうにしている。

風景は今は春なのか桜が点在してどれも満開、さらに足湯もあり水面上に桜の花びらが浮かび

まさに日本の風流がそこにあった。

「ふっふっふん、そうでしょう。この桜は温泉がでた後に村長が風流を楽しみたいってことで故郷からわざわざ苗木を持ってきて育てたんだって。ところでフウリュウってなんだろう？」

嬉しそうにしゃべるラディ。3rdでは紅葉が散っていたが桜も綺麗なもんだ。

村長わかってるねえ。

とりあえず村に着いて最初にやることは集会所でクエスト達成を知らせる事で今はそこに向かっている途中だ。

「着いた。ここがこの村の集会所だよ。」

村の奥の一際大きい建物にたどり着き扉を開けた。

中は酒場のようになっておりさまざまな装備のハンター達が酒や料理を楽しみ賑わっている。

奥に目を向けると受付カウンターと温泉マークののれんがあった。多分あののれんの奥に自慢の温泉があるんだろうな。入って。

温泉のことはひとまず置いておきラディとカウンターのギルドの給仕服をきた受付嬢の前に来る。

「あらっ、ラディお帰り。クエストどうだった？ドスランポスの。」

受付嬢はラディを見ると嬉しそうに聞いてきた。多分付き合いが長いんだろう

ラディも嬉しそうにしている。

「これを見よ！」

するとラディは持ってきた袋からいきなりドスランポスの生首をカウンターにのつけた。相変わらず恨めしそうな表情してるな。

「おっ！あのラディがとうとうドスランポスを狩ったか！」

「ハッハァー！後2、3年は掛かると思ったんだがこいつぁ驚いた！」

「う、うるさい！僕だってやるときはやるんだ！」

熟練らしきハンター達からからかわれるラディ。どうやらラディはみんなから可愛いがられているみたいだな。

「：確かに本物ね。ラディハハハ、ドスランポス一頭討伐クエスト達成。お疲れさまでした！」

特に生首に驚くこともなく仕事をこなす受付のお姉さん。
やっぱり慣れてんだな…。

「あら、ラディこの人は？」

そこで受付のお姉さんがこちらに気づく。

「ああ、俺は「モミジのアニキだよ！ 僕が危なかった所を助けてくれたんだ！」…「パンツ」」

途中から元気よく被せるな。

軽く頭を叩いてやった

「いたっ！？ うう、僕はアニキの凄さを伝えたかっただけなのに。」

「人が言ってる途中に邪魔するな。どーも、本名モミジックスハラだ。成り行きでこいつを助けることになった。」

「あら…そうだったの？ うちのラディがどうもお世話になって…あ、私の名前はリリアラストライプ。リリアって呼んでね。」

ニコツと営業スマイルではない笑顔を見せるリリアさん。

鼻筋の通った綺麗な顔に軽くウェーブのかかったロングで栗色の髪、そして服の上からでもわかる抜群のプロポーション。

そんな女性の笑顔に酒場の男共はKO寸前だ。自分？ この身体になつてから性欲とかも食欲にいつちゃってるので美人だなー程度にしか思わない。

「よろしくリリアさん。俺はモミジって呼んでくれ。あ、リリアさん。この素材も見えてくれないか？」

そうゆうと担いでた袋を置く。

「ん？モンスターの素材かしら？どれどれ……えっ！？これってガラワニ！？」

その言葉に周りのハンター達も一斉に目線をこちらに向ける。その顔には皆驚きの表情が浮かんでいた。

えっ？俺そんなに驚くようなことした？

頭に？を浮かべていると

「あなた、これどうしたの？」

リリアさんが多少動揺しながら聞いてきた。

「いやな、ここに来るまでに出くわしたんだ。で、腹も減っていたから狩って食ったんだ。ああ、そういうやクエスト以外で中、大型のモンスターって狩るの禁止されてるらしいけど、食うために狩ったんだからいいだろ？」

「…どうやって素材を手に入れたかはわかったわ。けどどんな手段で狩ったの？武器は持ってないみたいだけど…」

確かにそこは疑問をもつだろう。すると他のハンターが

「嘘言うなよあんちゃん！ガラワニってのはここいらじゃかなり強いモンスターだぜ！」

「そうだぜ兄ちゃん！武器が見当たらねえが素手で狩ったってのか！？」

「そうだよ。」

えっ？

一瞬固まったハンター達をよそに袋から鱗を取り出す。それを

スパッ

手刀で綺麗に切った。

「……………!？」

その瞬間、中の空気が固まった。リリアさんでさえも口を開けて目を丸くしている。ラディはもう慣れたのか特に驚かない。

そりゃそうか、モンスターの鱗を素手で切る人間なんていないだろうし

まだ固まっているリリアさんに向かって

「これで信じてくれたか？で、相場はどれくらいだ？」

なんでもないように聞く。

「…え、ええ、そうね…鱗一枚450Z、爪は一個690Zでどうかしら？」

いまいちピンとこないのでラディに聞く。

「なあ…これっていい値段なのか？」

「かなりいい方だよ！ランポスの鱗なんてよくて40Zくらいだもん。」

「そうか…じゃ、これくらい売るわ。」

袋の七割程を売って換金する。小袋パンパンに金貨が詰まっているところをみるとかなりの額になったようだ。そして残ったやつは

「ほいラディ。」

ラディに渡した。自分はどうせ防具なんて作らないだろうからな。

「えっ！いいの？僕アニキの足引っ張っただけだし…」

「いいんだよ、装備なんて当分造るつもりないし生身の方が強いからな。」

「アニキ…うん！ありがたくいただくよ！」

嬉しそうに受け取るラディ。こいつの方が素材を有効活用してくれるだろうし。

「あらあら、短い間に仲良くなっちゃって。ちょっと妬いちゃうわよ？」

リリアさんが茶化すように言う。

まあこいつの天真爛漫さもあるが1日でここまで仲良くなるなんて思っただけだからな。

「あっ、ラディ。村長に報告しなくていいの？初めての中型肉食竜の討伐成功。」

「あっ！」

そう言われたラディは思い出したように顔を上げる。

「早く行った方がいいわよ。何気に心配していたから。」

「そうだったんだ…じゃあ探して報告してくる！あつ、アニキは温泉に入っていて！気持ちいいから！じゃ行ってきます！」

すると慌ただしく出て行ってしまった。元気だなー

「相変わらず落ち着きがないわね。さてと、じゃあ私からもお礼言わなきゃね。あの子を助けてくれたんでしょ？ありがとう。」

「いや、偶然会った時に襲われてたんでな。運が良かったよアイツは。」

「あら、そんな危険なところだったの？あの子あんな性格だから危なかった所もあるのよね。」

「ああ、短い間だがそれはわかる。ほっとけない性格だから人に好かれるんだろうな。」

「そうなの！だからつい気にかけてちゃうのよね。」

そんな風にラディについてのしゃべっているとリリアさんがいきなり

「そういえばモミジくん！君からみてあの子ってどう？」

ん？どうゆう意味だ？外見ってことか？あの眩しい笑顔と中性的な外見…

「いや、可愛い弟分みたいなもんな。なんか子犬みたいな感じだし…」

「いや、そうじゃなくて……ってもしかしてモミジくん！あの子のこ
と男の子って思ってる！？」

えっ？… ああそうか、あんなに可愛い子が男のはずがないってこ
とか。

「いやいや、わかってますよ。ラディが女の子だってこと。」

冗談のつもりで言ったのだが…

「なんだわかってるじゃないのよ。で、どうなの？あの子を女の子
としての感想？確かに今は身体も性格も子供っぽいけど私には分か
るわ…将来化ける「ちょっと待った！」え？」

熱演している所悪いが

えっラディが女の子？あーそういうえば防具もあれ女性用だったのか
もしれない。防具を外す時ちょっと恥ずかしそうにしてたかもしれ
んなー…って

「えええー！！女の子おー！？」

自分が以外と鈍感なのに気付いた瞬間だった。

ヤクモ村到着。後、ちょっとした秘密（後書き）

ちょっとした設定をばらしましが…勘のいい人はわかってたかもしれませんね。

次も村の紹介になります。

ヤクモ村の村長さん（前書き）

前回の続きで短めです。

ヤクモ村の村長さん

「アニキ、気持ちいいでしょ、この村の温泉。」

「ああ、良いもんだ。」

その後、ちょっとしたショックに浸っているところにラディが戻ってきてまだ俺が温泉に入っていないのを知って「だったら一緒に入ろう!」ということとでただ今温泉を堪能している所だ。

さすがに着替えるのは別々だったがこの世界では混浴が普通らしく先に男女が普通に入っていたのが少し驚いた。まあどちらも隠す所はタオルで巻いてる。

しかしラディって本当に女の子だったんだな。タオルで巻いた体は少ないが起伏があり体格も丸みがある女性のものだ。まあ色気は感じないが。

「そーいやラディはなんでハンターになったんだ?」

なんとなく気になっていた事を聞く。

「えっ? うーん単純な話、お父さんもハンターだったからからだよ。武器を振るってモンスターを狩っている姿が格好良かったから。」

「へーそうなんだ。だったって事は今は何やっているんだ?」

「…お父さん古龍の討伐で死んじゃったんだ。けど別にその古龍の仇討ちとかは考えてないよ。お父さんが言ってたから…もし自分がクエストで死んでも、モンスターを恨んだりしたら駄目だって、む

「こうも生きたいから殺すんだって。」

「……」

「だから僕がハンターになったのはあくまで自分の意思、仇討ちではないよ。お母さんも自分の意思なら止めないって言ったしね。」

「…そうか。」

こいつもそれなりの人生があっただな…

「そ、そんな重い表情しないでアニキ。そうだ！どっちが長く潜れるか勝負しよう！」

こっちの表情をみて雰囲気を変えようとするラディ。

…そうだな、こんな気持ちじゃ逆に失礼だな

「よーしいいだろう。負けた方はジュースをおごるってことでどうた？」

「むっ、望むところだ！僕はこうゆうのは得意なんだよ！」

そんなこんなで一応温泉を楽しんだ。ぜんぜんのんびりしてないけど。

□

□

□

「ゴクッ、ゴクッ、プハあゝこの水晶サイダーうめゝ！」

「うう…7分以上も潜れるなんてずるいよ…」

勝負ははつきり言って圧勝だった。ラディもハンターなので2分半は潜っていたのだが俺は倍以上の7分潜っていたので勝負にならなかった。そしてラディにおごらせて町中を歩いてる途中だ。

「ところで村長ってのはどんな人だ？」

温泉から上がった後、どうしようかと考えているとリリアさんが

「この村に来たなら一度村長さんに挨拶してきたらどう？」

と言ってきたので会いに行く所だが、どうやら村長さんは常に歩き回っているらしくすぐには会えないらしい

「どんな人って聞かれたら…まあまず不思議な人ってゆうのが初めに浮かぶな。掴みどころが無いってゆうか、考えが読めないってゆうか…ただ悪い人じゃないってのはわかるよ。」

「ふゝんそーなのかー。」

「あっ！あの人だよ！おゝいヤクモさゝん！」

ヤクモさんってことは自分の名前を村にしたのか？

ラディの目線の先を見るとなにやら扇子で顔を覆っている和服を着た女の人がいた。

服装は3rdの村長みたいな人だな…って、ん？あれっ！？

近づくにつれて顔が見えてきたがそれがみたことがある顔だった。

おいおい、東方出身てよお…

「あら、そちらがラディが言ってた素手でモンスターを倒した方かしら？」

そっちの東方？

そこには服装や髪の色など多少の違いはあるが

「はじめまして、モミジルクズハラさん。どんな人か気になっていたけど案外普通の格好ね。」

妖艶な容姿と雰囲気

そしてちょっとした動作にも優雅さがある

「そう言えばまだ私の名前を言っていなかったわね。」

とあるゲームに出てくる美女

「八雲紫。あら、こっちの地方ではユカリⅡヤクモだったわね。よろしく。」

八雲紫。その人がいた。

ははっ、この世界に来てから予想外のことだらけだ。

「?どうしたの?私の顔になにかついてるかしら?」

「はっ!いや、つい美人なんで魅とれちゃって。あはは…」

「ふふっ、嬉しい事言ってくれるわね。でも本当にそれだけかしら…?」

鋭い!本当はこの人本物じゃないのか?なわけないよな…

「じゃラディから聞いてるみたいだけど自己紹介。俺はモミジルクズハラ、美食ハンターってのをやってる。よろしく。」

「美食ハンター？ハンターとどう違うのかしら？」

「まあ俺が食うためにモンスターや食材を探して狩っているんだ。ちなみに食わない相手は命に関わらない以外殺さない主義だ。」
トリコのルールを言ってみる。個人的にあの考えは自分も好きだからな。

「へー変わった考えね。でも悪くないわ。ふふっ面白い人ね、あなた。」

妖しい笑みで見られる。美人だからいちいち様になってるな

「ところで貴方…、この村に腰を据えようとは思わない？貴方みたいな人、歓迎するわよ？」

「そうだな…特に行く所もないし…じゃあしばらくここに居させてもらおうかな。」

ここは俺が知っているモンハンの世界じゃない。トリコの世界も混じった想像出来ない世界だ。ならば一度拠点を据えて情報やこの世界の在り方などを知っていく必要がある。それに一番の理由は帰れる家が在るっていうのは安心する。
ならこの誘い、断るわけがない。

「ふふっ決まりね。ようこそヤクモ村へ、美食ハンターさん。じゃあ住む場所はどこにしようかしら…そうね、私の家にでも…」

「ぼっ、僕の家に住ませるツスアニキは！わざわざ村長さんに手間は掛けさせないよ！ねっ！アニキもそれでいいよね！？」

「俺はどっちでも構わないけど…いいのか？狭くならないか？」

急に話に入ってきたラディが慌てて自分の家に住むことを勧めてきた。

なぜそこまで必死だ？

「全然構わないよ！むしろ僕にとっては少し広いくらいだし！お母さんもドンドルマで暮らしていて寂しかったもん！」

「そ、そうか。じゃあお前の家に住ませてもらうわ。そうゆう事だから村長さん。」

「紫で構わないわ。そう、ちょっと残念だわ！けっこう好みだったから。けど…人の恋路を見るのも悪くないわね。」

「っ！？ア、アニキ！次は鍛冶屋に行くよ！ほらっほらっ！」

「おい、引っ張るなよ。じゃ、紫さん。これからよろしくな。」

そう言って紅葉はラディに引っ張られて行った。

「こちらもよろしくね…いろいろと。」

紫は踵を返す。

その顔には妖艶で美しい笑みが浮かんでいた。だがそれも一瞬だけですぐに消える。そしていつもの通りに町を歩き始めた。

ヤクモ村の村長さん（後書き）

次で村の紹介は一応終わりたいと思います。
早く主人公に狩らせたい！って自分が書いているんだったorn

イカれた鍛冶屋とある決意（前書き）

つい長くなってしまいました！

今回で村の紹介は終わりです。

イカれた鍛冶屋とある決意

バリッ、モグモグ、ムシヤムシヤ、ゴクゴクッ

「うめゝなくにんにく鳥のタレ焼きにスネークサーモンの米虫おにぎり。あとプラチナハニーマのロイヤルドリンク。おっ！長寿モスの丸焼きなんてものもあるのか！」

「ア、アニキ…ちょっと買いすぎだよ！全然進まないよ！」

鍛冶屋に向かう途中に市場みたいな所を通っているのだが…
なにぶん初めて見る食材や料理が美味い匂いを放っているのてつい衝動買いしてしまう。おまけにどれも店の人がいい人で安い値段にしてくれるのでちっとも足が進まない。

「わかってるって…あつ！金色イクラだ！あれ食ってみたかったんだよ。えゝと100g600Zか…おっちゃん！これ400Zにまけてくれよゝ。」

「おいおいゝ勘弁してくれよ兄ちゃん。ん？兄ちゃん見かけない顔だな？もしかして新しいハンターの人かい？」

ハンターではないんだがな…ま、いっか。

「まあそんなとこ。ということであけてくれゝダンディなおやつさん。」

「はっはっは！ノリのいい兄ちゃんだな。よし、はじめてってこと

でこのダンディなおやつさんがまけてやる！持ってけ泥棒！」

豪快に笑いながら少し量を多めにしてくれた。

「おお！ありがとうございます。」

「いいってことよ！そのかわりこの町を守ってくれよな。」

「はいよ。」

いやゝ良い買い物しちゃったな。ではさっそくゝむ！一粒一粒が味が濃厚だ！おまけにプチプチした食感がたまらん！くう。

「むゝアニキ。」

あ、

見るとラディが頬を膨らまして拗ねていた。

「いやゝすまんすまん。つい金色イクラの誘惑に負けてしまったな。大丈夫、もう寄り道しないから。」

「まったくもう…じゃあ僕にも一口頂戴。」

やっぱりラディも欲しかったんだな。チラチラとこれ見てたからな

「はいはいどうぞ。」

「あむっ、うゝんプチプチしてて美味しゝい。」

現金なもので一口食ったらもう笑顔かい。まあ分かるけど。

「あっ、見えてきたよ。あの煙突がある所。」

むっあれか。

煙突から煙を出してるなにやら老舗の感じの看板を出している建物があった。

「親方へ来たよう。」

扉を開けた途端、中の熱風が肌にまとわりついた。

うわっ！あちい…

さすがにラデイも暑いのか、額に汗が少し滲んでる。

弟子らしき人が何人か忙しそうに走り回っており、周りの壁に様々な剣や太刀などの武器があり鍛冶屋とゆうより武器屋と言った方がしっくりくる

ただし、奥にある真っ赤な金属を鎚で叩く職人がいなければ。

「ん？ラデイか！どうした？あたいの装備になにか不具合があったか！？」

叩く作業を続けながら若い女性の声が聞こえた。もしかしてラデイが言う親方だろう。

「いやー！違うよう！今日は人を紹介しにきたんだよ！」

「人々？ちょっと待って！今手が放せないんだ！」

しばらく親方が打っている所をみる。段々と鉄の塊が形になっていくのがとても面白い。

あれは大剣か？

両刃で分厚い形状からみてガブレライトソードだと思う。

上質な鉱石であるガブレライト鉱石で出来る大剣で、属性はないが

単純な威力と切れ味の良さがあるので使い勝手が良く上位に上がったばかりのハンターが造ることが多い。

「よしっ…とりあえずここまで。待たせたねラディ、それとあんちゃん。あたいのことはルビスか親方って呼んで。そいであんちゃん？」

中から出てきたのは長い赤色の髪を後ろで留めた凛々しい目の美人だった。てっきり親方は男だと思ってたぞ。

「俺はモミジⅡクスハラ。モミジでいいや。親方ってゆうからゴツイおっさん予想してたよ。」

「ははっ、そう言う人多いよ。ところでモミジはハンター？武器がないみたいだけど…あっ！もしかしてあたいに装備作りを頼みに来たのかい？」

ルビスが期待の籠った目でみてる。職人だからやはり仕事が増えるのは大変だが嬉しいんだろう。生憎今は必要だとは思わないが

「悪いがハンターじゃなく美食ハンターだ。武器は必要とは思ってないからいいや。」

すると途端にルビスは不機嫌な顔になり口を尖らせる。

「むっ、それはどうゆう事だい？あたいの腕が信用出来ないのかい？」

いや、そうゆう訳じゃ…

「違うよ親方。モミジのアニキは武器がなくてもガララワニを倒しちゃう位強いんだから！」

ラディが助け船を出したが当然信じられるはずがなく疑惑の目が向けられる。弟子さんからもだ。

とその時

扉が開き誰かが入ってきた。

「おお！出来ていたか俺の大剣！さすが俺のルビス、仕事も一流で美しいな！」

後ろを見る

そこには自分より少し背が高く二枚目と言っていい顔で金髪をオールバックにしている

なんかうざそうな男がいた。防具は全体的にギザギザした白い甲殻のようなやつをしていた。

見たことない防具だな。俺の知らないモンスターのかな？

俺の視線に気付いたのか男がこっちを睨んできた。

「なんだお前は？ハンターには見えないが…まさか俺の彼女のルビスにちよっかい出しに来たのか！？もしそうなら…」

「誰がお前の彼女だって？ほらっ依頼のものは出来てるからさっきと持っていけ。そしてでていきなバルト。」

いつもの事なのかルビスは呆れた表情で対応する。

「ルビス…その照れた反応もかわいいぞ。さすがは俺の彼女だな！」

が、まったく聞こえてないのかでて行こうともしないし態度も変えない。

うん、うざそうじゃなくてウザい

「なあラディ。あいつはいつもルビスに絡んでんの？」

「うん、村にいるときの7割は親方に付きまといっているよ。他の人に俺の彼女って言うてるけど皆わかってるから同情してるんだ。親方には他に好きな人がいること。」

あら〜確かに同情するわ。あんなのに四六時中、付き纏われたら面倒臭くてしょうがない。

「あれっ？じゃあルビスが好きな人がいるってこと言えば良いじゃないか。」

「それが親方も鈍感だからその人の事が好きだって事分かんないだ。周りからはバレバレなのに。」

あ〜なるほど

「〜というわけで前回俺の華麗で豪快な剣が狩猟レベル7のホワイトクラブにとどめをさしたわけだ。素晴らしだら〜う？そしてその素材で作られたこの防具が俺を優しく守ってくれて…」

「はいはいそうだな。仕事の邪魔だからとっとと剣持って…ん？まてよ…」

なんかルビスがこっちに怪しい笑顔を一瞬向けてきた。やな予感

「なあバルト。一つ賭けをしないか？」

「ん？なんだいルビス？その賭けってのは？」

ルビスは大剣を指差し

「この大剣を…」

次に俺に向けた。

「アイツが素手で壊したらあんたはもうあたいに付き纏わないで。絶対。もし壊しせなかったらあんたの彼女になってやるよ。」

なに勝手に決めてんの！？

「はっはっは。なに言ってるんだルビス。君の作る大剣があんな奴に素手で壊しせるはずないよ。それに君とはもう彼女…」

「なんでも一つ言うこと聞いてやるよ。」

ピタッ、ツカツカツカ

その言葉を聞いた瞬間バルトはこっちに歩いてきた。

「おいお前。さっさとあの剣壊してみろよ。素手で。」

うん、こいつ潰す

くルビスサイドく

半信半疑だったがラディは嘘をつかないので賭けみた。ガララワニを素手で倒したというこの男を。

もしそうならあの太剣でもちよっとした傷をつけるのがやっとのガララワニの鱗を壊す力があるはずだ。

モミジはバルトの言葉にイライラしながら剣の前に歩いてきた。

「ごめんね。巻き込んだじゃって。」

「別にいいや、俺もああゆう奴嫌いだしな。本当に壊していいのか？」

「うん。アイツが諦めてくれるんだったら安いもんだよ。それにしても自信おありだね。」

「まあ…な！」

っ！

その瞬間横を鋭い風が通った。そしてカウンターごと剣が綺麗に切れて地面に剣が半分刺さった。

「本当…だったんだ。」

「自分から言ったくせに信じてなかったのかよ？」

モミジはなんでもないように言う。だって普通信じないからね。

(けど…この力…モミジだったらもしかして…アイツの夢を…！)

「さくてとバルトだっけ？」

ビクッ！

話しかけられて固まっていたバルトは反応する。目の前のことが未だに信じられないようだ。当たり前だが：

「賭けに負けたんだからもうルビスに手え出すんじゃないぞ。」
ギロツ

（なっ！モンスターみたいな威圧感だせるの！？）

「くっ！？…くそー！」

悪役みたいな台詞を言ってでて行った。
ホント噛ませ犬だったわね。

「そんなじゃ俺も行くわ。行くぞラディ。」

「うん！じゃあよかったね親方！素材が集まったらまた来るよ。」

あっ！

「待って！ありがとうモミジ！それともう一つお願いがあるの。」
帰ろうとするモミジ達を止める。これは多分モミジにしか頼めない。

「あたいの幼なじみ…もう一人の鍛冶屋にあって欲しいの。」

（紅葉サイド）

ただ今村の外れにあるというもう一つの鍛冶屋にルビスと一緒に向かっている所だ。

「で？なんで俺の力が必要なんだ？その幼なじみに？」

するとラディとルビスが目を合らし、ため息をつく。

「実はアニキ…いまから会う人ってのは鍛冶屋としてはかなりの腕なんだけど…」

続くようにルビスが話す

「そいつの作る武器はどれも特殊でね…扱いが難しいものもあるけど一番の問題は…」

そして二人そろって

「「重すぎる」」

きれいに重なった。

「だからだれも扱えないし扱わない。今までそうだった。」

だいたい先が見えてきたぞ

「けどモミジ、あんたの身体能力なら」

「それを扱ってモンスターを狩れるってことか。」

ルビスが頷く。

「：なんでその幼なじみとやらは誰も扱えんような武器ばかり作るんだ？腕がいいなら尚更だ。」

その質問に困ったような表情を浮かべる二人

「アニキ、その人の目標ってのは自分が作る最強の武器を扱える人に会うつてことなんだ。」

「それだけに賭けてアイツは鍛冶屋になったみたいなのだからその目標を曲げないつもりなんだよ、これからも。」

困ったように言うルビスだがどこか誇らしげでもあった。もしかして…

「成る程ね。でもそこまで気にかけるなんていい幼なじみだな、あんた。もしかして好きなのか？」

「えっ！？い、いや、別に好きとかそんなじゃなくて鍛冶屋としてはある意味憧れる目標っていうか、あの、その。あっ！あれがそうだよ！」

好きかって聞かれて明らかに動揺してるな。わかりやすい。

「ラディ。俺の想像って当たってる？」

「多分ね。小さい頃から見てきた村の人達にいつ結婚するんだ、つてからかわれるたびにあの反応だもん。」

わかりやすい

着いた所はなんか寂れた倉庫みたいな建物だった。

「じゃあ今から会うけど：一つ言っておくわ。ちょっと性格がイカれてるけどびっくりしないでね。よっ」

ドアを開けて入ると中は暗く、灯りらしきものは隙間から入ってくる日の光ぐらいしかなかった。

暗いな：ん？誰か居るぞ。

よく見ると奥の方に座って片手にあるなにかをジャグリングしている奴がいた。

「ああ：悲しい、悲しい話をしよう：俺の作る武器を扱えるような奴がいっこうに現れない：これを悲しみと捉えずどう捉える！やがてこの悲しみはのちの人生に大きな悲劇をもたらすだろう！だがいまここで解決すればその心配はなくなる。というわけでそのお前、その剣を持ってしろ。」

ハンマーを片手に弄び、鬼太郎の髪を銀色にしボサボサにしたような髪型の若い男がつなぎを着て俺に話しかけてきた。

こいつがルビスの幼なじみか？

横を見ると太刀があったので持ってみたが：んっ？確かに重いが持てない程じゃないな。

片手で振り回す。けっこう重さがあるらしく振るたびに空気を切る音がビュンビュン鳴る。

後ろでは二人ともわかってたような顔をしている。

「ふーこれで満足か。」

しばらく振り回した後一旦止めてつなぎ野郎に聞く。

「ヒャッホウーウ！マジかよ！ヤバイ、興奮してきた…あー！この喜びをどう表現したらいいんだ？」

むこうは既に最高にハイなようだ。

「俺はお前が気に入ったぞ。というわけで自己紹介だ。俺はグラハムⅡランスター、最強の武器を作る鍛冶屋だ。お前はなんだ？」

イカれてるなこいつ
だが嫌いじゃない

「自分はモミジークズハラ、美味しいもんを探す美食ハンターだ。」

「美食ハンター…なかなかいい響きだな。ではモミジお前の望む武器はなんだ？」俺が望む武器か…せっかく別世界に来たんだから欲しいよな。…よし、決めた。

「グラハム、………ってのは作れるか？」

「面白そうじゃないか！だーがー、素材が足りない。というわけで鉱石、黒水晶メタルを持ってこい！そうすれば俺にとってもお前にとっても面白い話になると思うんだが？」

面白い話ね…そうなるといいんだが。

「いいぜ。で、その黒水晶メタルってのはどこで採れるんだ？」

グラハムはニヤリと笑いその場所を告げる。

「場所はこっから西、ランバル大鉱脈だ。」

「ランバル大鉱脈!？」

その場所を聞いたラディが驚く。

「知ってんのかラディ? そのランバル大鉱脈ってのはどんな所だ？」

「狩猟レベル15以上のモンスターがうようよいる希少な金属の宝庫。G級ハンターでも死んじゃう事がある危険な場所だよ。」

ガララワニが狩猟レベル8だったよな:それ以上の奴がいる って
ことか。

うゝんいきなりそんなとこに行くのは不安だな。

「悪いがもうちょい先になりそうだグラハム。」

「構わねーよ。俺の技術が振るえるということが俺にとって楽しい
ことだからな。まあ楽しみにしてるぜ?」

「二度目になるけど、ありがとうモミジ。あたいの幼なじみの目標
を叶えてくれて。アイツのあんなに嬉しそうな顔久しぶりに見れた
よ。」

ルビスも笑顔で嬉しそうだ。

「でしょ！アニキは凄いだから！」

「お前が威張るな。いや、俺も会えてよかったしな。」

やはり自分の武器というのは男としては憧れるしな。

お礼を言った後ルビスは仕事があるので帰って行った。

しかし今日だけでいろいろな人と会ったな

特にあの村長さん：なんか企んでるな。

「アニキ、そういえばまだ僕の家知らなかったよね？早く行こうよ！」

「ん？そうだったな。じゃあこれからお世話になります。」

「こちらこそよろしくねアニキ！」

まあ：なにはともあれ楽しくなりそうだな：

夕日が射し込みきれいに染まったヤクモ村をモミジはラディに急かされながら歩いて行く。

これから想いを馳せながら。

イカれた鍛冶屋とある決意（後書き）

鍛冶屋のモデルはあの人です。

次回からどんどん狩り場に行かせます！

初依頼、サラー平野！（前書き）

しまった！また戦わないシーンしかないorz

初依頼、サラー平野！

ブンッブンッ

「197：198：199：200：」

ただ今俺は朝の鍛錬としてグラハムから拝借した一番重い大剣を素振りしている。

グルメ細胞は過酷な状況になればなるほどより細胞を進化させたり新たな耐性などをつけたりとマンガに書いていたのでまず、重いものを背負って筋力を上げようと思ったわけだが

「398：399：400！ふう：」

始めたばかりなので疲れる。まあ100kgの大剣を400回も素振り出来る時点でどうかしている。

「アニキ朝飯出来たよー！」

「ああ、今行く。」

この体になってから異様に腹が減るので朝からお腹がなりっぱなしで困る。

鍛錬を後にとりあえず腹ごしらえにすることにした。

「おっ、このオオニワトリの卵焼き美味い。」

「でしょ！上手く作れたんだ！このブリサーモンの塩焼きも美味し

いよ！」

「ニャニャ〜僕のシモフリトマトのサラダも美味しいのニャ〜。」
ラディについて意外だったのが料理が上手だったことだ。

ラディの家は2階建てで確かに一人で住むには広く他にはアイルーのヨシキチが一匹雇っていて家の手入れや料理をラディとやっていたがそれでも広がった。

そのとき俺の雰囲気到最后ヨシキチが威嚇してきたがラディが俺のことを紹介してくれると警戒を解いてくれた。

「ふ〜、腹二分目位かな？」

「…けっこう多目に作ったんだけど…さすがアニキ。」

「す、凄いニャ〜。」

瞬く間になくなった料理に一人と一匹は呆れたような顔をしてる。

昨日の内にラディからいろいろなことを教わった。

まず狩猟レベルの事だ。狩猟レベルというのはそのモンスターの討伐の難度を表すもので自分が狩れる狩猟レベルの数値でハンターランク、つまりハンターとしての階級がきまるらしい。

狩猟レベル1〜3が小型の草食獣や肉食獣などの新人ハンターでも狩れるレベル。

4〜6が中型、大型の若い個体のモンスターで下位ハンターが狩れる範囲

7〜9が経験を積んだそこそこの強さのモンスターで上位のハンターが狩れる強さ

10〜13が長い年月を生き抜いた屈強なモンスターや特異個体などのモンスターにあたるレベルでありG級ハンターと呼ばれる経験を積み確かな実力を持つてるハンターにしか狩れない

14～16のレベルのモンスターはG級ハンターが何人も組んでやっと狩れるかどうかのレベル
そしてそれ以上が測定不能のモンスターでG級ハンターも死ぬ確率が高いほど強力な奴等ばかりらしい

もう一つはこの世界の地図。見せてもらったが、俺が知るモンハンの大陸はカタカナのウの字を反転したような形だったはずだ。

結果、この世界の大陸も同じ形だったが違っていた部分があった。それはトリコの世界のように周りを巨大な大陸が囲んでいる所だ。聞くと今自分がいる大陸がハンター界、周りの大陸をモンスター界とよぶ調査が殆ど進んでない未知の場所らしい。トリコのグルメ界のまんまだな

「アニキ、今日はどうするの？」

食器を片付けると今日の予定をラディが聞いてきた。

「そうだな～まずは狩猟レベル9位のモンスターでも狩りに…」

コンッコンッ

「あ、お客さんだ。は～い今でるよ。」

誰だ？こんな朝早くから

扉の方に顔をむける。するとそこには羽根つき帽にどこかの騎士を思わせる服装の30代ほどの男がいた。

「朝早くから申し訳ございません。ギルド本部の者ですがモミジさ

んという人はここにいますか？」

「ギ、ギルド本部！？あゝ、いやゝアニ…モミジさんて人はゝ」

ラディがギルドの人から俺の名前がでて慌ててる。

ギルド？たしかモンスターの数や動きを調査してハンターに依頼するクエストを決める所だよな。

あつ、もしかして一昨日食ったガララワニか？ちゃんと受け付けしてなかったからか…

しょうがない

「俺がモミジだが…何の用があるんだ？」

ちゃんと話し合って解決するか。

「失礼、始めてお目にかかります。じつはアナタに確認したい事があるのですが…お邪魔してもよろしいでしょうか？」

□ □ □

「さて、まずは私の事です。ギルド本部モンスター部門部長スタークと申します。以後お見知りおきを。」

机に向かい合ったまま礼儀正しくくスタークは自己紹介をした。

「俺はモミジクズハラ。ハンターじゃなくて美食ハンターをやっている。」

「美食ハンター？失礼ですがハンターとはどう違うのですか？」

「俺が食いたいモンスターや食材を探して狩るんだ。見たことない食材を発見するのも楽しいしな。」

俺もこの説明面倒になってきたな。まあ自分から言い出したんだが…

「ふむ…なるほど…では一つ確認したいことがあるのですがよろしいでしょうか？」

「どうぞ。」

「では聞きます。この近くの密林でガララワニを狩ったというのはあなたでしょうか？」

やっぱりそれか

スタークが鋭い目でこちらを見てくる。

「ああ、俺だ。依頼以外で勝手に狩ったのをあんたは指摘しに来たんだろ。」

「確かにそれだけならギルドとして正式な処分をするでしょう。しかし、調査したら気になる話を聞いたのですが…貴方は素手でガララワニを狩ったという話を聞いたのですが本当ですか？」

今度は単純に疑問の表情を浮かべて聞いてきたむっ？なんか予想してた反応と違うんだが…

「そ、そうだよ！アニキは僕の目の前でガララワニを真っ二つにしちゃったんだから！本当だよ！なんならアニキ！」

ラディは一旦自分の部屋へ戻りガラワニの鱗を持ってきて

「昨日みたいに手刀で切ってよ！そしたらスタークさんも信じてくれるよ！」

ラディが僕も役に立つでしょ？みたいな顔をしてたのでとりあえず頭を叩いておいた。

「いたい！？なんで！？」

しかし一番手っ取り早い方法だな。

「ちょっと確認さしてもらいます。…確かに本物ですね。ではお願いします。」

するとスタークさんも乗り気のようにだ。

やるしかねーじゃねーか

「はいよっ…と！」

昨日のようにスパッと切る。

スタークさんは表情は変えなかったが眼は見開いて驚いてるようだ。

「…本当だったようですね。…モミジさん。じつはアナタの実力を見込んで頼みがあります。」

「頼み？俺の違法を取締りにきた訳じゃなかったのか。」

「もちろんその気で来ました。しかし、貴方が狩った理由、そして人間離れしたその身体能力。…我々が探してる『狩猟屋』になって欲しいのです。」

狩猟屋

スタークさんが言うには

稀にいる超人的な能力や技術を持った人に与えられる職業で、ハンターでは危険過ぎるモンスター討伐・捕獲や未開拓の地域を先に調査して危険な場所かどうか調べたり、普通の人には出来ない仕事をする。

だが人が少ないらしくまだ6人しか居ないらしい。

「なるほどね。」

「そんな人達いたんだ。知らなかった。」

ラディも知らなかったらしくスタークさんの話を面白そうに聞いていた。

「知らないのも無理はありません。彼らは常に未知の地域で仕事していることが多く、すべてがギルドの言うことを聞くわけでもありませんしね。」

やはりこの世界でも自分みたいな超人がいるのか
会ってみたいな

「さて、モミジさん。貴方はハンターとして登録されていないようなので普通の狩り場にもこのままでは受けられません。」

「あつ、確かに。それは困る。」

「しかし、狩猟屋として登録されれば普通の依頼も受けられる上に危険区域に顔パスで入れるようになります。さらにドンドルマでの市場の食材を格安で購入できますよ。…さて、どうされますか？」

スタークさんは少し笑みを浮かべてこちらの返答を待つ。

…わかっている癖に聞いてくるなよ。ここで断れば即ギルド本部の部長として俺を連行して処分されるんだろう。それは御免だそれに俺にとってもデメリットはない

「その話乗った！狩猟屋になってやる！」

未知の辺境の食材なんて魅力的過ぎるしな。

すると返事を聞いたスタークさんはどこからか紙を取り出し俺の目の前においた。

「ありがとうございます。では登録するのでここに名前をお願いします。」

あつ！俺、この世界の文字しらね…

「悪いがあんたが書いてくれないか？俺は文字がわからないんだ。」

「えっ？アニキ知らなかったの？」

「あ、ああ。別に知らなくても生きてこれたしな。」

「ふん。まあ村の人でも知らない人は少なくないからね。」

またラディに嘘をついてしまった。
良心が痛むぞ

「ふむ、そうでしたか。では私が書きます。モミジークズハラさんで間違いありませんね？」

軽く頷く

「はい：これで貴方は今日から狩猟屋となりました。これから貴方には危険な仕事が続いています。こちらでも出来る限りのサポートをするのでよろしくお願いしますモミジさん。」

「こちらこそよろしくスタークさん。」

互いに握手をする。スタークさんの手は硬く、永年戦ってきた人の手だった。

「ではさっそく貴方へ最初の依頼を頼みます。」

もうかよ！早いなオイ

「場所はサラ―平野。比較的危険の少ない地域ですが最近になって強力なモンスターが出現しました。」

「どんな奴だ？」

「空の王者リオレウスの変異種。より凶暴でより強力なりオレウスのボス、ドスレウスです！狩猟レベルは11とみなされました！」

□ □ □

「グロロロ…」

彼はさっきまで自分に喰いかかってきた無謀な者：赤い鱗に巨大な翼、荒々しい力を振るうリオレウスを血まみれにしていた。

彼のその身体：普通のリオレウスに比べて刺々しい紫色の甲殻、鋭い爪が何本も生えた力強い翼、二つに分かれた棘の生えた尻尾。そして通常のリオレウスの二回り大きい巨体には無数の傷後があり彼が戦歴の覇者であることを示していた。

「グキヤアアアオン…！」

彼は叫ぶ

まるで自分がこの地の王者といわんばかりにその咆哮はその空に確かな存在を示していた。

初依頼、サラ一平野！（後書き）

次からは主人公の超人っぷりがかけます！

空の覇者、ドスレウス！（前書き）

ドスレウスとの対面です。

PV50,000突破！

モンハン小説で週間アクセス4位だ…と
…

ありがとうございます！

空の覇者、ドスレウス！

サラー平野

比較的温厚な気候と自然や資源も豊富なこの地はモンスターの狩猟レベルも1〜9と、他の場所によりも低いので新人ハンターがよく装備を揃える為や経験を積む為にくる狩り場である。

「お。随分と見晴らしのいい場所じゃないか。あっ！これ、もしかしてベーコンの葉か！うわぁ食ってみたかったんだ。」

「アニキそれとさっきの縦縞メロンと一緒に食べたら美味しいよ！」

そしてそのサラー平野の草原を呑気に食べ歩きしているモミジとラディがいた。一応狩り場なのだからもう少し緊張感を持ってもらいたいのだが：

「おっ、本当だこりゃあうめえ！」

縦縞メロンの甘くジューシーな果肉とベーコンの葉の塩気がなんとも言えない旨さを出している。

「僕もここに来たときその食べ方するんだよ。美味しい植物がこちら辺にはいっぱいあるからつい食べ歩きしちゃうんだよね〜カプツ。」

と言いながらラディも実っていたホワイトアップルをかじりついて

る。

着いてからずっとこんな感じで二人とも食べているのである。

「しかしリオレウスのボスなんて見たことないんだがどんな奴だ？」

右手に縦縞メロンを左手にホワイトアップルを持ちながらラディに聞く。

今回モミジが依頼された内容はこの辺りで暴れているドスレウスの捕獲・討伐。これはG級ハンターに頼むという手もあったが生憎手が空いてる人が居なく、俺の実力も凶るとい理由で任された。

「僕も見たことないから分からないだ。まだ新人だから…。けどリオレウスの知識ならあるよ！」

「俺もリオレウスは知っているよ。スタークさんの話によればドスは紫色の体で普通の奴より大きさも凶暴さも段違いだしがそれくらいしか情報がない。けっこう無茶な依頼してくるもんだ…」

なんでもそのドスレウスは最近になって発見されたモンスターであり遭遇したハンターのチームは不意打ちされたらしく生き残ったハンターからはまともな情報が得られなかったそうだ。

「うう…今回は僕もアニキの役に立ってみせようと思ったのに…。」

「だいたいなんでお前来たんだ？言っちゃ悪いがお前の防具や装備じゃまともに通じないと思うぞ。」

本来ハンターは自分のランクまでの依頼しか受けられない。自分より上のハンターに同行する以外では災厄レベルの緊急クエストにしか行けない。

今回は俺の同行ということで着いて来たのだがあまりに危険だ。

「うっ。そ、そうかもしれないけど……リリアや村長にもやめた方がいいなんて注意されたし……けど僕はアニキと一緒にいた方が楽しいからついていきたいんだ！」

後半は力強くしゃべるラディ
相変わらず勢いだけだなく。けど

「ふーん。ま、それでいいんじゃない？俺もお前がいると飽きないしな。」

「ア、アニキ。」

その言葉を聞いて笑顔で抱き着いてくるラディ。
女の子だがどっかというと弟分みたいな感じだなー

そろそろひつぺがしてやろうとした時

辺りが暗くなった

そしてなにかが羽ばたく音

ラディもすぐに状況がわかったのか離れて双剣を取り出し構える

ドスレウスか！？

慌てて上を見るとそこには予想と違った奴がいた

ピンク色の鱗、竜のような翼、大きいクチバシ、顔を覆うエリマキ

状の耳。

ハンターの登竜門

イヤンクックが降りてきた。

「グアアア！！」

そのクチバシを開けて威嚇してくるイヤンクック。恐らくここらがテリトリーなんだろう。

まあ全然恐くないがな

「イヤンクック：！」

隣を見るとラディは少し震えていた。そういやまだドスランポスしか狩ってないんだったな。ラディにとっちゃ初めての飛竜か

「グアアア！！」

イヤンクックは降りたと同時にこちらへ向かって走ってくる。

人の全速力よりも早いのが避けられない程ではない

ラディは横に跳んで避けるが

「！？アニキ！」

俺は避けようとせず

「ラディ。耳塞げ。」

息をめいっぱい吸い込んで既に目の前までに迫っているイヤンクックに

「わっっっ！！！」

思いつきり叫んだ。

「クア！？」

その時ちよつとした余波で草が揺れイヤンクックは突然の爆音に耳をやられフラフラになっていた。

イヤンクックの弱点はその優れた聴覚であり普通のモンスターよりも音に敏感である。そこであえてハンターは大きな音を出す道具を使うことによってイヤンクックの三半規管を麻痺させて隙を作る。

もつとも地声であんな爆音

普通はだせんがな

「み、耳があゝ！」

ついでにラディの三半規管も麻痺したらしい
すまん

「さくてと…オラッ！」

指一本に力を込めて一つの弾丸にする。

そして剃を使い指を勢いに乗せてイヤンクックの額に深々と突き刺した。

「クア…ア…」

グニユリ

と生々しい感触が伝わり脳の一部分に刺さるのがわかった。

「よつと、じゃあな。」

指を引き抜くと、とどめにクチバシを掴んで地面に叩きつける。

ゴガアッ！

「グアア…！？」

しばらくクチバシが地面に突き刺さった格好で痙攣してたが動かなくなつた。

「イヤンクツクの肉ってうまそうなんだよな…ん？」

とそこである事に気付いた。イヤンクツクの背中に鋭い爪で引っ掻かれた傷跡があるのだ。

「ア、アニキ…どうしたの？」

若干まだフラフラしているラディが俺の様子に気になったのか聞いてきた。

「ラディ、こいつの背中をってみろ。でかい傷跡があるぞ。」

「あっ！本当だ。も、もしかしてドスレウスかな？もしかしてこの近くに…」

「かもしれん。もしそうだったらさっきの音で…」

「グキヤアアア！」

その声が聞こえた瞬間後ろを振り向くと

空から巨大な火球がこちらへ迫ってきていた

「！ラディ！」

「う、うん！」

慌てて左右に弾かれるように避ける二人。

ドオオオン！

その直後さっきまでいた場所がイャンクックの死体ごと轟音をたてて爆発した。

イャンクックって火に耐性あるんだけど関係なしか！

上から感じる殺気に意識を集中する。

まず目にはいつてきたのが

空を覆わんばかりの巨大な体とそれを浮かせる力強い翼
毒々しい紫色の頑強そうな甲殻

二つに分かれた尻尾

そして見たものすべてをすくませる鋭い眼光と凶悪な顔

「こいつがドスレウス…はっ！手強そうじゃねーか！」

「ぼ、僕やっぱ帰ろうかな…」

「帰れたらいいけどな。」

グキヤアアア!!
"

向こうさんも戦う気満々だね…じゃあ、喰い合おうか!

サラー平野にて二つの怪物がぶつかり合おうとしていた。

空の覇者、ドスレウス！（後書き）

こんなモンスター出して大丈夫だろうか…

イヤンクツク噛ませ犬になってしまった。

食うか食われるか、ただそれだけ（前書き）

ドスレウスとの決闘です。

食うか食われるか、ただそれだけ

グオオオウ！

ドスレウスは一吠えた後、人の頭位の高さを滑空しながらこちらへ向かってきた。そのスピードはイャンクックとは比べものにならない。

「ラディ！打ち合わせどうりだ！」

「う、うん！」

その言葉と共に互いの仕事をやる為に動く。モミジはドスレウスに向かって

ラディは下がりながら回り込む

ここに来るまでに二人はドスレウスに対面した時の対応を決めていた。

まずはモミジが軽く攻撃を加えながら相手の攻撃の種類や弱点、癖などの情報を調べていく。リオレウスとまったく同じパターンではないだろう。

「おっと！」

その為にモミジはドスレウスの翼の下を通りながら体の強度を確認めるのと邪魔になるであろう尻尾に手刀を食らわせようと接近する。

ズザザザア！

しばらく進んだドスレウスはその強靱な脚を使って地面を抉りながら急停止し降り立った。

ちょうどモミジの目の前には二つの尻尾
右の尾の先端に狙いを定めて手刀を放つ
が

ブシュッ！

「ん！？」

当たった瞬間血が吹き出しすぐに手を引っ込める。
鱗が何枚か飛び、尻尾にもダメージはあったのだろう
だが予想外だったのがこちらも手から血が流れていることだ。

ちらっと自分の手を見ると複数の細い針が刺さっており痛々しい。
リオレイアみたいに棘が生えているのか！

「グアアアア！」

ドスレウスもこちらへと顔を向けて攻撃しようと、一人入れる位の
口を開けて噛み付こうしている。

「当たるか！」

それをモミジは爆発的な脚力で地面を蹴り高く跳び上がって避ける。
そしてそのまま

「鉄塊！」

足だけを硬くして全体重をかけ背中に強烈な蹴りを叩きこむ。

ミシィ…！パキィッ

「ガ…グギヤアア！」

けっこう効いたみたいで甲殻にヒビが入ったが、決定的なダメージにはならなく振り落とされる。

「よつと。」

着地してすぐに体制を立て直す。
すると向こうは間髪入れずに尻尾を振り回してきた

「危なっ！」

巨大な尻尾がハンマーのように迫ってくるが単純な攻撃なのとその巨体があだとなりしゃがむだけでやり過ごすが、ここでも予想外の攻撃があった。

シュシュッ

尻尾の先端の棘を飛ばしてきたのだ
もちろんモミジには当たらないが…

「う、うわっ！」

後方にいて罠を仕掛けていたラディに向かって行った。

「ちっ、ラディ！」

あんにゃろラディにも注意していたのか！

ドッ！

剃を使ってラディの前に立つ

そしてイャンクックにやったように息を吸い込んで

「わっっ！！」

声の衝撃波を発し空中にあった棘に当てて落とした。

「ふゝ、けっこう力使うなこれ。ラディ罨は出来たか…」

「うゝん、耳がキーンて、耳がキーンてなってるゝ。やるなら言うてよ！」

やっぱりフラフラになってたか

ラディの役割は

接近戦は危ないので離れた所に罨を仕掛けておき、こちらが危なくなったりしたら飛び道具などで注意を寄せ罨に誘き寄せてるということを事前に決めていた。

「すまんすまん。だが罨は仕掛け終わってたみたいだな。」

「そうだよ！僕だってそれくらいはやれるよ…ってアニキ前！」

前を見るとドスレウスは首を上げた後こちらへ巨大な火球を吐いて

きた

その大きさは直径1mはある

「うおっ！リオレウスの火球よりでけえんじゃねえの！？」

「とりあえず避けるよ！」

二人とも横に動いたあとすぐに熱い空気を纏いながら火球が通り過ぎ、後ろにあった大木に当たって爆発し倒した。

「カゝ、棘やら火球やら飛ばしてくるなんて面倒な奴だな。」

「アニキだって声とか斬撃飛ばしてるけどねゝ。」

ゝ確かに

グキヤアアア！
”

今度は本体が走ってきた
ちようどいい

「アニキ！」

「ああ。」

ドスレウスは猛スピードで近づいてくる。
そして目の前に来たとき

グアアア！？
”

地面に下半身が埋まり強制的に止められた

ハンターが使う罠で、落とし穴と粘着力のあるネットが絡まり飛んで出ようにもかなりの強度がありすぐには出られない。

もっともわずか13秒程だが狩り場においてはかなりの時間だ

「行くぞラディ！首を狙え！」

「うん！」

この状態ならば暴れるが反撃はしないので思う存分攻撃に持ち込める！

ラディの武器でも通るであろう首に向かって二人で攻撃を仕掛けようとした時

違和感を感じてドスレウスを見る。

「グルル…」

すると口から赤い炎をちらつかせ首を上を持ち上げておりさっきの火球を吐き出そうとしていた。

この状態で！？だが！

こちらへ口を向けて放たれる瞬間

「させるかボケ！」

全力でアップーを決めてやった

突然口が閉じたので放たれかけた火球は…

ドガアアアン！

グオオオオア!?"

口内で派手に爆発した。

炎を吐くといっても生き物である以上完全に効かないわけではないわけではない
おまけに口内はほとんどの生き物の弱点であるのでかなりのダメージ
ジになっただろう。

口から煙をだし動きが鈍くなるドスレウス

「もらった!」

ブシュッ!

そのスキに俺の手刀が首の皮を切り裂いて

「うおりやアア!」

ズシャッ!

本能を解放して鬼人化したラディの双剣が完全に首を胴体から切り
離れた

それが空の覇者の最後であった。

□

□

□

パチパチ…

「くそー、尻尾だけかよ食っていいのは…。」

二つの尻尾の鱗や棘を取り除き何時もどうりに丸焼きにする

今回は新たな変異個体のモンスターということで死体をギルドに送って研究材料とするらしいのでギリギリ許されると思う尻尾だけいた

「はあ…僕は未だに疲れて食欲がないのに…さすがアニキだね。」

「あつたりまえだ。つーかこの為に狩りに来たんだよ俺は！なのにこれっぽっちとは！」

「やっぱりアニキってハンターとは違うね。まあそこがアニキらしいんだけどね…。」

「それが俺だからな。さくそそろいいただきま…ん？」

ただ今かぶりつこうとしていたが視線を周りの平野に向ける。

「？どうしたのアニキ？」

「いや、なんか視線を感じただけど…気のせいかな？…ま、いっかさっさと食おう。」

周りにはなんにもいなかったの

で気にしないことにして肉にかぶりつく

脂身が多くつき綺麗な霜降りが出来て口の中で旨みのある脂がとろけ上質なアプノトスの肉を上回るおいしさだった。

「うめゝ尻尾がこんなに美味しいなら胴体はどれくらい美味しいんだ？
ちよっとだけなら…」

「だゝめ。勝手にいじって怒られたら嫌でしょ？帰ったら僕がにんにく鳥の親子丼つくってあげるから。」

「マジで？食ってみたかったんだよー！ありがとラディゝ愛してるゝ。」

「なっ！ア、アニキからかわないのでよゝ！」

さっきの緊張感はどこえやら

二人は楽しく呑気に話し合ってた。

自分達を見ていた者に気付かずに

食うか食われるか、ただそれだけ（後書き）

作者のオリジナルモンスターについて

ドスレウス

飛竜種

狩猟レベル11、12

レウス系の変異個体で最近発見された種類。

生まれたときから凶暴な性格であり他の兄弟を喰い殺したりする。

性別はあるがどちらもお互いの特徴を持っており尻尾はそれぞれの
特徴で分かれている。

基本的に原種よりも大きい傾向があり甲殻も紫色で刺々しい。

虹の実と黒き獣（前書き）

トリコの有名な果物に手を出します。

虹の実と黒き獣

「ドスレウスの討伐依頼、確かに完了しました。ありがとうございます。ますモミジさん、ラディさん。これからもたびたび依頼しますのでよろしく願います。」

ドスレウスの討伐後、一旦村に帰ったあとしばらくしてスタークさんがお礼と報酬のことで話がしたいというので集会所にいるのだが周りのハンター達はなぜギルドナイトがいるのかたまにチラチラこちらを見ている。

「ああ、けっこう大変だったぜ？ 美味しい食材の依頼だったら真っ先に俺に寄越してくれよ。」

「アニキって食欲第一だね。普通は鱗とか貴重な素材をみんな欲しがるのに。」

そりゃそーだ

美味しいもん食えば強くなるから防具とか武器はあんまり必要ないしね

「では報酬金です。素材は研究の為に必要ですので渡せませんがその分も含めての額です。」

そうゆうと下から一抱えはある袋を取り出しテーブルに乗せた。ドンッ！と音がしてかなり重いのがわかる

ちなみに他のハンター達はみんな目を丸くしていた

「へーこんなにくれんのか？」

「約10万Zです。新種ということもありますので。」

「そ、そんな大金数日で稼ぐなんて…うう、アニキが遠くに感じるよ…。」

なにやらラディが落ち込んでいるが気にしないことにしよう

「では私は仕事があるのでこれで。」

報酬金を渡し終えたとスタークはさっさと帰ろうと立って背をむける。

「もう帰るのか？ギルドって所は忙しいね。」

「あ、そういえばモミジさん。」

何かを思い出したかのようにスタークは背を後ろにしたまま話しかけてきた。

「ちょっと前に聞いた話なんです…ここから東南にあるグランバ荒野のどこに『7色の味』がする実があるらしいのですが本当かはわかりません。行くかどうかは貴方次第ですが…それでは。」

それだけ言ったスタークさんは早足で扉をくぐって出て行った。
7色の味のする実って…虹の実か！？

「あら？スタークさんもう帰っちゃったの？せっかく新しい料理味見して欲しかったのに。」

それに立ち替わりで両手に湯気の立つ料理を持ったりリアさんが来

た

「リリアさん、スタークさんの事知っているのか？」

「わたしも一応ギルドの仕事やっているからね。まああんまり自分の事しゃべらない人だからよくは知らないけど。あっ、新作の料理食べる？」

目の前に置かれた料理に手をつける

金色モスの角煮は肉が柔らかく口の中でとろける
クリーム松茸のオリーブ虫パスタは濃厚なクリーム味の松茸がオリーブ虫のオリーブオイルと絡まり相性抜群だ

「美味しいなこれ！特にこのとろける角煮！」

「よかった。金色モスってあまり手に入らないのよね。…ところであの子はなんであんな暗いの？」

リリアさんはテーブルに突っ伏しているラディを指さして聞いてきた。

なにやら暗いオーラがでてるが…励ましてやるか

「ラディ、どうした？なんか悩みでもあるのか？」

聞いた瞬間ラディが顔をあげて暗い表情をみせてきた。

「ううゝアニキが遠くに感じて…僕じゃ全然届かない位置にいるからそれが悔しくて…」

口調まで暗くなっているぞ。あーもう元気なラディじゃないと調子

が狂う！

「まったく…それでも俺の相棒か？いつものお前らしくねーな。」

ピクッ

「ア、アニキ。今なんて言った！？ぼ、僕が相棒！？アニキの！？」

相棒という単語を聞いた瞬間、急に目をキラキラさせるラディ
なに？そんなに嬉しいの？

「そうだ。お前は相棒って思ってたのか？」

「そ、そんなことないよ！ぼ、僕がアニキの相棒か…相棒…ふふん、
そうだよね！アニキは僕がいなきゃしょうがないからね！」

さっさまでの暗い雰囲気はどこえやら

天真爛漫な笑顔を振り撒くいつものラディに戻った
ついでに周りの何人かは可愛らしい顔で元気な笑顔のラディに見惚
れていた。

やっぱりこっちの方がラディには似合うな

だが

スパン！

「痛い！？まただ！アニキ酷いよ！」

「しょうがないのはお前の方だアホウ。」

最後の言葉が偉そうなのでとりあえず叩いておこう

「ふふっ、やっぱりアナタ達いいコンビね。わたしが心配するまでもなかったかしら？」

そんな二人をリリアは微笑ましく見ていた。

（けどラディのもう一つの気持ち伝わるのはいつかしらね。後数年すれば色気もでると思うけど…）
ラディの恋路も心配しながら

「そういえばアニキ。さっきの7色の味の実っていう話はどのようなの？」

虹の実の事か？そりゃあ

「もちろん行くに決まってる。なぜなら美食ハンターだからな。」
原作で描かれていた最高の果物の味
確かめるしかねーだろ！

「そうだよ。アニキ、今回は僕は一緒に行かないよ。」

「ん？なんでだ？」

前回は勝手に着いてきたのにどうゆう風の吹き回しだ？

「よく考えたら僕はまだドスランポスさえ自分の力で狩ってないんだ。さっきボードを見た時ドスランポスのクエストがあってそれから考えてたんだ。」

「ふむふむ。」

「だからまずドラゴスを倒して自分を高めたい。アニキには遠く及ばないけど少しでもアニキの役のように立派なハンターになるために僕、強くなりたいんだ。」

いつになく真剣な顔で話すラディ

こいつもいろいろ考えて思っているんだな…

「わかった。だけど死ぬなよ、俺もお前の為に実を採ってきて食わせてやるから。」

「アニキ…うん！」

ならば俺がやりたい事

ラディがやりたい事をそれぞれやるだけだ。

「じゃあ僕準備して行ってくるよ！リリア、クエストの依頼よろしくね！」

「はいはい分かっているわよ。そんなに焦らなくていいから。」

その言葉も聞かずにラディは扉を開けて行ってしまった。

「さうて俺も行くか。たしか東南のグランバ荒野だったけ。虹の実楽しみだな。」

「あら、私も食べてみたいわねその虹の実っていうの。」

色っぽい、そして妖しい声が聞こえたので振り向くとそこには村長の八雲紫がいつの間にかいた

「やゝユカリさん。虹の実に興味がありません？」

「ええ、珍しい果物って聞いたことがあるから食べてみたいのよね。美食ハンターさん、村長の為に採ってきてくれないかしら？ふふっ。」

相変わらず人を惑わす雰囲気と容姿で微笑みんでくる
まったく村長に頼まれたら断れないな

「わかりました美人の村長さん。自分の為に頑張りますよっ」と

「ふふっ、素直じゃないわね。あとアナタにちょっと注意してほしいことがあるの。」

後半は少し真剣な顔になったのでちゃんと聞く。

「なんですか？」

「ここ最近ハンターや商人達の中である話が持ち上がっているんだけど…狩り場に見たことない黒い獣をたまに見かけるらしいのよ。」

「黒い獣？」

「そう、だから気をつけてね。アナタが強いのは知ってるけど無敵ではないから。」

それだけ言うともた微笑んだ顔になって扉をくぐって行った。

「黒い獣、ねえ…。」

虹の実探すのに障害にならなきゃいいがな

不安と楽しみがまじった表情をモミジは浮かべてた。

虹の実と黒き獣（後書き）

金色モスってモンハンにいそうだなく。

砂漠と溪谷のグランバ荒野（前書き）

遅くなりました。

今回はバトルはありません。

砂漠と溪谷のグランバ荒野

ズシン…ズシン…

「こりゃスゲ〜。やっぱりこの世界は俺の想像を超えてるな。」

モミジはグランバ荒野へ行く足がないか探して途中で寄るといいう商人の乗り物に乗せてもらっているのだが…

ズシン…ズシン…

密林に出来た道を、人など一踏みで潰せる大きな4本の足と、みるからに重厚な平べったい甲羅を背負った巨大な亀の背中に乗って進んでいた。

背中には馬車に乗ったようなものを設置しており商品であろう荷物や自分と同じように目的地まで乗せて行ってもらうハンターや村人が十数人ほどいる。

「いよう、あんちゃんこいつを見るのは初めてかい？」

常識外れの亀に感動していると近くにいた村人の気さくなおっちゃんの声が掛けてきた。

「ああ、こんなでかい亀に乗って移動だなんて想像してなかったよ。それくらい危険なのかここら辺は？」

「おや？知らなかったのかい？ここいらは平均狩猟レベル7のモンスターと頻繁に遭遇するんだ。だけどヤクモ村から次の街までは一

番の近道だからこの狩猟レベル15の万年ガメを利用して時間を圧縮しているってわけだ。」

おっちゃんの話によるとこの万年ガメはモンスターとしてはかなりの強さだが非常にのんびりした生態で餌を与えていればだいたいの言う事はきくので馬車の代わりになるらしい
なるほどね〜

「ところであんちゃんはグランバ荒野に行くハンターかい？その背負っている太刀からみて。」

今俺はグラハムから一つの太刀を借りている。素手で触れないモンスター対策として
形は普通の刀の刀身と長さを大きくした感じだが…重さが半端ないグラハムいわく普通に100kg位はあるらしいので持ってるだけでかなりの運動になる

「まあ、そんな感じだよ。おっちゃんはドンドルマまで？」

「おうとも。ドンドルマに俺の娘がハンターとして住んでいるんだがここ最近会ってなくてな…でも先日手紙がきて久しぶりに会えるって事になったんだよ！父親の俺が言うのもなんなんだが美人でいい性格だから変な男が寄ってこないか心配でたまらないんだ…シルク大丈夫かな〜。」

「ははっ、やっぱり自分の娘がハンターなんて危険な仕事に就いてると心配だよな。」

そんな話をおっちゃんとしていると

「おーい！グランバ荒野に降りる人は準備してくれ！もうすぐ着くぞー！」

手綱を取っていた商人の兄ちゃんが言ってきたので前を見ると荒々しく広大な溪谷と平地が見えてきた。

グランバ荒野

巨大な溪谷と岩だらけの平地が形成する険しい地域であり昼は容赦ない日差しが差し込み、夜は氷点下まで温度がさがる過酷な気候をしているので当然そこに住むモンスターも強力なものが多く狩猟レベルは7〜12と高い

また鉱石も豊富で金や結晶化した生物の化石などがでる

「そんじゃ商人の兄ちゃんありがとうなー！あと親バカのおっちゃんも。」

「帰りは2日後位になるからな。そこらへんよろしくな。」

「親バカなのはみんなだよハンターのあんちゃん！そんじゃ死なないようにな。」

グランバ荒野への分かれ道で降ろしてもらいおっちゃん達にお礼を言いまた亀はゆっくりと進んで行った。

その時俺以外にもハンターが何人か降りてきたのだが：

「あっ！お前はよく見たら俺の大剣を壊した野郎じゃないか！」

その中にこの前ルビスの賭けに負けたキザヤローがいた。

「あ、お前いたんだ。えーと名前はバ、バ、バントだっけ？ バイトだっけ？ バカだっけ？」

「どれも違うわ！ しかも最後は完璧にわざとだろ！？ バルトだバルト！ ヤクモ村の数少ない上位ハンターのバルト様だ！」

相変わらずの上から目線だなこいつ

「あーそうだったな。降りたってことはお前もなんかのクエストかバン…バルト。」

「今間違いかけたよな？ まあいい、教えてやる。今回俺が狩るモンスターはスナザメだ！」

なにやら自慢げにモンスターの名前を言ったが、ごめん知らない

「えーとごめん、スナザメって知らないんだけどなに？」

質問してみるとバルトは一瞬呆けた顔をしたが次には嫌ったらしい笑みを浮かべてしゃべり始めた

「はあっ？ お前知らねーの？ スナザメってのは雄雌のつがいで砂漠を泳いでいる上位モンスターだ。それを狩るってことは俺がいかに優秀なハンターってことが分かるだろ？」

うわあーまじでウザいよこいつ。なに？ 殴っていい？

「ふーん…じゃあ頑張れよ。俺は目的の物を探すから。あつ、それ

とルビスには手を出すんじゃないぞバル…バカ。」

それだけ言い残すとさっさと崖を跳んで登って行く
後ろから「なんでバカって言い直した!? バルトで良かったじゃん
!?!」って聞こえるが気にしない

「よっと、おお？」

崖を登るとそこからは広大な岩肌とところどころに砂原が広がって
おり厳しくも美しい風景をつくっていたが…

「あっあちいゝ。」

日陰から出たことにより直に受けた日光が容赦なく差ししてきた。

「こりゃ大変になりそうだな…。」

くバルトサイドく

「まったくあの野郎、俺の大剣を壊した上にバカ呼ばりしやがって
…おまけにルビスに手を出すな? なに言ってるやがる。俺とルビスは
恋人だというのに。」

この前の賭けで負けたことなどすっかり忘れているバルトは未だに
ルビスへの求愛を止めないようだ。性格以外ならモテる要素がある
のだが治りそうにない。実に残念だ。

「ふん。まあ今回のクエストで成功すればあいつも俺が上だと分か
るだろう。ハッハッハ!…ん!?!」

バカのように笑っていると突然上を何かの影が通った
バルトもさすがプロのハンターらしく背中のカニの缺のような大剣
を素早く構え崖の上を見る

「な、なんだ？あのモンスターは？」

そこには日差しが強くてよく見えなかったが
黒い体の4本足で堂々と立っている何かがいた

（あ、あれってまさか最近狩り場に出てくる黒い獣か！？くそっ！
なんでここに！？）

少しも目を離さず剣を身構える。

だが向こうはこちらを気にした様子もなくまた他の崖に跳び移って
見えなくなった。

「な、なんだったんだあいつ。こっちは嫌な汗かいたぞ…とりあえ
ず俺もスナザメを探しに行くか…。」

気になりながらも自分の仕事の為に歩くバルト
だが足取りはどこかフラフラしており不安定だった。

砂漠と溪谷のグランバ荒野（後書き）

GFさんのアイデアモンスターに使わせてもらいます！
いろいろと設定を弄らせてもらって（笑）

弓使いとの遭遇（前書き）

遅くなつてすいません！約二週間空いてしまった…

弓使いとの遭遇

ジュ〜…パチパチ…

「う〜ん…困ったな。」

溪谷の洞窟の入り口に出来た影に座り込んで呟くモミジ。目の前にはアプケロスと呼ばれる、乾燥地帯に住む硬い甲羅をもった草食竜をお馴染みの丸焼きにしている。

「情報がまるでない…ちよつと無謀だったかな〜あむつ。」

いい具合に焼けた肉にかぶりつくモミジ。

バトルと分かれた後、しばらく溪谷を中心に探していたが見えるのは荒々しい岩肌と小型モンスターしかいなく、虹の実の木はおろか植物もまばらにしか点在しなかった。

「…プハァ〜、なかなか美味かったな。さ〜てこれからどうしようか。もう少しここら辺探してみる…ん？」

100キロ近い肉を数分で平らげ立ち上がると声のようなものが聞こえた。耳を澄ますとなにやら後ろの洞窟から聞こえてる。

「気になるな…行ってみるか。モンスターなら美味しい奴がいいな〜。」

あれだけ食った直後に言う言葉とは思えない事を言いながら洞窟に向かった。

洞窟内は入り口は狭くなっていたが中に行くにつれてなかなか広い空間をつくっていた。何処から日の光が薄く差ししており、光る苔や蛍のように発光する虫の光が中にある綺麗な湖に反射して美しい風景になっていた。

もつとも、巨大なヤスデの群れとそれに弓矢で応戦する一人のハンターがそれを台無しにしていたが。

「キシヤアアア！」

「あれは…オオヤスデか？ つーかあんだけいると気持ちわりいな…。」

軽く20匹程くらいの巨大ヤスデが集まっている風景は誰だって嫌なものだろう

「まあ、聞きたいこともあるしとりあえず助太刀…だ！」

50mくらいの距離を一蹴りで一気に詰め、そして一番手前にいるオオヤスデに太刀で抜刀術を放つ。100キロの太刀を持った人間が出来る技とは思えないが

「キシヤ…アア！」

胴体からキレイに二つになったオオヤスデ、だが上半身はまだ死んでおらずこちらへ向かって跳びかかってきた。

「ちっ！ 生命力ありすぎだ！」

それを真正面から嵐脚を繰り出し、鎌風で頭から裂く。さすがに今度は動かなかった。

「!? 誰ですか!？」

弓使いのハンターはいきなり現れてオオヤスデを切り裂いた俺に驚いて更に慌てた表情をする。

近くで見ると女のハンターということがわかった。

綺麗な青色の目にキリッとした顔つき

キャップのような帽子と大きいスカートのような女性用の防具がそれを決定付けている。

つと、今は観察している場合じゃないな

「いろいろと聞きたいのはわかるがとりあえず今は逃げるのが大事だ。なにか異論は!？」

「…ないです! なら急ぎましょう!?! ここはコイツ等の巣みたいだからまだまだ増えます…よっ!」

「ギィィィ!?!」

返事をしながらも弓使いはオオヤスデの眉間に矢を貫通させて数を少なくしていく。

周りを見ると天井や壁の穴からどんどん仲間が這い出てきており一向に減る様子がない。おまけに気持ち悪っ!

「キシヤアアア!」

と、その内の一匹が襲ってきた。
ちようどいい!

そいつを避けると後ろから出口に向かって

「オラァァ！」

思いつき蹴り飛ばした。

「ギィィィ！？　　ギヤツ！？　　”

蹴られたオオヤスデは直線上の仲間を巻き込みながら吹っ飛んでゆき、岩に叩きつけられ頭が粉碎した。

「なっ！オオヤスデを！？」

またもや驚かれるモミジ。

うん、さすがに慣れてきた

ともかく今なら出口まで一直線で行ける。

「さっさと行くぞ！」

「あ！はい！」

戸惑いながらもハンターは一緒に着いてきた。

□ □ □

「ふう…とりあえず撒いたようだな。大丈夫かあんた？」

しばらく走って洞窟の奥に來るとオオヤスデは着いて来なかった。

「はあ…ええ大丈夫です。助かりました。あのままでは少し危なか

っので…。」

けっこう走ったのだが弓使いのハンターはあまり疲れてないように見える。さっきの弓の腕からみてもけっこうな手練れのハンターだとわかる。

「いや、俺も聞きたい事があったんでな。おっと、俺の事はモミジって呼んでくれ。」

「私はシルクっています。私からもアナタにいろいろと質問したいのですが…。」

あゝ、だろうな。

さっきから少し警戒しているしな。

「いえ、やっぱりアナタの質問に答えてからにします。それで？聞きたい事とは？」

きびきびとした口調で答えるシルクさん。年齢わかんないけどなんか、さんってつけたくなる雰囲気だ。

「えーっとこちら辺でかい実が生った木を見なかったか？もしくはその情報を知らないか？」

「木の実…いえ、残念ながらそのようなものは。」

まあ、ダメ元だったしな

「あゝそうか。知らないならいいや、ありがとうな。あ、今度はそっちの質問に答えるよ。」

「そうですか、では最初に聞きたいのですが…」

~~~~~

「なるほど…モミジさんは美食ハンターという事をやっているんですね。」

シルクには俺の身体能力や美食屋としての事を一通り教えた。その時体の事になると一瞬目が光ってたような気がしてた。

「まっ、そんなところ。今回は私用だけどね。で、シルクさんはモンスターの討伐かい？」

「いえ、私は砂漠の何処かにある楽園、ナイトオアシス”の発見です。」

「ナイトオアシス？なんだそりゃ？」

「私も良くは知らないんですが…なんでも気象や地形の関係で三日月の夜にしか現れない幻に近いオアシスだそうです。そのオアシスには古代の遺跡があるとか見たこともない食べ物があるなんて話がありますか…。」

夜にしか現れないオアシス…なんて冒険心がくすぐられるんだ！

「なあ、俺もそのオアシス探しに付き合ってもいいか？」

「えっ？…いいですけどなぜ？」

「興味があるってのもあるけどよ、見たこともない食い物ってもしかしたら俺が探してる奴かもしれないからな。」

今ある情報では一番可能性があるしな

「わかりました。私としても助かりますしね。ではよろしくお願いしますモミジさん。」

キャップを外しながら礼儀正しくお辞儀をしてくるシルク。それと同時に背中まである紫がかった黒い髪が滑り落ちる。美人だから様になっているな

「こちらこそよろしくなシルク。」

こちらにも慣れないお辞儀を返す。

「はい。では進みましょうか。この先は砂漠への出口になっていますから。」

「はいよう。」

シルクの後に続けてモミジも歩き出した。

## 弓使いとの遭遇（後書き）

クールデレも好きだー！

詳しいキャラの容姿とか書いた方がいいですかね？

## キャラ詳細（前書き）

軽いキャラ詳細です。

読まなくても本編には支障ありません。

## キャラ詳細

葛原 紅葉

身長 175 cm

年齢 19歳

顔は中の上位の精悍な顔つき。髪は軽い天パ。

分かる人は銀魂の銀さんの目が死んでなく天パが軽くて黒髪バージヨンとってください。

体格は細くはないがゴツ過ぎない程度。

服装は赤い羽織の下に黒いシャツを着ていて革のブーツを履いている。分かる人はFFXのアーロンの服を思い浮かべてください。

ラディIIハンクル

身長 155 cm

年齢 15歳

顔つきはパツチリとした茶色の目で中性的な可愛い顔。

髪はショートカットで黒髪。

肌は小麦色で健康的な色。

体型は少し幼さが残る体つきで少女といった方がしっくりくる。

武器は双剣、防具は今現在ハンターシリーズ。普段はいつも黄色のバンダナを頭に巻いており、服はTシャツと短パンを着ておりたびたび男の子と間違われたりする。



モデルはサモンナイトクラフトソード物語のラジィ。つーかまんまです。

シルクⅡクロスロード

身長 165cm

年齢 17歳

顔つきは青色でどこか冷たい目つきと鼻筋を通った人形のような美人。

髪は背中までかかる長さで、艶のある紫がかった黒髪。

体型はいわゆるボンキュッボンで女性が憧れる体つき。本人は未だに体の一部分が成長しているので困っている。

武器は弓、愛用している防具はスカートが特徴的なレイアシリーズ。普段は星型の飾りが付いた髪留めでポニーテールにしており、服は白の長シャツと黒のズボンという簡素な服装。

モデルはテイルズオブアビスのティア。

## 砂漠の主（前書き）

なんか虹の実編が長くなりそうです。

PV150,000突破アア！

見てくれた人ありがとうございます！

## 砂漠の主

ナイトオアシス

広大なグランバ荒野にある約3分の1を示す砂漠のどこかにあるという幻に近いオアシスである。

通常のオアシスと違い、地形や気象の関係があるのか三日月の夜にしか現れない上に場所も特定されず更に砂漠特有の危険なモンスターが徘徊する所なので、発見したというケースも歴史的に非常に少ない。

そしてその幻のオアシスを探すという依頼は本来ギルドの人間や、極一部の物好きな冒険家ぐらいしか受けないものであるが今回受けたのは彼女、シルクⅡクロスロードという非常に優秀なG級ハンターであった。

「シルク サイド」

さて、困りましたね…今回どこかの金持ちの依頼ということが多めの報酬金が手に入るのはよしとして、オアシスに関しての情報をロクに持ち合わせてないとは…

ある程度場所の特定などしてから依頼してほしいものですね。

彼女がこの依頼を受けた一番の理由は興味本意からだ。

この世界では不思議な生き物や未知の辺境、そして古代から伝わる自然の神秘や知識など数えればきりが無い程の魅力を彼女は常に探

求しており今回の依頼も誰より早く受けたのだ。

それにしても…思わぬ同行人が増えましたね。

狭い洞窟を歩きながらシルクは後ろを振り返りもう一人の同行人を確認する。

「いやゝシルクがいて助かったよう。こっちは探し物の情報が一切なかったからさ、そのナイトオアシスとやらが今一番有力な情報だからな。」

変わった赤い東方で言う着物？のようなものを羽織り、太刀を背負った彼を見る。

「いえ…こちらとしても助かります。なにせ発見出来るというのが三日月の夜の砂漠という情報しかありませんし、あの広い砂漠を探すとなると一人では困難になりそうなので…。」

「一人？パーティーは組んでないのか？」

「パーティーは…自分で言うのもあれなんですが…寄って来るのはどれも男性ばかりで…私の身体目当てというか…。」

そうなのだ

いつも寄って来るのはわたしをハンターとしてパーティーに欲しいといって、いやらしい目で見たりしてくる輩ばかりなのでずっと一人でやってきたのだ。

う、自分で言うのと恥ずかしいですね…

「あゝそうか…そりゃ災難だったな。」

「はい：あつ、出口が見えて来ましたよ。」

前を向くと出口の穴が見えてきた。

さて、できれば明後日までには見つけられればいいのですが：。あまり長居出来るような場所ではありませんから。

ふふっ、でも彼には興味がありますからもう少しいたいという気持ちもあるんですね。

く紅葉 サイドく

洞窟をでて最初に観たものは、広がる砂漠とそれを月光で照らす三日月が浮かぶ夜景だった。

「おお：なかなかキレイな風景だけど：ちょっと寒いな。」

とても素晴らしい風景だが昼間と違って焼くような日差しを砂漠は地中に溜め込まず、すべて反射しているので気温は低く息が白くなるほど寒い。

あらかじめホットドリンクという一定時間身体を暖める赤く辛い液体を飲んでいたので支障はないのだがやはり昼間との温度差に驚かされる。

「では行きましょう。あまり長時間居られる所ではありませんから。」

「ああ。」

シルクと共に寒い砂漠を歩き始めた。

ザッ　ザッ　ザッ

「おかしい…」

30分程歩いたのだが見渡す限り砂ばかりの風景に飽きている時に急にシルクが立ち止まって呟やいた。

「おかしい？何がだシルク。あむっ。」

さっき採った熱帯イチゴを口に放り込みながら聞く。

おっ、弾力のあるイチゴで甘いな

「モミジさん、気付きませんか？さっきからモンスターがいないのに。普通なら小型の怪鳥や草食獣が少なからずいるんですが…」

「たまたま…じゃないみたいだな。」

シルクは熟練のハンターらしいし俺よりも狩り場の雰囲気を感じ方には敏感だろうからこれは異常なことなんだろうな

「ええ、気を付けてください。もしかしたらこの辺りに強力なモンスターがいるのかもしれないので…っ!？」

「うおっ!」

その時いきなり何かがモミジ達の間を通って行った。

ザザザザ

良く見るとそれは巨大な魚の背鰭のようなもので砂をかき分けながらかなりのスピードを出している。

と、しばらく見ていたら向きを変えてこちらへ向かってきた。

「あれは…スナザメ！」

シルクは素早く自身の武器である弓を展開しいつでも行動出来るように構える。

「スナザメ？…あっ！あのバカの討伐モンスターか！」

「誰がバカじゃボケー！」

後ろを振り向くとさっき別れたバル…バカが必死に走ってきた。

「なんだお前、まだ狩ってなかったのか？」

「ふん！勘違いするな。つがいの片方は既に狩ってやったわ！」

またもや偉そうな態度をとるバルト。

うぜえええ！

「…とりあえず二人共、来ますよ。」

シルクもバルトの態度に少々呆れた表情をしつつ、相手から目を離さない。

「む、誰だあんたは……はっ！ 美しいお嬢さん。後で俺様といっしょにお話ししようぜ？」

美人と解った瞬間いきなりナンパしやがったぞこのやろう

「ではこの俺の華麗な大剣さばきをとくとみよ！」

そう言って無骨な大剣を抜きながら背鰭に突っ込んでゆくバルト。

それを止めようか悩んでいると突如向こうの動きが止まった。

「ん？」

それと同時に地響きになり、地面からなにかが飛び出してきた。

「ぬおっ！」

それに驚いて尻餅をつくバルト。

そして出てきたものが露になった。

「ギシャアアア！」

全長5mはある茶色のざらざらしている肌に鋭い歯がズラリ並んでいるのが見える大きな口、鮫に良く似たモンスターであるスナザメがいた。

「これは……！」

「な、なんじゃありゃあ！」



だが驚いたのはそこではなく、そのスナザメを挟んで持ち上げているゴツい巨大なハサミだった。

「このハサミは…！」

シルクも流石に驚いているようで目を見開いている。

ドスッ

「ガッ！？」

更にスナザメの背中に何か細く鋭い針が刺さり動きが止まる。

そしてハサミでスナザメは投げ飛ばされ、同時に再び地響きがし、目の前の砂が盛り上がりつつ新たな影が現れた。

スナザメが小さく見える程の巨大な甲殻に覆われた黄色と茶色の斑模様の身体

どんな獲物も逃さない頑強なハサミと長く先端には鋭い針となぜか複眼と口が付いた尾

そして4つの複眼と鋭く大きい牙が生えた口

巨大な蠍が現れた。

「くそっ！なんで最近乱入してくる奴が多いんだよ！」

「シャアアアア！」

## 砂漠の主（後書き）

しまった！パターンが同じになっているorn

すみません…

**幻の楽園 ナイトオアシス（前書き）**

多少のご都合主義はご勘弁を…

※3／31

修正しました。

## 幻の楽園 ナイトオアシス

ヤクモ村集会所

「…はういクエスト受注確認しました。お二人様ご案内です。  
「クレオパピオン20匹の捕獲」がんばってくださいね。」

いつもどおりにギルドの受付嬢として素敵な笑顔で仕事をするリリア  
アラ

しかしハンター二人を見送ると気の抜けた顔になり、ダルそうにカ  
ウンターに突っ伏した。

「あゝ今夜は人がいないわね。まあ私は怠けられるからいいんだ  
けど。」

普段は毎晩ハンターや村人がギルド以外にも酒場として利用するの  
だが今夜は珍しく誰もおらずリリアは暇を持て余してた。

「あら、珍しく人がいないわね。随分暇そうねリリア。」

「あ、ヤクモ村長。」

声を掛けてきたのはこの村の発祥人である八雲紫。東方の人間から  
しても変わった着物と帽子を着て扇子をいつも持ち歩き、銀色の長  
い髪と誰もが美人と呼ぶ顔、そして服の上からでもわかる拔群のス  
タイルを持つこの村の長。

「そうなんですよ。村長と話し相手になってくださいよ。」

「そうね…じゃあ最近入ってきた彼についてアナタはどう思う？」

彼、というのはたぶん自分を美食ハンターだと言う変わったあの彼のことだろう。

「モミジくんのことですか？ うーん、変わってますけど悪い人ではないと思いますよ？ ガララワニを素手で倒して目の前で鱗を切ったのは驚きましたし、ハンターに登録してなかったのが意外でしたよ。」

素手でモンスターを倒すなんてG級ハンターでも無理だろう。それをあっさりと腹が減ったから狩ったと言ったのだ。少なくともあんな人初めてである。

「そうよね…でもなぜいままで彼の噂や話がなかったのかしら？ そんなデタラメな身体能力を持っているのに…。」

「あ、確かに。うーん、なにやら謎が多き男ですねモミジくん。戻ってきた時に村長権限で聞き出してみたらどうですか？」

ニヤニヤと意地の悪い表情をしながらけっこうとんでもない提案をするリリアラ

そしてそれを聞いて妖しい笑みを浮かべる八雲紫  
はたから見れば二人共美人なのでそれもあって悪女のような雰囲気を出している。

「あら良いわねその提案。ふふっ、彼が言っていた、虹の実”っていうのも楽しみだし戻ってくるのが待ち遠しいわ。」

怪しい、そして妖しい笑顔の村長  
はつきり言ってSである。

そんなヤクモ村の村長を見ながらリリアは思う  
(けど一番謎が多いのは村長なんですけどね…とりあえず一体何歳  
なんだろう?)

そんなこんなで静かな夜を過ごす二人であった。

同時刻 グランバ荒野砂漠エリア

ザザザザ…

夜の砂漠を巨大な蠍がかなりのスピードで走っていた

「いやーこれなら効率よく探せるな。良かったなシルク。」

「はい、そうですね。」

その背中にモミジとシルクの二人を乗せて。

ちなみになぜバルトがいなかったかとゆうと痺れて動けないスナザメの  
処理と、シルクをしつこくナンパしてくるので二人で殴ってのぼし  
ている内にさっさと進んだからだ。

「それにしてもモミジさん…あなた一体何者ですか？威嚇だけでト  
ロルスコーピオンを退ける人間なんて初めて見ましたよ？」

トロルスコーピオン

ただ今モミジ達が足に使っている巨大な蠍でありこのグランバ荒野で食物連鎖の上位に当たる強力なモンスターである。狩猟レベルは成長により上がり、最大でレベルは13程となる。

「ああ、自分でも驚いているんだよ。まっ、コイツもおとなしい性格で助かったよ。」

紅葉のやったことは至極簡単で自分という存在の雰囲気を出したただけだが効果は十分だったらしく、それだけで向こうは縮み上がってしまいこちらに服従した。その時シルクやバルトも紅葉から後退ってたが。

「はあ…ホントに規格外ですねあなたは。…一度徹底的に調べてみたいものですね…。」

なにやらシルクが擦り寄ってきて目を怪しく光らせて言ってくるの  
で思わずモミジは悪寒が走る。普段なら美人に寄られて悪い気分など  
しないのだが…

「ま、ま、とにかく目的の物探そうや。時間はそこまでないんだからな。」

「む、そうでしたね。今はナイトオアシスを探すことにしましょう。」

今は、って諦めてないのかよ…ん？

急に立ち上がり辺りを見渡す紅葉。

「どうしましたか？何か見つかりましたか？」

紅葉と同じようシルクにも辺りを見渡すが砂漠以外特に何もない。

「いや…なんか嗅いだことのない甘い匂いがする。」

「匂い…ですか。」

「ああ、多分シルクは分かんないだろうな、俺は嗅覚がいいからなんとなく分かったんだが。行ってみるか？」

「…行ってみましょう。この状況ならわずかな事でも手がかりですからね。」

シルクも幻のオアシスについての情報は皆無に等しいので紅葉の身体能力と勘に賭けてみた。

「よし、ならいくぞトル！全速☆前進だぁー！」

「…トルって名前ですか？」

しばらく匂いをたどってゆくとなにやら巨大な岩の壁が砂漠の真ん中にそびえ立っていた。

その近くに来るとトルを止めて二人共降りる。



「ジャアア…」

そしてそのままトルはどこかへ逃げてしまった。

「さて、ここから匂いをするんだが…こいつらはなんなんだ？」

近づいて分かったことだがキラキラした羽を持つ蝶が何百匹も舞っていた。

「これは…！三日月蝶です！三日月の夜にしか産卵と移動をしない、絶滅したと思われていた蝶ですよ！」

シルクを見ると今日一番の笑顔とテンションをしていたので少々びっくりしてしまった。

「でも…おかしいですね。三日月蝶はキレイな水と緑がある所にしかないはずなんです…。」

当たり前だが砂漠の真ん中にそんな所などない。なら考えられることは絞られてくる。

紅葉は匂いをする方向へと壁に沿って歩いてゆく。  
しばらくすると一段と甘い匂いと三日月蝶の多い一ヶ所へきた。

「ここだな…おや？」

壁を見ると一匹、一匹と三日月蝶が飛び出してくる場所があり一見すると分からないが岩の色が変わっている。

「はーん読めたぞ。RPGでの定石だ…なっ！」

その部分の窪みに指を入れて引っ張るとガコッ！っという音とともに人ひとり位の大きさの穴が現れた。

「おーいシルク！こっち来いよ。」

未だに三日月蝶に夢中になっていたシルクに声を掛ける。

「なんですか…これは？」

「たぶんビンゴだぜ。この先に絶対なにかあるぞ。」

そういつてくぐりだす紅葉。それに一瞬ためらったがシルクも着いて行く。

穴は大して長くなかったのですぐに出口が見えた。

「こいつは…なんとまあエライもんだ。」

「キレイ…。」

出口を出て見えたものはまさに絶景だった。

砂漠にはまずない一面の緑。それもみずみずしく乾燥地帯特有の植物ではなくいろんな種類があり大きな果物も実っている。

そして空には大量の三日月蝶が月光の光を浴びて空を覆わんばかりにおり幻想的である。

「す、すごいわ！この大量の三日月蝶が醸し出す風景！更にこの植物達！どれも見たことない奴や珍しい種類ばかり…ふふふ！これが幻の楽園、ナイトオアシス！」

最初に会った時とだいぶ性格が違うシルクにちよつと引いている紅

葉はそれとは違うものに目を惹かれていた。

恐らく周りを囲むようにされて岩盤がそびえ立っているおかげで飛竜など一部の存在以外から干渉されないことがこのオアシスをつくったのであろう。

それに三日月の夜しか見つけられないというのもここに住む三日月蝶の通り道である穴がその日しか現れないからそう言われてきたのだ。

だが気になっているのは別の物だ。

中央にある大きな湖とそして真ん中に生えている一本の木。その先端から四つに別れた枝の先には桃に似た形の木の実  
虹の実がそこに生えていた。

「やっと見つけたぜ虹の実！ヒヤッハー！」

嬉しさのあまり濡れるのも忘れて虹の実に近寄る紅葉。

木に登って実を一つもぎ取る。大人一人分はある大きさとその重量感  
は流石は最高の果物と言えるだろう。

と、喜んでいるとふと気が付いた。

「あれ？なんで実が三つしかないんだ？」

今紅葉が持っている虹の実を含めて三つしかない。だがそれはおかしい、虹の実はず四つ実っているはずだ。

ということは：誰かが先に採ったのか？

と、思案していると視界になにかがちらついた。

そちらへ視線を移すと高くそびえ立った壁の上になにかが実の一つ

を持っていた。

それは紅葉の視力だから見えたのだがとても予想外なものだった。しつかりとした四本足で立ち、黒く靡く毛並みをしておりそれに映える黄金の瞳をこちらへ向けたトリコに出てくる狼

バトルウルフにそっくりな奴が虹の実をくわえてこちらを見ていた。

「バトルウルフ…！？でも、色が違うぞ！？」

原作では白色だったが今見えているのは明らかに黒だ。

しばらくこちらを睨んでいたが敵意はないとみたのか、視線を移しジャンプをして消えてしまった。

ハハハッ…まあとりあえず…

「おいしいシルク。」

せわしなく動きまわる弓使いに声を掛けて寄っていく。

早く帰ってコイツを食おう！

## 幻の楽園 ナイトオアシス（後書き）

オリジナルモンスター紹介

スナザメ（GFさんのアイディア）

魚竜種

普段は捕食意外は滅多に地上に姿を現さず刃のように鋭い背鰭だけを出して砂の中を泳いでいる。

また、つがいであることが多いのでコンビネーションに気を付けないといけない。肝が珍味らしい。

捕獲レベル10（ただし、つがいの時）

トロルスコーピオン

甲殻種

巨大なハサミともう一つの顔が特徴的な巨大蠍。普段は砂の中に尻尾だけを出して隠れおり、地上の振動や尻尾の目で獲物を見つけて、同じく尻尾の強力な麻痺の毒針とハサミで捕獲する。ハサミの肉はプリプリして極上の海老に近い味。

狩猟レベル13

三日月蝶

甲殻種

三日月の夜にしか繁殖活動と移動をしない不思議な生態の蝶。月光に当てると宝石のような光を放つので高値で取引されており、乱獲のせいで絶滅にいやられた。

狩猟レベル10（発見が困難なのでこのレベル。狩るならレベル1）

## メインのデザート（前書き）

遅くなってすいません！寮への引っ越しなどで…

それでは

## メインのデザート

ギルド本部のとある一室

本棚や机の上には様々な資料が溢れんばかりに置いてあり、その中で一つの書類を凝視している中年位の男、ギルドのモンスター部門部長であるスタークがいた。

「…黒の狼…やはりバトルウルフか…？しかし…」

その書類には最近目撃されるようになった黒の獣についての情報が書かれていた。

そしてどれもが長く黒い毛並の狼、絶滅したはずのバトルウルフに酷似しているというものだ。

だがスタークが一番問題視しているのは絶滅したはずというのもあるがその体が黒だったということだ。

本来バトルウルフは白い毛並らしいのだが黒ということは突然変異体、または亜種ということになる。

これはハンターやギルドの研究者などにとってはたまらないだろう。なんせただでさえ数少ない種の亜種だ。その素材や生態を調べる為に狩るやつも出てくるだろう。

それはギルドにとっても同じことだ。しかし狩るということは迂闊には出来ない。バトルウルフが高い戦闘力を持っているというのもあるがもしかしたら原種、亜種と共に貴重な一匹なのかもしれないからだ。



ならばどうするか？スタークは考えた挙げ句最初に思いついた事に決定した。

「やはり生け捕りとなると…“奴”しか思いつかな。」

すぐさまドアに向かい“奴”へと依頼しに行く。早くしなければハインターか目的どちらかに支障がでるかもしれないからだ。

「さて…今回は受けてくれるか…最初の狩猟屋よ？」

重い調子で呟やいたスタークは部屋をあとにした。

ところ変わってヤクモ村 集会所

「…ってな事で虹の実を持って帰ったわけだ。」

「はあく相変わらずやる事が規格外だねアニキ。でも僕も見えたかったなくそのナイトオアシスを。」

「なくに、場所は覚えたんだから次の機会に連れてってやるよ。」

「ホント？約束だからね！」

紅葉とシルクはナイトオアシスを十分堪能し、2日後の迎えで帰ってきた。

しかしシルクは

「こんな素晴らしい場所はあまり人に知られない方がいい。」

と言ってクエストは失敗ということにするらしい。

お礼として虹の実を半分やったのだがシルクは最初断ってたが匂いにつられて結局受け取ってた。

ちなみに自分の分は：

「モミジくん：じゅる：要望どうりにゼリーにしてみただけど：じゅる：さっきからよだれが止まらないのよね…」

一抱え程の大きさの皿に水分が蒸発して虹が出来ているゼリーを乗つけてリリアさんが来た。

その瞬間周りにいた人たちは誰もがゼリーに注目しよだれが垂れまくっていた。もちろん俺とラディを含んで。

目の前に虹の実ゼリーが置かれ、ラディは待ち切れないとばかりにスプーンで一口すくい食べた。

おのれ、俺が先に食いたかったのに

ラディに続けてスプーンですくう。

プリンのように柔かいがずっしりとした質量を感じる。まるで金のようなだ。

そのまま口に含む。

「むっ！？これは…！」

口に含んだ瞬間まるで完熟した果物を数百倍に凝縮したような甘さが広がる。だが次にはレモンの酸っぱさに変わり更に栗のような香ばしさも感じる。

それらを楽しみながら飲み込むと胃の中にまで虹の实の存在を感じる。身体中の血液に乗って力がみなぎる。

「う、うめえ…これが虹の实か…。」

「一口でこんなに楽しめるなんて…おいしい。」

ラディを見るととっても幸せそうな顔をしていた。確かに

「わ、私も食べていい？」

リリアラさんも我慢ならないという表情で聞いてきたのでもちろんと答える。

スプーンで一口食べると表情がころころ変わり最後にはラディと同じように幸せそうな顔になった。

「こんな満足できるデザート初めて…ねえ？これを新メニューに加えないかしら？」

「いやそれは出来ないと思うぞ。これけっこう貴重だからな。出来たとして年に二回ぐらいじゃないのか？」

「そうなの？残念ね。この名物にしようかな」と思ったのに。」

確かに名物にはなるだろうな。

さて、もう一口…

そう思っでゼリーをすくって口に入れようとした時

「あら、なにやら甘い匂いにつられてみれば美味しそうな物を食べているわね。」

「あつ、紫さん。」

麗しき我が村の村長

八雲紫さんが扇を持って立っていた。

そういえば虹の実待っててくださいって言ったな

「俺がとってきた虹の実のゼリーです。よければどうぞ?」

そう言って自分の分を差し出す。

「あら：じゃあ一口貰うわ。あむっ。」

と、そのまま俺のスプーンを口に含んで食べた。

あつ、なんかエロい

しばらく口に入れて表情を少し変えて驚いており、やはり最後は笑みを浮かべていた。

「なかなか個性的で面白い味ね。」

「そりゃどうも。あつ、後紫さん。行く前に言っていた黒い獣の事なんだが」

「何かしら?」

「実は見たんだ。そいつは黒い毛並みの狼でした。」

それを聞いた瞬間紫さんが眉を少ししかめる。

「アナタは戦ったのかしら？」

「いや、向こうも敵意はなかったので虹の実を一つ持ってどっかに行っちゃいました。」

「そう…情報ありがとうねモミジ。じゃあ私は用があるからこれで、ゼリーおいしかったわ。」

そう言って紫さんはどこかに行ってしまった。  
ただいつもの表情と違っていたのが気になるが…

そんなことを考えていたが

「それにしても美味しいわね、このゼリー。」

「アニキ、食べないなら僕が食べちゃうよ。あむっ、うん美味しい。」

「ぬわー！？俺の虹の実ゼリーが！？」

既に半分以下になったゼリーを見てそんな考えは吹っ飛んでしまった。

（紫サイド）

「黒い狼…ねえ？」

村外れにある一本の巨大な桜

この村の名物である黄金桜は普通の桜と違って花びらが夜になると金色に光りきらびやかな風景をつくる。

そんな黄金桜の枝に腰掛ける八雲紫。

「ある所では厄除け、ある所では災厄の象徴として扱われるバトルウルフの亜種…。」

その色気のある容姿と雰囲気もあって普段よりも妖しい雰囲気を醸し出しており、桜の妖怪と言っても不自然ではない。

「ああ…久しぶりに面白そうな事が起きそうね。それに彼…なにかありそうだし。ふふっ、楽しみだわ。」

彼女は今日も村を見守っている。

## メインのデザート（後書き）

週に一、二回位のペースになりそうです。

アイデアと感想ありがとうございます！作者の活力源になります

**番外編 ラディ奮闘記（前書き）**

ぐああー！更新スピードがどんどん遅れてるうー！すみません。

今回はラディのみの話です。



## 番外編 ラディ奮闘記

モミジがグランバ荒野に向かった一方：

「やあっ！」

「ギッ！？」

うっそうと植物が茂るテロス密林の中  
双剣のツインダガーを振るって青い鱗が特徴的なランポスをラディ  
は切り裂いていた。

「よし、だいぶ片付いた。あとは…」

動かなくなったランポスを確認するとラディは目を前に向ける。

そこには部下のランポスが残り一匹となって敵意むき出しのドスランポスがいた。

「ギャアッ！ギャアッ！」

ランポスが殺されたせいで怒り心頭のドスランポスは残りのランポスと共にこちらへけっこうなスピードで向かってきた。優れた統率力を持つ群れの長だがこの数ではそれが出来ないからだ。

怒って動きが単純になっているね…今だ！

範囲内にドスランポスが入ったと同時にポーチから玉を取り出しつ

いていた紐を引っ張って前に投げた。

閃光玉

衝撃を与えると光を放つ光蟲という虫を使って作られておりハンターには欠かせない道具である。

カツ！という音と共に強烈な閃光が辺りを覆う。ラディは目を瞑り腕で防ぐが

「ギャツ！？」

ドスランポス達は対応出来ず目を焼かる。

光は一瞬だけですぐに収まったがドスランポス達は目が見えずフラフラとしており完全な無防備だ。

「はああ〜！」

もちろんその機会を逃すはずもなくラディは全身の力と本能を解放し、双剣士の技である鬼人化を使い二匹に斬りかかった。

「はあっ！」

スパッ

身体能力が上がっているラディは無防備なまづランポスの上顎を容易く斬り絶命させる。

そしてそのままドスランポスの胴体に剣を食い込ませる。

ガキッ、ブシュッ！

だがいくら鬼人化で身体能力を上げても初期装備ではドスランポスの鱗と筋肉に阻まれて大したダメージを与えられない。

「うつ：おりやああ！」

それでも構わずに双剣を何度も交差させるように切る。

さすがに何度も攻撃を食らえばドスランポスもたまらないらしく苦しそうな悲鳴をあげる。

ギ：ギャアアッ！”

しかし閃光玉の効果も一時的なものでわずか10秒程経つとドスランポスはこちらを認識し噛み付こうとしてきた。

「！うわっと！」

切る事に集中していたラディは体整を崩しながらもギリギリでかわし鬼人化を解く。噛み付きはラディの鼻先2cm前を空しく通っていった。

（あっ危なかった、もう少し前にでたら首持つて行かれてたよ：でもアニキだったらなんとかなるんだろうな：）

ここら辺の危うさが彼女のハンターとしての未熟さをだしている。もっとも一番危ない時期は狩猟レベル5〜8辺りの中堅モンスターに慣れ始めた時の緩慢で、新人ハンターよりも死亡数が多い。

（うーん：ちょっとは効いてるみたいだけど致命傷にはならないか：て、うわっ!？）

「ギャアッ！」

ドスランポスは傷など関係ないような動きでジャンプしてきて襲ってきた。

今度は単調な攻撃だったので横に避けて通りざまに双剣の一振りを浴びせた。

「ギャアッ！？ガアッ！」

その攻撃に更に怒るドスランポス。  
確かにダメージ自体は少ない。だが

（もうそろそろかな…）

ラディの狙いは別にあった。

ビリッ

「ギッ！？」

突如身体が痙攣し動かなくなること驚くドスランポス。

「よしっ！えゝつとこれだ！」

狙い通りに麻痺して動けなくなったドスランポスにさっきの閃光玉位の大きさの玉を投げつける。

それは当たるとなにより白い煙が少し発生しドスランポスの口に吸い込まれる。そして続けて同じ玉を当てるとドスランポスは一瞬動きが止まり、次には地面に倒れイビキをかいて眠り始めた。

「ふう。捕獲完了っと。」

さっきまであたりに張り詰めていた殺気がなくなり少し緊張を弛めるラディ。

ラディが使ったのは二つの道具だ。

まず一つ目はドスランポスが突然麻痺したのはラディの双剣の効果だ。といっても双剣自体にはそんな効果は無く、強烈な麻痺性の毒を持つコガネオニグモから取れる液体を塗って動きを止めた。

二つ目はモンスターの捕獲に欠かせない麻酔玉。中に仕込んだ睡眠作用のあるネムリ草と麻痺作用のあるマヒダケが混ぜておりダメージを受けて弱っていたり罠にはまっている時にモンスターに投げれば生きたまま捕獲できる。ただし、耐性を持っているモンスターもいるのでその場合は捕獲できない。

眠っているドスランポスをギルド特製の縄で縛り目覚めた時暴れないうようにして、あとはギルドに知らせて運んでもらえばクエストは達成する

「はあ、一人で出来た。あのドスレウスの存在感よりかはましだけどやっぱり殺気は慣れないよ…。」

ラディが今回クエストをほぼ無傷で達成出来たのはやはり少なからずアニキと呼ぶ美食ハンターと一緒に何ランクも上のモンスターを狩ったからであろう。生き物が最も成長する瞬間は死に直面する時なのだから。

「よし！これで新しい防具が作れるしアニキに胸を張れる。楽しみ

だなく。あっ！あんな所にクリーム松茸が！それにオニマツタケも！」

滅多にお目にかかれない食べ物にはしゃぐラディ。

だが忘れないで欲しい

ここはまだ狩り場ということを

危険なんてそこらへんに転がっていることを

「ふっふっふふん。おっ！こっちはポキポキノコだ！いや、今日はついているなくん？」

呑気にキノコを摘んでいるとなにやら洞窟の入り口付近に見たこともないキノコが生えていた。

「新しいキノコかな？とりあえず採ってみよっとな…ってあれ？抜けない？」

キノコを引っ張るが一向に抜けない。そして更に力を入れて抜こうとした時気付いた

（あれっ？キノコって温かったけ？こんなにふさふさな感触だったっけ？）

嫌な予感がして前を見る。

するとそこには見るからに不機嫌そうな目で睨み付ける大きな牙と縞模様が特徴的な虎に似たモンスターがいた。

自分が持っていたキノコを見ると根っこの部分が虎のお尻につながっており尻尾だというのが解り、静かに置く。

そして

「失礼しましたー！」

全速力で走って行った。

もちろん虎さんも放っておくはずもなく

「グオアアツ！」

凄いスピードで追いかけて行った。

その日テロス密林で満身創痍になるまで走ったラディであった。

## 番外編 ラディ奮闘記（後書き）

コガネオニグモ

甲殻類

コガネ虫のような黄金色の甲殻と最強の部類に入る麻痺性の毒を持つクモ。大きさは手のひらサイズくらい。食用には出来ないがその強力な毒は狩りに非常に役立たれる。

狩猟レベル2

ゼブラトライガー

牙獣類

口からはみ出す程の大きな牙と縞模様が特徴的な虎に似たモンスター。強靱な筋肉と太い牙で主に獲物を狩る。毛並がとてもいいので毛皮の為にハンターから大量に狩られた時があった。大きさは一般の虎の一回り大きい位。

狩猟レベル8



## 新たな依頼（前書き）

しまった！日曜には投稿したかったのに…

感想ください！

## 新たな依頼

ヤクモ村から約1km離れた美しい緑と流れる河原がある溪谷…

「キシヤアアア！」

「食ってやるぞ鳥野郎！」

巨大な尾が五つあるワシと戦っているモミジがいた。

「シャアア！」

五つ尾オオワシは空から急降下して足の鉤爪でモミジを狙ってきたが…

「よつと」

簡単に足をくぐり抜けられ

ガシッ

「ふん！」

尻尾を一つ掴まれ進行方向とは逆に引っ張られた。

「!? ギ…」

ドッパッアーン！

更にそれだけではとどまらず背負い投げの要領で川に轟音を立てて叩きつけられた。

ピク…ピク…

水面に気絶して浮かぶ五つ尾オオワシ。水面は強い衝撃程固くなるのでかなりのダメージになったのだろう。

「よし依頼の五つ尾オオワシゲットー…ん？」

気絶しているオオワシの横から何か影がでてきたので身構える。すると

プカ…

ピク…ピク…

同じように気絶しているトカゲと魚を混ぜたような魚竜種、ガノトトスが浮かび上がってきた。

「あゝ、さっきの衝撃で気絶したのか。ラッキー、朝飯になってもらうぜー」

不幸なガノトトスと幸運なモミジ。弱肉強食がまさに再現されていた。

□

□

□

ヤクモ村 集会所

午前からも酒を飲んだりするハンターの給仕と依頼の受注手続きなどの仕事を受け付け嬢のリリアアはこなしていた。

「はいそれでは、ボンレスワーム10匹の捕獲”のハンターさま二人ご案内です。お氣をつけてゝはあ、朝から忙しいわねゝ」

慣れている仕事でも休みがほばないのなら流石に疲れてしまう。リリアアも例外なくその一人で、知らず知らずにため息をついていた。  
（私もたまには街に行って新しい服でも買いたいな。あつ、ラデイも一緒に誘おうかしら？元が可愛いんだからちゃんと飾ればゝふふつ、楽しそうねゝ。）

笑顔でそんな想像をしていると

「ヤッホー、リリアゝ。」

リリアアの想像の中では30着ほど着替えさせられたラデイご本人が来た。

「あら、ラデイゝん？それって？」

目を向けるといつものラデイの服装とは違っているのに氣がついた。

「ふふゝん。やっとランポスの素材がたまったんだ。」

ラデイが着ているのはランポスシリーズという鎧のような格好でハンターにとっては初歩的な装備であり、肉食竜であるランポスの頑

丈な鱗や皮を使っているのでハンターシリーズよりも防御力は高い。

「よかったわねラディ。新人ハンターにとっては防具が一番重要だからね。」

「そうでしょう。けどお金とかマカライト鉱石とかけっこう使っちゃったからちよつと貧乏に…」

グウ…

「あ…」

どうやら節約の為にご飯も我慢しているらしくラディの腹から可愛い音が聞こえた。

「え、えへへ」

「はあ、しょうがないわね。もうそろそろだと思っけど…」

リリアが自分の妹分になにか食わせてやろうと考えていると

「おーいリリア。五つ尾オオワシの肉取ってきたぞ」

タイミングよく台所に足りなかった肉を袋に入れ持ってモミジが入ってきた。

「グッド！ちょうどよかったわモミジ君。ラディ、ちよつと待ってね。すぐに作るから」

モミジから袋を受け取るとそのままリリアはカウンターの奥に行っ

てしまった。

「アニキ！朝からいらないと思ったら五つ尾オオワシとりに行っただね。むうゝ一応僕にも一言言っただけだったよ。」

口をへの字にまげてラディは拗ねる。

「おっと悪かったな。別に隠してた訳じゃないんだ。それより…それランポスシリーズか？」

「それならいいけど…。うん！やっと作れたんだ！ただちょっと家計が圧迫されて…主に食費で…」

「ぐっ!?!」

ラディが最後にボソツと言った言葉が耳に痛い。なにせ報酬金のほとんどを自身の大量の食費に消してしまったからだ。

「あゝ、ごめんなさい。とりあえず座ろう」

「うん。あ、別に怒ってはいないよアニキ。ただもうちょっと配慮はして欲しいかな？」

「…善処する」

とりあえず椅子に座って待つことにした二人。  
すると

「俺は今、ひじょゝゝに迷っている。俺の中にある二つの激情が互いにせめぎ合い一歩も退かず自身の時間だけがズルズルと削られて

ゆく…ああっ！どうすればいい？これは二つも目標があると贅沢だなと思うのか？それとも二つも欲望があるなんて欲張りだと思うのか？」

やたらと長く、意味がよくわからない台詞が後ろから聞こえてきた。もっともこんな喋り方の奴はこの村には一人しかいないのだが

モミジが後ろを振り向くと案の定、ハンマーを片手でジャクリングするつなぎを着た鍛冶屋のグラハムがいた。

「なにを悩んでいるんだグラハム」

「なに、シンプルなことだ。しかーし！この二つはシンプル故に決めることが出来ないのだ！このまま鍛冶屋として過ごすか、ハンターになってモンスターや物をぶち壊すかだ！ああ…やはり悲しい悲しい話だ」

要するにこれからも鍛冶屋として生きていくか、ハンターになるか悩んでいるってことだな。

「まあ…その前にモミジ。お前の武器を作ってからにしようと思うがな」

いきなりテンションが下がって落ち着くグラハム。

あっ、確かに困るな

「なあグラハム。材料に必要な黒水晶メタルってランバル鉱脈で採れるんだよな。」

あそこのモンスター達の狩猟レベル平均は15位って聞いたしな。  
今なら行けるかもな

「あゝそうだ。だが採りに行くなら急いだ方がいいと俺は思うぞゝ  
？」

「ん？なぜだ？」

グラハムの言い方に引っ掛かる。期間があるような言い方だ。  
モミジの言葉にボサボサの前髪から見える瞳をのぞかせながらグラ  
ハムは続きを言う。

「なぜなら奴ゝランバル鉤脈の大飯食らいが動く期間だからな。」  
「へえゝそいつはいつたいゝ」

「あのーモミジ君」

「「ん？」」

話を途中できられたので顔を前に戻すとテーブルには五つ尾オオワ  
シのもも肉をこんがりと焼かれたローストチキンを旨そうにかぶり  
つくラディと片手になにやら紙を持っているリリアがいた。

「アナタ達が言ってたランバル鉤脈のことなんだけどゝ…」

ピラッと紙をこちらへ向けながらリリアは話を続ける。

「またギルド本部から依頼があるみたいよ？」





## 新たな依頼（後書き）

グラハムさんの口調が上手くかけてないような気がします…フアン  
の人すいません

## 鉱石の宝庫 ランバル鉱脈（前書き）

うゝむ、テンポがちよつと遅いかもしれません。

## 鉱石の宝庫 ランバル鉱脈

ランバル鉱脈 奥地

「ハッ、ハッ…！くそっ、なんで…！」

一人、ハンターの男が必死の形相でゴツゴツとした足場を走っていた。

「ギャアア…！」

その後ろからはおぞましい鳴き声をあげながら追ってくる。何か

くそっ！くそっ！何でこんなことに！あいつ等が居ないってことはやられたのか！？畜生！金持ちどもに捌く獲物を捕獲しにきたばかりに！

男はいつも通り、仲間と金持ちどもに希少なモンスターをギルドに見つからないよう捕獲し、売る為に来たはずだった。

しかし、予想外の乱入者に自分達が狩られる側になってしまった。

「ギャアアア！」

「ひいっ！？やつ、やめ…ギャアアア…！」

□

□

□

「…では、迎えは3日後になります。どうかお氣をつけて…ハイヨ  
ー！」

ブルルル…！”

カラカラ…

「あいよー。さてと…」

巨大なイノシシに似た牙獣種 ドスファンゴの猛烈なスピードで走る馬車を見送ると顔を前に向ける。そこには荒い山脈が連なる目的地、ランバル鉱脈がそびえていた。

ランバル鉱脈

モルディオ火山の東方に位置する長さ10kmにも及ぶ山脈であり、ハンター界でも有名な希少金属や鉱石などの発掘場である。また、同時に狩猟レベル平均15〜20のモンスターがうろつく危険区域だが、毎年希少金属である《フルーツジェム》や《メランジユ鉱石》、さらに希少モンスターの《サファイアゲハ》や《白金コオロギ》などで一攫千金を狙い、死亡するハンターも多い所でもある。

「ここがランバル鉱脈か…この大陸でも危険な区域らしいな」

「うう、僕も初めて来るからちよつと怖いな…」

モミジの言葉にそう言うランポスシリーズを着たラデイの背中には、

大量のピッケルと虫あみがガチャガチャいっており目的丸出しである。

「ラディ…欲望丸出しなのは別に構わないがいざとなったら逃げれるようにしとけよ。それに今回の目的忘れてないか？」

「むっ、いいじゃん！ここなら資金稼ぎにもなるし武器の強化の鉱石も手に入るんだから！あと、目的はちゃんと…忘れてないよ！」

今の間はなんだ！？コイツめ、忘れていたな！食らえ

ゴッ

「いたっ！？」

目を泳がせているラディにデコピンを食らわした。ちょっと鈍い音がなったが無視しよう。

今回モミジ達が来た理由は二つ

一つはモミジの武器を作るのに必要な《黒水晶メタル》の採取。

もう一つはギルドからの依頼。内容はランバル鉱脈で暴れているモンスターの確認及び場合によっては討伐というものだった。すでに何人か腕利きのハンターを送ったがすべて消息不明とのことらしい。

「うう…ただのデコピンなのに痛すぎるよ…」

「謝らんぞー。まあとりあえず行くぞ。一部だが内部の地図をもらったから迷子にはならんだろう」

聞くところによるとランバル鉱脈は内部がアリの巣のようになって

おり幾分か複雑な造りで、迷子になって出られなくなったハンターも少なくないらしい。

「そうだね…よし！今回も生きて帰れるように…ってちょっとアニキ！？待って…」

先に入口に入っていくモミジに続いてラディも道具をガチャガチャ揺らしながら入って行った。

中に入ると思ったより広く、天井や壁からはカラフルな色の水晶や鉱石があちこちに見られここが鉱石の宝庫と呼ばれるのもうなずけた。

「おっとっと！ふう…歩き難いな」

「大丈夫かラディ？」

「ちょっと暗いから足場がよくわからない…アニキはすごいね。よくそんな先々進めるよね」

「そうか？けっこう明るいが…」

もしかしてグルメ細胞のおかげか？

モミジの考え通り、普通の人にはこの洞窟内はうつすらとしか見えないが今のモミジは可視光線以外にも赤外線や磁波などが見えるため支障無く辺りの様子がわかるのだ。

そういえば俺のグルメ細胞って普通じゃないらしいみたいだな。もしかしてトリコの四天王の技とか使えるのか？うわ、めっちゃチートじゃん！

「ラディ、どうやら俺はけっこうんでもない奴らしい」

「今更！？モンスターを素手で倒してる時点で僕はその考えだったよ！？」

「なん…だと…？（某死神風に）」

「こっちがだよ！」

「アナタ達…狩り場で大声出すなんてなにを考えているんですか？」

「…え？」

ラディとモミジの声が見事にハモリ、第三者を見る。

そこにはスカートのような防具が特徴的なレイア装備を着て水色の目で呆れたようにこちらをみるハンターがいた。

「あれ？…シルクか？」

「やっぱりモミジさんでしたか…」

「えっ？知り合いなのアニキ？」

□

□

□

「そうですか、ギルドの依頼と黒水晶メタルの確保でここに…」



「それでシルクは最近現れた正体不明のモンスターの様子見か…」

「ア、アニキが《必中の水》のハンターと知り合いだったなんて…」

シルクと会った後、目的を聞いてみるとどうやら彼女も同じモンスターが標的らしい。ちなみにラディが言った《必中の水》というのは有名なハンターにつく二つ名らしく、ほぼ確実に標的に矢を当てることと水色の目は珍しいということが元らしい。

へえー有名なハンターだったんだシルク

「じゃ、一緒に行動しないかシルク？ どうせ目的は同じだしな。それにシルクの腕と知識があると助かるんだ」

その提案にシルクはしばらく顎に手を当て考える。

ふむ、いい眺めだ

むっ？ なにやら嫌な視線を感じるぞ？ なぜだ？

「わかりました。私もその方が都合がいいですしね。よろしく願いしますモミジさん、ラディさん」

前のように綺麗な形でお辞儀をするシルク。

「またよろしくなシルク」

「こ、こっちもよろしくお願いします！」

「あっ、ですが一つ」

シルクは顔を正面に上げると美しい笑顔で

「さっきのような大声をまた出したら…ちょっと手元が狂ってしま

うかもしれません」

いつの間にか展開した弓をもちながらそう言ってきた。

「…はい」

□

□

□

モミジ達がシルクと会っているころ…

外では一つの影がすさまじいスピードでランバル鉤脈の入口に到着した。

…ガウ…”

そしてそれは一瞬立ち止まった後、黒い毛をなびかせて入口に入っていた。

## 鉱石の宝庫 ランバル鉱脈（後書き）

あれ〜シルクってこんなキャラだっけ？ま、いつか

## 強襲！二つの巨影（前書き）

遅くなりました。

今回はアイディアモンスターを使わせてもらいました！

## 強襲！二つの巨影

ーランバル鉤脈 中間地点

「…そして誰かが言ったそうです。この世界の何処かに大陸程の巨大なモンスターの体内であらゆる旨味が凝縮された極上のスープがあると…」

「へえ…うまそうな話だな…おっ、ぷりぷりして美味しい」

「なんだかおとき話みたいな話だね。でも本当にそんなモンスターがいたら…すごいなあ」

ランバル鉤脈の中をしばらく歩いた一同は、博識なシルクからこの区域のモンスターの特徴や採取できる資材などの知識、また世界中のあらゆる伝説や噂を道中聞いていた。

特にモンスターの知識は経験者が語るものなのでわかりやすく、ラディも知識は少しは持っていたが多少違う点もあったりしたので助かった。

後半の伝説などの話はシルクの趣味で集めた話らしく、表情は冷たかったが目は嬉々として光らせていた。

「伝説の食い物か…いつか食べてみたいもんだ。あむっ」

その話を聞きながらさつきとったルビーのような身体を持つ甲殻種ルビークラブの身を食べ続ける紅葉。その身はほどよい弾力と驚くほどの甘さを持ち蟹ミソは濃厚で今まで食べた蟹の中では極上だ。

「貴方は相変わらず食べるのが好きなようですね。そういえばあの虹の実、とても美味しかったですよ」

「えっ！？アニキといっしょに虹の実探したハンターってシルクさんだったの！？」

さらっと言った言葉にラディは驚く。

紅葉からは手伝ってくれたハンターがいるとは聞いていたがまさかこんな有名人だったとは思わなかったからだ。  
だがこれでなぜ紅葉と知り合いだったか分かった。

「あれ？言ってなかったっけ？まあいい、彼女には72通りの名前があるからなんと云ったらいいか…」

「ないでしょ！」

「そんなにはありませんよ」

「ろっとお、驚かせてしまったようだね」

「なにそのキャラ」

恐らくこの世界にはないネタだが突っ込んでくれた二人に満足げに頷く紅葉だった。  
と

ガサ…ガサ…

「ん？」

何かの足音らしき音が聞こえたので紅葉はそちらへ顔を向ける。

「キュルキュル……」

するとそこにはところどころに鮮やかな鉱石がついた岩に足が付いたような奴が何匹もいた。

「な、なにコイツ等？」

「おや、ガジリスクですね。ここではレベルが低く防具や鉱石を集めるのに利用できる弱いモンスターですよ」

「へえ……食べるの？」

「肉質は硬いのでオススメはできませんけど」

「よし、今後の為に狩ってみるよ！」

「じゃ、俺も」

数分後、思った以上に凶暴な性格と硬い甲殻に手こずられながらもラディと紅葉は何匹か捕まえた。

「うーん硬くてうまく剥ぎとれない……」

捕まえたはいいが甲殻が硬く剥ぎとり用のナイフが刺さらずラディは苦戦する。

すると見かねたシルクが

「腹を表にひっくり返して下さい。そしたら殻と体の間に隙間があるので全体に少しずつナイフを差しこんでから殻を持ち上げてみてください」

アドバイス通りにラディがしてみる。  
すると

カパツときれいに殻が剥がれてガジリスクはさっぱりとした恰好になっ  
て逃げて行った。

「わっ！きれいにとれた！ありがとうシルクさん！」

「いえ、大したことはありません。だってほら」

シルクが指差した方には

「うーん黒水晶メタルってどれだ？やべっ、見たことないからわからん」

モミジが早くもコツを掴んで十数匹分の殻を集めていた。

「…よしっ！じゃあ僕ももう一匹捕まえてこよう」

あまり落ち込まず行動に移そうとするラディであった。

「キュルル」

「いた！」



壁にへばりついている一匹に表情を絞るとラディはゆっくりと忍び足で近づいてゆく。重そうな見た目に似合わず彼等は素早いのが先ほどのいやというほど体感したからだ。

そして距離が1m位になった時に捕らえようと一気に近づく。

よし！捕まえた…！？

だがそれはかなわなかった。

ガラガラッ！

力強い一步を踏み出した瞬間、足元がいきなり崩れて落ちたからだ。

「う、うわあああ！？…」

「！ラディさん！？」

「なっ！？ラディ！」

いきなりの事に素早く行動できない二人。

プロであるシルクもさすがにこの状況は想定出来なかった。

慌てて紅葉達は出来た穴に近づいて中をみる。

しかし元々洞窟内が暗いのと、けっこう深く落ちたのか下が見えない。

「ラディー！大丈夫かー！」

とりあえず無事かどうか確かめる為に声をかける。

「…いてて…大丈夫だよ…ちょっとお尻を打っただけ…」

どうやら怪我はしていないようなので安心する二人。

「よし、大丈夫みたいだな。お…い！周りの状況はどうなってる！」

「え…っと…どうやら奥に続いているみたいだけど…うわっ！…すごいよ！…貴重なノヴァクリスタルとか…輝竜石とかあって明るいよ！…」

下はどうかやら鉱石の穴場になっているらしく歓喜したラディの声が聞こえるがそれはともあれ道があるので合流はできるかもしれない。

「…だときシルク。どうする？俺達も降りるか？それとも別に行動して合流するか？」

「ふむ…ここ危険なモンスターがうろつく場所なので、ラディさん一人にするのは少し気が引けますけど…ここを降りるのも崩れたりするかもしれないので危険ですから後々合流した方が良いかもしれません」

シルクの言う通りこの地質がどうなっているかわからない以上、下手に刺激を与えるのは危険を伴う。

それならラディと別行動にして後々合流するのがまだ安全だ。

幸いラディはいくつか逃走用の道具を持っていたはずなので逃げられる可能性はぐっと上がる。

「よし、ラディ！俺達はこのまま奥に進む！お前も奥に進んで行け

ば構造状、合流できるかもしれないから出来るだけモンスターに見つからないように行け！」

「う、うん！…分かった！…アニキ達、後でね

グオオオオン！！”

「がっ！？」

「くっ！？」

ラディと話している途中、紅葉達の近くからとてつもない咆哮が鳴り響き中断された。

紅葉は轟音に顔をしかめながら前方を見る。

「グラビ…モス！？いや…」

そこには紅葉がゲームで見たことがある、飛竜種で巨大な体とまるで岩の鎧を着ているような重厚な甲殻をもつグラビモス

グオオ…”

に良く似た黒光りする頑丈そうな体のモンスターがいた。

くラディ サイドく

な、なに今の咆哮！？多分アニキ達に何かあったんだろう

「ど、どうしよう…いや、やっぱりアニキ達の言う通りに進むしかないよね…よし！」

今は心配するより自分のことだよね！大丈夫！アニキは常識離れしてるし、シルクさんは有名なG級ハンターだしね！…あれ？僕がよく考えたら今けっこうピンチ？…え？

自分が置かれた状況に冷や汗をかきだすラディ。

だ、大丈夫！道具だって一応持ってきてるし来るまでに危険なモンスターだって出てこなかったし合流するまでなら…

持ち前のポジションで思考をいい方向に持っていこうするのは彼女の良ところだろう。  
だが…

「グロロロ…」

「ひあっ！？」

上の二人と同じように突如現れた何かの声を聞き、背筋を凍らせる。そして恐る恐る顔を向けると…

「グロロ…グロロロアア…」

ライオンのようなタテガミを顔の周りに生やし、カタツムリのように飛びだした三つの目、そして赤黒い牙を生やした凶悪な顔でこちらを見る巨大な蛇がいた。

「ま、まさか…デビル大蛇…！」

ギシヤアアア！  
”

## 強襲！二つの巨影（後書き）

今回書いている途中テンションが上がってしまいました（笑）

次回は遂にあの技が！

## 硬い、堅い、固すぎる（前書き）

遅れてすいません。

おまけに説明が多くなっしまいました…

文才が欲しいです

**硬い、堅い、固すぎる**

グオオオオン！  
”

一吠えした直後、グラビモス？が洞窟の天井まで届きそうな巨体で紅葉達に突進してきた。

スピードはあまり早くないが洞窟内ではその巨体は狭過ぎるので避けるのが困難だ。

デカイのに無理すんなやごらあああ！

「うおっと！」

「ほっ」

だが大きいとそれだけ隙間も大きくなるので紅葉は股の間を危なかしく潜り抜け、シルクは壁に張り付きやり過ごす。

「オラァ！」

もちろん潜る瞬間、試しにと腹にナイフを繰り出す。シルクも同じように弓を構えグラビモス？の顔に向かって一本矢を放つ。

アイシルクボウと言われるその弓には雪山や氷河に生息するモンスターから取れる氷結袋を使い、矢が放たれると同時に超低温の空気がまとわりついて相手の体に凍傷などをつけて追加ダメージを与える仕組みがある。

おまけに矢を一本だけに集中することで貫通力を特化させた一撃だ。だが



ガキインッ！ カンッ！

「っ！？硬てえ！」

「貫通矢でも無理ですか…」

予想以上にグラビモス？の薄く黒光りする体には全く堪えてないようだ。しかも紅葉に至っては逆に腕にダメージを受ける始末だ。

グラビモス？は敵を通り過ぎたのを確認すると急にブレーキを掛けて止まり、洞窟の壁に体のあちこちをぶつけて削りながらこちらへと体を向ける。当然のようにその体には傷一つない。

「なんだよアイツは…グラビモスの亜種か？いや、それにしちゃ光り過ぎだな」

自身の腕を見ながら紅葉が呟く。今までも多少のダメージは受けたがこちらも相手にダメージを与えたナイフがまるで効いてないとなるとさすがに少し不安になる。

「モミジさん。あれは恐らくこのランバル鉱脈に住むランバルですよ。おまけにモミジさんの目的である黒水晶メタルを好んで食べるタイプですね」

「なに？じゃあアイツの身体ってもしかして…」

「ええ、世界でも有数の希少で優秀な鉱石、黒水晶メタル…または《黒の雫》です」

黒水晶メタル、または《黒の雫》

ハンター界において三大希石と呼ばれる内の一つ。非常に強固であらゆる条件下においても性質が変わらない黒水晶と、メランジュ鉱石や虹色鉱石など柔軟で特性が変わる鉱石が長い年月や圧力などの自然の力で混ざり出来た鉱石で、どちらの特性を備えながらも矛盾しない希少なものだ。

「グオオ……」

紅葉を睨み付けてグランバルは動かない。警戒しているのかどうかはわからないが紅葉達にとっても好都合だ。

「……これは目的が見つかって幸運だと捉えていいのか悪運だと捉えていいやら……」

「少なくとも今は……悪運だと。まず討伐にしる撃退にしる攻撃が身体に通るかわかりませんし、私も様子見で来たので威力のある爆弾系はありません……っ！きますす！」

こちらの考察が終わったのかグランバルは一旦首を持ち上げる動作をする。

その動作には紅葉も覚えがあった。

あれは……！

そして口を開いた瞬間紅葉達は左右に飛ぶと、  
ゴバアアアア！

今さっきいた場所を口から出た赤い光線が飲み込みながら通った。

グランバルの特徴である熱線。食事とする鉱石の中に含まれる可燃物の物質から発生して溜まった熱を放出するための手段でありながら、その威力は飛竜のブレスを軽く超す。

「やろっ…！」

「モミジさん、どうかして動けないようにしましょう。いま逃げたら熱線の餌食になりますから」

「確かに…、分かった！」

ダッ、っとブレスを吐いているため動けない相手に素早く近づく紅葉とシルク。

横を通る熱線に若干ヒヤヒヤしながらもグランバルの側面にたどり着いた紅葉は太い足に向かって殴りかかる。恐らく今の自分の斬撃では効かないと思うのもう一つの知ってる技に賭ける。

確か…、同じ所に連続して…殴る！

「釘パンチ！」

掛け声と共にトリコの技、釘パンチを繰り返す。原作では三発で3mの厚さのコンクリートをぶち抜く程の威力だったが…

ドドッ、ドッ！

「グオッ？」

多少はぐらついたが大して威力は伝わらず分散して失敗する。

「ちっ！やっぱりぶっつけ本番じゃ無理か！」

グオオオオ！  
”

多少とはいえ内部に効いた攻撃に反応してグランバルはその足元に  
いる敵を鬱陶しそうに足を振り上げ踏もうとする。

だがその時を狙い、反対側から矢がグランバルの顔に向かって飛ん  
できて当たり目標が逸れる。

「まったく：無茶しますね」

そう呟きシルクは一定の距離をとりながら続けて、矢を比較的效果  
はあるであろう関節部分や翼の被膜に向かって的確に貫通矢を放つ。  
さすがにすべてが甲殻で守られているわけではないので先端部分が  
突き刺さりグランバルも無視できなくなったのか、今度は身体を少  
し持ち上げる動作をする

と、つと音と共に身体から赤黒い煙を噴射してきた。

これも体内の熱を放出する手段の一つで、近接武器のハンターにと  
っては厄介な技になる。なにしろ近づけば不意の熱波に吹き飛ばさ  
れ、離れれば熱線にやられるのだから。

「あつつ！あぶね！？」

そして例に漏れず再び釘パンチを食らわそうとしていた紅葉も、完  
全には避けきれず高熱と風圧に飛ばされる。

グオオオオ！  
”

その隙を狙ったかのようにグランバルは先端が丸くハンマーのよう

になつて尻尾を低く振り回してくる。

「うおっ！？ぐうっ！」

そして未だ体整がとれていない紅葉に直撃する。遠心力と重量を乗せた鋼の一撃をとっさに腕でガードしたが耐え切れず後方に飛び、結果としてシルクの近くになんとか止まる。

「大丈夫…ではなさそうですね」

「ああ…折れてはいないが、しばらく動きそうにないな…」

紅葉の右腕を見ると血がでており無事じゃないのは一目瞭然だ。もっとも普通のハンターなら盾でもない限り身体中の骨が折れてもおかしくない一撃だったが。

「いけますか？」

シルクが少し心配するように聞く。

それに対し、動く方の手を握ったりして確認する。

「ああ。…シルク、ちょっと勝負に乗ってみないか？」

この怪我なら普通のハンターはリタイアするが今回はそうもいかない。先を急ぐ為に紅葉はシルクに対してギャンブルを持ち掛けた。

一方 ラディは

ヴロロロアア！  
”

「ハアツ！ハアツ！うう、何で僕いっつもこんなことに〜！？」

恐ろしい形相で追いかけてくるデビル大蛇から必死に逃走していた。実は彼女、足の速さはかなりのもので下級モンスターの素材で作られた軽量の防具であるのも幸いしてデビル大蛇を一時離れていた。

ヴロロロ：アアツ！  
”

だがやはり人とモンスターではスペックが違うので体力が少なくなるとに比例して差は縮まってゆき  
ギュボツ、っと押しこんだ腕がラディに向かって飛んでゆき捕まえようとするまで近くまで迫ってきた。

「ちょ…ハツ、…捕まって…」

その腕を危なっかしく避けながら腰のポーチから閃光玉を取り出し速攻で紐を引っ張り、

「たまるかー！くらえっ！」

デビル大蛇の前に放り投げ、直後凄まじい閃光が辺りを覆った。

「う…どうだ！？」

しっかり防いだラディがデビル大蛇を見ると

ヴロア！？  
”

いきなりの閃光で目を焼かれ、閉じて戸惑っていた。

「よっしゃ！さて、今の内に…」

効いたのを確認するとラディは奥に向かって体を向けると、その瞬間

ガシッ！

「えっ！？うわぁっ！」

後ろから大きな手がラディを掴み持ち上げられた。

「な、なんで…ひいっ！」

腕の持ち主は言うまでもなくデビル大蛇。

たしかにラディの閃光玉は目を焼いた、だがそれはデビル大蛇にとっては大して障害にはならない。なぜなら顔の周りがある、熱を感じるセンサーであるピット器官を使つての狩りが蛇にとって大半であるからだ。

つまり見えなくても熱があれば居場所を探れるのだ。

ヴロロロ…”

「うっ…ぐっ…」

デビル大蛇の力は凄まじく、一向に抜け出せる気配がない。運よく片手は動かせるので背中から双剣を片方抜き突き刺さるように振り落とす。

ブシュッ：

「だ、だめだ…」

しかし弾力のある丈夫な皮膚に拒まれ先っちょがわずかに刺さっただけである。

「ギャギャ…」

それがどうしたと言わんばかりにデビル大蛇は軽く腕を振り剣を抜く。しかも抜けた剣は地面に落ちると同時に先端近くがパッキリと綺麗に折れた。

ああ…親方から最初に作ってもらったツインダガー…

強く握られ薄れてく意識の中で急速に諦めの感情が広がる。おまけに自身の武器が折れたことも大きなショックだった。

「アニ…キ…、シルクさ…ん、ゴメン…」

その呟きと共に意識を失ったラディをデビル大蛇はおぞましい顔をニヤケさせて口の上に持ってゆく。

そして口を開けて飲み込もうとした瞬間

「グルル…」

ゾクッ！

急に聞こえた唸り声と共にすさまじい威圧を感じ取った。



デビル大蛇は慌てて後ろを振り向くとそこには全長8mはあろう巨体で、艶のある黒い体毛とそれに映える黄金の目をしたオオカミ、黒いバトルウルフが威風堂々と歩んでいた。

ヴロロ：キシヤア！”

直ぐ様相手の危険性を感じたデビル大蛇は先手必勝とばかりにありったけの自身の腕を飛ばし捕らえようとする。

ガチッ、ガチッ！

ヴロロ！？”

だがそれらは一瞬で目にも止まらぬスピードの噛み砕きによってすべて潰された。

それに驚くデビル大蛇だったが次の瞬間には上半身が切り刻まれ痛みさえ感じる事なく絶命した。

そして腕ごと吹っ飛ばされたラディは

ドサッ

上手くバトルウルフの背中に乗せられ怪我一つなく着地した。

…ワグ”

それを気にした様子もなくバトルウルフは洞窟の奥の方にゆっくりと歩いて行った。

## 硬い、堅い、固すぎる（後書き）

詰め込み過ぎたかも…

さて、ここでちょっとアンケートをとりたいことがあるのでよければお答え下さい。

主人公のこれからについて

- 1、トリコっぽく、基本ラディと紅葉の二人で危険地域に行く
- 2、モンハンらしく四人パーティーを作って行動する
- 3、作者に任せる
- 4、僕っ娘ってかわいいよね

票が無ければ自然に3となります。

## グランバル 決着！（前書き）

ちよつと急になりましたがランバル鉤脈編終了です。

アンケートありがとうございました。結果は2が圧倒的に多かったため4人パーティーで行動に決まりました！

…けど4人目を全然考えてねえや。せめて男か女かは決めないと。

## グランバル 決着！

「…と、いうのはどうだ？…おっと！」

「…あまり分のいい考えではありませんが…試すしかありませんねっ！」

「グオオオン！」

グランバルの振り下ろされる尻尾を紅葉達は跳んだり、ずれたりして避けながら、この状況を脱出する策を伝える。もつともそれを聞いたシルクはあまりにも大雑把過ぎたので少々呆れたが。

「ま、そういうことで！行くぞカチカチ野郎！」

「あまり死なないでくださいね」

そう言うと同時に紅葉はグランバルの近くに、シルクは尻尾が触れないかぐらいの範囲まで離れる。

「グオオ！」

グランバルはまず、近くの紅葉から排除しようと口を開き、噛み付こうとする。

「当たるかよっと！」

だが鈍い動きだったので簡単に跳んで避けられる。更に

ヒュッ！ バリン！

「グオオッ？」

その瞬間を逃さずシルクの矢が見事にグランバルの口に吸い込まれる。それと同時に口が閉じられ矢についてたビンが割れて中身の液体が中に広がる。

その液体の味に思わずグランバルはゴツい顔を目だけ歪ませる。

「ふう、…こんな荒業やったことありませんよ」

そんなことを呟きながらシルクは新たに矢にビンをそのまま取り付ける。

ビンの中身は麻痺性の毒。通常は弓にセットし矢の先端に付けて使うのだが、今回はまともに矢が肉体に届かないため、それならばビンごと取り付けて口に放りこんだ方が確実だ、と紅葉が言ってきたため矢に取り付けているのだ。

ただそうすると当然矢は重くなり速度も狙いにも悪影響があるが、シルクは本番でそれをやってのけたため彼女の腕の良さがかなりのものだと分かる。

「おおー、あの人一発で成功させやがったよ。ま、言ったのは俺だけ…どっ！」

グランバルが口の中のものに気を取られている内に身体の出っ張りなどを使って紅葉は背中に乗る。

紅葉の策、それは紅葉とシルクが互いにグランバルの隙を作りながらシルクは麻痺の攻撃、そして紅葉は釘パンチを脳天に叩き込み行動不可にするというものだ。

さっきの釘パンチは不完全なものだったが、衝撃を伝えることは分かった。なので今度は更に数を増やして脳を揺さぶろうと考え、頭に近づく。

って、大丈夫かねえ俺… 二度目だからって成功すんのか？ まあ…

そして頭に近づいたところでグランバルは紅葉に気付く、天井で押し潰そうと翼を羽ばたかせて身体を浮かすがすでに遅く

「やるしかないがなアア!!」

その叫びと同時に無防備な頭に連続でパンチが叩き込まれる。

バババァン!

グオオオオオ!?"

そしてグランバルの脳に、今まで受けたことのない衝撃が襲ってきた。

釘パンチを打った紅葉は、反動で空中に少し浮かぶとそのままうまく地面に着地する。

「まず三発…」

ポウン!

ピシッ…

「4発…」

続いての衝撃で頭の甲殻に罅が入り

ドオ…！

パキィ…ン！

グ…オオ…！  
”

「ちっ…5発目は浅かったか…」

5発目を受けて少々ぐらつき、頭の甲殻の一部分が剥がれ落ちるが何とかグランバルは踏ん張り意識を保っている。

「やっぱりタフだな…だが…」

グオオツ！？  
”

ビリッ、と急に巨体が痙攣しグランバルは身動きがとれないことに驚く。

ようやくさっきの麻痺毒が効いてきたのだ。釘パンチが成功しないという考えから紅葉はシルクに頼んでいたため今回はそれが上手くいった。

「やれやれ…おっと？」

一旦安心した紅葉は慣れない釘パンチの高カロリー消費とダメージからふらつき倒れそうになる。と、

「大丈夫ですか？辛そうですが…」

とつさに紅葉の肩を持ち、シルクが支えてくれる。

「あ、ああ大丈夫だ…それよりも奥へ急ぐか」

「…わかりました。ですが無理はしないで下さいね？アナタには死んでもらっては困りますからね」

無表情な彼女には珍しく、心配するような声と目で言ってくれたため、内心ギャップ萌えなのかこれは！などともいふことを紅葉は考えながら、動けないグランバルから離れて行った。もちろん剥がれた甲殻を持ったまま。

くラディ サイドく

「…えへへ…ふかふか…あれっ…？」

…えくつと僕どうしたんだっけ？…あっ！確かデビル大蛇に…

先ほどの死の感触を思い出し一気に脳が覚醒し、意識が鮮明になる。

そうだ…！あの時食べられそうになって…じゃあなんで助かっているんだろ？

今の自分が置かれている状況を確認しようと辺りを見渡すと、驚いた。



…ワグ…

まず、黒く手触りの良い毛並みで、巨大な狼の背中に乗っていたことと、

わあ…すごい綺麗な所だ…

周りが広い空間を作っており、目の前には輝く金色の液体で作られた池が広がっていたからだ。

ランバル鉱脈にこんな池があったなんて…ってうわあ!?

その風景に目を奪われているといきなり黒狼は身体を振り、落そうとしてきた。

そしていきなりだったため見事に尻から落ちてドシン! という音を発して地面に着地した。

「い、痛い…もう! いきなりなんだよ…」

尻の痛さに我慢しながら黒狼をみると、向こうも片目だけでこちらを見ておりその威圧感に思わず目が反らせなくなる。

「え…え…と…」

……”

そうやってしばらく見つめ合った後、黒狼さんの方から興味を失ったように顔を背け金色の池に近づいていき口を付けて飲み始めた。ふう…良かった。もしかして敵意が無いって分かってくれたのかも?…あるいは弱すぎて気にする必要すらないって思われてるかも

知れないけど うう

一瞬ブルーな気持ちになってしまったがすぐに持ち前のポジティブに切り替える。

だけど乗っけてくれたってことはデビル大蛇から助けてくれたってこと?…まさか食べる為じゃないよ…ね…?

まあ、そうだったらとくに胃袋の中だからそれはないか

とりあえず刺激しなければ襲われることはないと確認し、目の前にある黄金の池をみる。黒狼はもしかしてこれを飲む為に来たのかな?

黒狼がうまそうに飲む所を見て思わず喉をならす。

人が飲んでもいいのかな…? ようし、一口だけ…

黒狼から若干距離をとり池のほとりに行くと、手で器を作って掬い、口に含んだ。その瞬間

「!う、美味い!」

一気に旨みが身体中に広がり疲れを吹っ飛ばした。

その味はほぼ香りはないが、海藻などからとれるダシ汁を数十倍に濃縮して一切の雑味を取り除いたような単純な旨さの塊だったが、今まで飲んだスープの中では間違いなくトップで美味しい。

す、すごいあっさりしているのに旨さはしっかり感じる…! も、もうちょっと!

その旨さに感動し、もう一杯、もう一杯と次々に飲むのを止められなくなる。

「ふぁゝ…美味しいゝ。…でもなんでこんなスープがここに？」

ふと疑問が浮かび、一旦手を止めてスープの中を覗いてみると、下にはなにやら金色の鉱石が大量にあり、池の中央からは穴が空いて、そこから温かい地下水が吹き出していた。

あれが美味しいスープの原因？ダシの出る鉱石なんて聞いたことないけど…ん？

スープに夢中になっていたがその間に黒狼さんは居なくなっていた。

えっ！？いつの間に！？

そして直後、

「…おゝい…アホのラディゝ！」

「ラディさゝん…五体満足ですかゝ…」

「おい、なんだその不吉な問いかけ！？」

今一番聞きたい人の声が聞こえた。

後ろを振り返ると、ちょうど入り口に赤い着物とスカートのような防具が見えて、一気に安心感が戻ってき、

「アニキゝ！シルクさゝん！」

「おっ！無事だったかラデ…ぶほお！？」

一気に駆け出してアニキの腹にタツクルを繰り出してしまった。

「出会い頭にダイレクトアタックとは…新鮮な挨拶ですね」

くサイド O U Tく

グ…オオオオ…”

紅葉達が去った後、しばらくしてグランバルはふらつきながらも自分の巣に戻り休憩しようと歩いていた。

やはり頭へのダメージは無視できるものではなく弱点もできてしまったのはこの世界では痛い。

だがこのグランバル、今日はとことんついていないらしい。

ザッ、ザッ

グオ？”

目の前からする気配と足音に気づき、見ようとした瞬間、

ドゴッ！

い！？グオオオオ…”

さっきよりも遥かに強烈な一撃を頭にくらい、今度は耐えられず気絶して地に伏した。

スタツ

「グルウ……」

そしてその一撃を当てた黒のバトルウルフは気絶したグランバルを一瞥だけすると、再び走り去った。

ピシッ…ピシッ

そして超重量のグランバルの衝撃に脆くなっていた地面に罅が入り…

ガラガラ…

崩壊して気絶したままのグランバルは遥か地下へと落下していった。

やはり自然というのは運も大事だということを教えてくれた一面であつた。

おまけ

紅葉達が死に直面している一方…

「いやゝ平和ですなゝ村長ゝ」

「ええそうね。桜餅も美味しいし温泉もいい湯加減だわ」

ヤクモ村外れの桜の木の中に囲まれた隠れ湯にリリアと八雲紫がのんびりと浸かっていた。

お盆に乗せて浮かべてる、酒と桜餅というオプション付きで。

「村長ゝこんないい所知っているなんてずるいですよゝうりうり」

「あら、人っていうのは一つは隠れて楽しむものがあるものよ？アナタも人を攻められるかしらね。」

素晴らしいプロポーションをした美女二人が互いに裸で【ピー】をつつき合ったりしてじゃれあう光景は野郎と、一部の趣味を持った女性にはたまらないご褒美だろう。

「おー？なんだい村長さんも知っていたのかい？」

「あつ、ルビスじゃない」

と、そんな状況に鍛冶屋のルビスが来た。

近くの林で服を脱いでいたのかポニテにした赤い髪と凄まじい破壊力の【不自然な湯気】や普段汚れて目立たないスベスベの肌が露になっていた。

そして足先からゆっくりと浸かる。

「あら、仕事休みかしら鍛冶屋さん？相変わらずいい身体つきしてるわね」

「なに言っているんだい村長さん、だってこんなにいいスタイルしているじゃんか。仕事は今日は珍しくなかったから1日休みだよ。休める時に休んでおかないと持たないからね」

「鍛冶屋って汚れやすいし重労働だから大変よね。このさい綺麗に汚れを落とすついでに好きな人も落としてみたら？」

リリアが意地悪そうな笑みをしてルビスに聞く。

「えっ…いやいや何言っているんだよ！好きな人なんかいい、いないってば！」

ブンブンと手を振って動揺を隠すルビス。それに合わせて【不自然な湯気】も大きく揺れる。普段は男勝りのルビスだがこの話しになると乙女になるので村のおっさん達はこのギャップ萌えにいつも癒されているらしい。

「そう、じゃああのガンコな汚れも消した方がいいかしらね」

「？」

紫はそう言うと思ったいた扇を畳み、ある方向に見えなくらいの速度で投げた。  
すると

ドグウ！

「ぐあああ！？」

なにか鈍い音と悲鳴が聞こえたと思ったら木の影から金髪でオール

バックの男、バルトが白目で倒れていた。

「バルト…またお前か！」

「まだ懲りてなかったの？」

恐らくルビスをストーカーしていたのであろう。ここまでくると最早犯罪の域である。というよりキモいのでさっさと捕まれ。

「やれやれ…相変わらず騒がしいわね…でも楽しい村になったわ」

近くにある大きい岩を笑顔で、バルトにぶん投げたりしているルビスとリリアを横目で見ながら紫は微笑みながらつぶやいた。



## グランバル 決着！（後書き）

グランバル（アイディアモンスター）

飛竜種

グラビモスの変異種、ランバル鉱脈に生息。

それぞれに鉱石の好みがありそればかりを食べ続けるせいで甲殻はその鉱石で覆われる。

性格は基本温厚だが縄張りに入ったり、攻撃してきた相手には容赦しない。

基本行動はグラビモスと変わらないが熱線は2倍程の太さになったり体重は重いが鉱石に含まれる磁力を使って反発し、飛ぶことができる。

狩猟レベルは食べた鉱石の質によって上下する。

狩猟レベル 18～25

肉は硬く食用には向かない。

おまけは作者の欲望の産物です。

三人のスリーサイズを知りたい方は感想に

紫さんは裏表のある素敵な人です。

と書いてください

## 葛原紅葉の楽しい木造建築（前書き）

今回ほぼギャグです。

作者は恋愛要素を書くのが苦手なようです。ちくしゅう

## 葛原紅葉の楽しい木造建築

…ドドドドド!

ブフウー!"

下を見れば、様々な色彩の木々や綺麗な川が流れる溪谷の道を、巨大な猪のような牙獣種 ドスファンゴが後ろに所々金属で補強された頑丈な馬車を猛烈なスピードで引っ張りながら走っていた。

「ど、どうしようアニキ! ルビス親方に怒られる! 双剣が真っ二つだよ!」

「やかましい! ラディ、ルビスだって任意で折ったんじゃ無いんだから許してくれるし、頼めばまた直してくれるって。採ってきた素材を売ればそこそこの値になるだろうし、ついでに強化もできんだろ」

「そ、そうだよね! 親方だってバトルにハンマー投げたりしてるけど基本優しいから!」

「それ大丈夫なんですか?」

その馬車にはヤクモ村に戻る三人の姿があった。ただし、採ってきた大量の鉱石が空間を圧迫していたが。

とりあえず紅葉達は調査してほしいモンスターの一部であるグランバルの剥がれた甲殻と、戻っている途中になぜか上半身細切れになっていたデビル大蛇の肉片を持って帰り、村の集会所から渡そうと

ヤクモ村に帰っているのだ。

「ところで、シルクさんはヤクモ村になにか用事があるの？」

「ええ、ちよつとしたことで……」

「ふーん。なんかシルクさんってかっこいいよね！自分の道をゆく！、みたいな感じで」

「いえ、別にそんなことは……ただ楽しくはありますけど」

「だよねー。おまけに美人で胸だってデカイから羨ましいよー。アニキだってそう思うでしょ？」

「ん？まあ、そうだな」

「セクハラですよモミジさん。私の胸ばかり見てたんですね、いやらしい」

「わあ、スケベだスケベだアニキは！」

「お、俺は誉めようとしたら何故か理不尽ないじめになっていた……！な、なに言っているかわかんね『もうすぐでヤクモ村到着でーす』ヘアッ!？」

紅葉がネタに走ろうとした時、見慣れた村が見えてきた。

□

□

□

「……で、この通り見事に折ってしまった訳かい」

「ご、ごめんなさい！でもわ、わざとじゃないよ！」

村の鍛冶屋の中

ルビスがカウンターに置かれたラディの双剣 ツインダガーを弄りながらラディから経緯を聞いていた。

一通り聞いたルビスは少し間を置いた後、ちよつと萎れているラディの方へ笑顔で顔を向けた。

「そうかあ…なら良かったよ」

「え？」

「だってあんたはこの剣のおかげで少し生き延びて、結果ここにいるんだろう？そりゃ、折れたのは悲しいけど直せない程じゃないし、なによりあんたが助ったのがなにより嬉しいことだかね」

「親方あ…」

その懐の広さに感激しそうになるラディ。

「なに？もしかしてあたいがそんなことで怒るかと思ったかい？ハッハッハ、こいつめ！」

「い、いひゃいいひゃい！ごめん、なひゃい！」

おもむろにルビスはラディの柔らかい頬っぺたを引っ張って遊び、

周りの客やお弟子さん達はそのいつもの光景に微笑む。

「ん？　そういえばモミジの兄ちゃんがいなくてどうしたんだい？」

と、しばらくラディで遊んでいたがいつもいる紅葉がないのにルビスは気付くと頬つぺたを離れた。

「アニキならグラハムさんところ行ったよ。武器に必要な鉱石が手に入ったからね」

「へえ！　そうかい！」

まだヒリヒリする頬つぺを擦るラディが答えると、それを聞いたルビスは幼馴染みの仕事する姿を思い浮かべて思わず喜ぶ。

（なら久しぶりにアイツの仕事手伝えるかな…昔の弟子時代はいっしょに学んでいて楽しかったな…）

一方、紅葉達

町外れの道沿いにある薄暗い小屋の中。

「…で、こんなに機能付けて大丈夫なのか？」

「ああん？　なくんだその問いかけは？　それはまるで俺には出来ないと云っているかのようなだがそれは俺の鍛冶屋としての腕が信用出来ない、そう言うことか？　ああっ、悲しい…悲しくて悲しくて悲し

過ぎて空が落ちてきそうだ…ん？空はどこまでが空なんだ？てゆーかこの空気中すべてがもう空ということになるんじゃないのか？だったら…」

「ぐあああー！もういいわ！任せれるんだろ！だったらこれも置いてくから頼むわ！そんじゃ！」

なんともカオスなやりとりの後、グラハムに武器の依頼をし、グラハムの黒透明な甲殻とゴツゴツした袋を置いて、紅葉は出て行った。

「まったく最近の若いやつあ気が短くて非常に嘆かわしいとは思わねえか？…あ、誰に話し掛けてんだ俺あ？まあ気にしないことにしよう。ストレスというのは身体に悪いものだからな！…で、アイツは何を置いていったんだ…おっ！？コイツは…！なるほどなるほど、お前の意思は確かに受け止めたぞ！ならばどうする？こうするさ！ヒヤッハー！」

一人になった工房の中、しばらくやたらと長い独り言と激しく金属を叩く音が響くことになった。

（紅葉 Side）

「あむっ…たく、アイツは面白いんだが、すぐ話の内容がおかしきなんのが時々面倒だな…あつ、おぼちゃんその《8面鳥の幻獣チーズがけ焼き》ちょうだい」

グラハムに仕事を依頼した後、腹も減っていたので村の屋台の料理

を食べ歩きながらぶらついていてた。

それにしても：《メルクの星屑》が手に入るとは思ってたな。ランバル鉱脈で、ラディがいた場所にあった美味しいスープと金色の鉱石には驚いた。

だってトリコの原作にでていたどんなものでも研げる、幻の砥石の《メルクの星屑》だったからだ。もっとも正確には鉱石ではなく旨み成分であるアミノ酸の新しい種類らしいが。

シルクの話だと、やっぱりこの世界でも超貴重らしいからギルドに高く売りつけてやろうかな？

ちなみにシルクは用事の為にある人に会いに行ったため、村の入り口で別れてそのままだ。用事ねえ：また胡散臭い噂でも嗅ぎ付けたんだろか？ま、いっか

とりあえずもう一品なんか買おうと看板娘のルルウちゃんに話し掛けようとした時、

カリッ

「ん？」

片手にある《ドドブラリンゴ飴》に誰かがかじりつく感触と音がしたので振り返ってみると

「こんにちは、美食ハンターさん。美味しそうだったからつい頂かせてもらったわ」



「そーなのかー。こんちはー紫さん」

そこには相変わらず色気ムンムンの村長さんがおられました。  
つーかこの人まるで気配を感じなかったぜ

「あーそうだ。村長さん、俺が頼んだ家どうなっているでしょうか？  
骨組み位は終わってるますか？」

だがいい機会なので聞いておく。

実は約1ヶ月前ほど前、村長さんに日本家屋の建築を頼んだのだ。  
いつまでもラディの家に住むのも男としてアレなので、長く村に住  
む以上自分の家というものが欲しくなった。ラディは別に構わない  
とか言ってくれたけどやっぱり悪い気がするしね。

で、完成はしてないだろうけど骨組み位は終わっているだろうし一  
度見てみたい。

「ふっふっふ…甘いわね紅葉。私の知り合いの大工はそこいらのチ  
ヤチなスピードじゃないわよ！もう既に完成しているわ！」  
ズビシッ！

「な、なんだってー！？」

突如テンションMAXになった紫さんが指差した方向をワクワクし  
ながら追っていく。するとそこには！

ぽっーん

空き地に明らかに小さい、というより完全に犬小屋にしか見えない  
家が立っていた。

「ひどくござっぱりしてるうゝ?」

予想をある意味超えた光景に、ええゝ?という変な表情になる。

「ちょっと村長さん?全然出来ていないんですけど。というか全然出来ておまんがな?」

「あら不満だったかしら?建て直すとしたら材料集めも兼ねて30年はかかるわね」

「ええゝ?困るよそれ!?人生の折り返し地点まで待たなきゃならないの?」

な、なんて長い木造建築だ!つゝか30年かかる建物つてもはや家のレベルじゃねゝよ!

これからのことを考えて思わずorz↑みたいに地面に手を着いたポーズをとる

「:ぷっ、あははは!。冗談よ。ちゃーんと完成した家はあるわよ。ほら、これが地図」

だがどうやら杞鬱だったらしい。ふう、分かっていたけどね!

「ですよゝ。しかしもう出来ているなんて早いですね。あつ、床は畳ですかい?」

「もちろんよ。でも畳の良さを知っているなんて、なかなかいい趣味しているわね紅葉」

はい、日本人ですからね

「そんじゃ村長さん。建築費用は言った通りでいいんですね？」

「ええ、私が食べたこと無いような、美味しい食材をたまに持ってきてね」

どうやらこの村長さんには頭が上がらない。怪しい雰囲気の人だけどやっぱりいい人だ

「ありがとうございます。それじゃ行ってきました」

ま、とりあえず行ってみましょうかー

「あら、そういえばあの事言い忘れてたわね…まあ、面白そうだからいいかしら」

「ここか。なかなかの物件だな」

地図の通りに来てみるとヤクモ村の奥にあり、けっこう高い所に建ててあった。

見た目はなんか中華料理店っぽいが所々日本家屋を感じさせる縁やすだれとかがあってこれはこれでありだ。

「よし、そんじゃ入居一人目だ！お邪魔します」

そしてスライド式のドアを勢いよく開けると中を覗き込んだ。

「あつ、モミジさんお邪魔しています」

するとそこには薄着で机に座り、くつろいでるシルクさんと

「どうも、はじめましてやなモミジ君？お邪魔しとるで」

猫目で柔らかそうな髪と一本の傷が頬に入った顔つきの見知らぬ男がいた。

「…誰？」

「そうやなあ…まあそちらさんもういろいろと聞きたいことあるやろうけどまずは…」

男はそこでニカッとした笑顔をこちらへ向けて自己紹介してきた。

「わいの名前はキギリ。あんたと同じ狩猟屋や」

**葛原紅葉の楽しい木造建築（後書き）**

なんかいろいろとやっちゃったZE☆

ごめんなんだZE☆

## 同業者 キギリ（前書き）

テンポを良くしたい。

今回雨季さんと、ASTRAYさんのアイディアを使わせてもらいました。

## 同業者 キギリ

ガァン！ガァン！

「ふう〜…大体の作業はこれで終わりっすね」

「ああ、後は細かい所を調整して研げば終わりだよ」

暑い鍛冶屋の工房の中、ルビスとその弟子は元の形にほぼ戻ったラディの双剣を見極めていた。

ただ前の状態に比べて形や、重さとわずかに違う所があるのは折れた刀身の修復に加え、新たに鉱石を使った強化もしたからだ。修復だけではいろいろと時間がかかるので今回折れたのはちょうど強化する機会になり、結果オーライだったのだろう。

「さて、じゃあ最後の作業はお前がやって…」

そして最後の研ぐ作業に移ろうとした時、

バァン！

裏口の扉が勢いよく開かれ二人は少々びっくりしてしまい、何事だと思ひ扉の方に顔を向ける。

「よおり、少々お前達にとってスリリングで唐突過ぎる登場だと思うが…とりあえずルビス、来い」

するとそこにはルビスが良く知る幼馴染みのグラハムがハンマーを片手に立っていた。

「来いって：いくらなんでも唐突すぎるぞ。さっさと帰れ」

「オーケーオーケー、そう言うと思って既に持って来ているからその必要はな〜い」

「は？ 一体なにを：」

そこまで言い、ルビスはグラハムが重そうに荷台に乗せて持ってきた物体に目が止まった。

「それって：」

「そのとうり！ コイツはあの美食ハンターの武器だ！ コイツを完成させたいんだがかし！ どうしても出来ない細かい所があるからお前に手伝っておうと思って、な」

久しぶりに嬉しそうな幼馴染みに、ルビスも少し嬉しそうな顔をするがいくらなんでも急過ぎるためすぐには受けれない。

「グラハムさん。悪いっすけどまだ仕事が残って：」

弟子であるランスも同じ考えでとりあえず仕事があると断ろうとするが

「んん？ そいつはラディのか？ ……そういえばあいつからもらった設計図の後ろに：面白そうだな：おいルビス」

なにやらひとしきり呟いた後、グラハムは実に楽しそうな顔で言ってきた。



「その双剣、仕事代わりにやるから俺の仕事を手伝ってくれよ。実に楽しそうだと思うのだが？」

く紅葉 サイドく

「狩猟屋？へえく…初めて俺以外の同業者に会ったな…」

シルクの隣の空いている椅子に座りながらキギリとかいう男を一通り見る。

容姿は跳ねて柔らかかそうな茶髪と人のよさそうな顔つき。

そして服装は黒を主にした忍者としか言い様がない恰好だった。ただ、所々関節などには白の鱗でつくられた装甲が付けられており、肩当てには白の卍のマークが描かれているのが目がつく。けっこう見ない装備なので目立つはずなのだが、

「……ん？」

おかしい、何故か違和感をあまり感じない。というより気配というか存在感が…

「ああ、わい気配薄いやろ？これは癖みたいなもんやかいい気にせんでええよ。それより改めて自己紹介と用件言った方がええな、紅葉はんとシルクさん」

「わいの名前はキギリ、狩猟屋の中では主に環境とモンスターの生態調査が大半を占めとるで。好きなタイプは適度にムチムチしたお姉さんや！」

「どーも、こっちも同じく狩猟屋の紅葉だ。好きなものは食うこと」

「シルクといいます。一応ハンターで武器は弓を使ってます。好きなことは伝説や噂の真相を探ることですね」

向こうが自己紹介してきたのでこちらも簡単な返事をする。  
最後のはいるんだろうか？ いや、いるな。自分もお姉さんの人が好みだからね

「わいも食うのは好きやで。で、やっぱり姉ちゃんがああの探求家としても有名な《必中の水》かいな。思ってたよりエロいボ…「カッ！」 かにんや、その弓下ろしてくれや」

「安心して下さい。半分冗談です」

「残りの半分はなんなんや！ シーちゃん絶対にSやろ！」

いかん、このままでは話が脱輪して三軒茶屋まで（？）間違っ走ってしまう。

「はいそこまで。キギリ、用件があるんだろ？ シルクさんも後で撃っていいから」

「わかりました。じっくり…じっくりと…恐怖を…。ところで、その調査というのは具体的に？」

「前半恐いわ。まあその調査と今回の用件は関係しとるから言う  
とくわ。今までそうやな…ざっと8000位の新種のモンスターな  
んかを発見してきたんや。伝説のモンスター言われてた三つ首の蛇<sup>トライナーガ</sup>  
の産卵シーンとかもみたで」

「8000種！？それにあのトライナーガの産卵！？是非詳細を…」  
やっぱりこうゆう話題がシルクは好きなようで身を乗りだして聞く。  
ちよ、その恰好でその体勢はやばいつて

「待った待った、とりあえず今は用件や。んで、ギルドから最近に  
なつてある大陸の本格的な調査を依頼されたんやけど、それと同時に  
にその島の主から食材を採ってきてくれ、なんてハードル高い依頼  
も頼まれたんや…」

「島の主？それに食材って…」

そこでふとある生物が頭に浮かぶ。まさか…

「せや、場所はフォンロンガーデン。ギルドがモンスターや植物な  
んかの養殖・観測なんかを行っている所でな、モンスター界につな  
がっていると言われとるフォンロン大陸の片割れの大陸や」

おいおい、トリコのビオトープガーデンとほぼ同じような所じゃね  
ーか！

「そいでもってその大陸の主、山よりもデカイ巨躯のリーガルマン  
モスの体内から《宝石の肉》<sup>ジュエルミート</sup>つつう極上の肉を持ってこいゆう依頼  
や」

「ジュエルミート!？」

その単語に思わずシルクと声を重ねながら叫ぶ。

あの漫画でうまそうだった肉…食いてえ!

「ということは、そいつを採る為に協力してくれって話か？」

そうこちらが聞くとキギリはなにかを含んだ笑みで頷いてきた。

「そうや、ついでにあんたの実力も確認したいしな。どうや？」

そうだな…胡散臭い奴だが同じ狩猟屋の仕事を見ることもできるし仲良くなって損はないな…

「面白そうだ! もちろん受けさせてもらう!」

と、承諾したと同時にドアが開いて誰かが入ってきた。

ガラガラ…

「アニキ、家が出来たって聞いたから見に来ただけど…って誰!？」

まあそりゃそうなるな

いろいろと現状を理解できないラディをみながら、今からジュエルミートの味を想像していた。

**同業者 キギリ（後書き）**

キギリの容姿は・hackのシラバス。

## フォンロンガーデン到着！（前書き）

今回は武器の話とフォンロンガーデンの所長さんの話です。

コジロウさんのアイディア使わせてもらいました！

## フォンロンガーデン到着！

バサアアア……バサアアア！

「ふゝむ……速いな！」

海上の空を巨大な翼を羽ばたかせるこれまた巨大な鷹 鳥獣種のフアイティングファルコンに堂々と乗っかりなが紅葉は眩やいた。

昨日キギリに依頼に協力するのを承諾した当日、

「じゃ、三日後には迎えが来るらか待っててな」

と言って帰っていき、今日になってみると、フアイティングファルコン（以下ファルコン）が村に降りてきたので村の人達やハンターがびっくりしていたのだが、どうやら飼われているらしく背中に座席が装着されていてキギリからの手紙もついていたので迎えということがわかった。

その際紫さんは知ってたらしくファルコンが服従していたのだが、何故か納得できた。

「ひゃー！目を開けてらんないー！」

そしてラディはファルコンの背中に半ば、しがみつくようにして必死に落ちないようにしている。一応ロープで固定されているが時速150km程で飛んでいるファルコンの風圧では軽いラディはぶっ飛びそうらしい。

「はっはっは！最高にハイってやつだ！だらしないうぞラディ！」

「アニキが異常過ぎるんだよ！おまけに：そんな重い武器も持っているしさ！」

「ん？ああ、コイツを持っているせいでスピードがでらんらしいぞコイツ？」

ラディが指摘してきた背中中の武器を確認する。

今日の朝、グラハムに頼んでようやく完成したそれは、かなりの大きさで、大剣の二倍近いサイズの黒い和傘だった。

始めは大剣やハンマーといった力いっぱい振れる重量系の武器も考えていたのだが、せっくなのだから自分オリジナルの武器にした方があってるし面白そうなので、前の世界で好きだったマンガで大食いチャイナ娘が使っていた傘がなかなか万能だったのを思い出し、まんま図に書いてグラハムに頼んでみたのだ。

しかし忠実に再現してくれたなく。傘を開けば防御になるしちゃんと取っ手のところがトリガーになって先端からいろいろと弾を撃てる。あと重さは150キロあるけどまあ、しょうがないや改造して変形機能つけようかな？変形はロマンだねえ！

あつ、ちなみに今の服装も武器に合わせて神威さんのチャイナ服にしています。

性格と胸の素敵なルルウちゃん、頑張って仕立ててくれありがとうね！今度虹の実あげるから！

「まあ、お前も……頑張れ！」

「なにが！？なんか分かんないけど凄くイラッとするよ！？」



「細けえこたあ気にすんな！」

「なんかムカつくうう！」

そう言うラディの背中にはなんでもか知らないがあるゲームにでてる双剣 神式・轟<sup>しんしき・ごうてんらい</sup>天雷を背負っている。

形状は持ち柄の周りを囲うようにギザギザの刃と片端には三つの尖った槍のような刀身がついており、色は銀色に黄色いラインが入っている。

はて？この世界ではツインダガーの強化はこれになるのかね？偶然ってあるんだね」

自分がグラハムに渡した図の裏に書いた落書きが原因だとは知らない紅葉であった。

「ようこそ、フォンロンガーデン第4棟へ……。キギリ殿から用件は聞いておりますモミジ殿、ラディ殿。私はアシズと申します、以後お見知りおきを……」

一時間程、半分意識がないラディを弄っていると周りを険しい崖に囲まれた島に到着し、その端にあった頑丈そうな金属製の扉の前にファルコンが降りてみると、黒子の恰好をした人が出てきた。

「そうだけど…証明とかしなくても大丈夫なのか？ここってけっこう重要な所らしいが……」

「その必要はありません。既に終わってますから……コイツのおかげで」

アシズがそう言うと、ファルコンの羽の中から手の平サイズはあるダニが跳び出しアシズの肩に乗った。

「コイツはグルメダニといいまして、大食いのくせに一度吸った人の血は犬科の種類よりも100倍は鋭い嗅覚で確認して二度と吸わないという特徴を持っています。お二方はどうやら噛まれてないようですね」

「えっ!？」

その言葉を聞き、慌てて体を確認するラディ。

「?俺たちは吸われたことはないが……」

「いえ、実はキギリ殿がこっそりとあなた方から少量いただいたものを飲ませましたので……すみません。傷をつけてしまいました」

謝ってきたアシズさんだがまったく身に覚えがない。いつ採ったんだアイツ?やっぱりただ者じゃないみたいだな……

「ラディ、体のどこかに傷はあるか?」

「えーと……いや、ないみたいだよ?」

普通の回復力のラディにもないか……どんだけ繊細な技術だよ

「ではさっそく中をご案内いたしましょう。所長も待っていること

なので…」

□

□

□

ギァアアアア！

グアオオオン！

「うわっ！あれってティガレックス！？前に雪山で遭った時はびっくりしたな…でもあんな白だっけ？」

「ほお、随分とまあたくさんの種類が…」

扉の中に入って進むと、奥では大量の猛獣がガラスの水槽や檻に入られペットショップのように並んでいた。

「フォンロンガーデンでは第1から第4までの施設があり、ここでは主に“食材”……として扱える部位を持ったモンスターの実験、及び調査を扱っております」

アシズさんの話では、元々フォンロンガーデンは周りとは隔絶された環境にあった大陸で独特な動植物たちや、変異種などの宝庫らしく、そのためここに施設を分けて構えてるらしい。

「実験ねえ…あんまし響きは良くないが人類が対抗するのには何よりも知識が必要だからな」

「ええ、ですから仕事は尽きないのですよ…」

と、アシズさんと話しているとき、

「た、大変だ！イヤンガルルガが逃げだした！」

「う、うわああ！？」

「グアアア！」

通路の奥で紫の鱗をして、尖った嘴をしたイヤンクツクのような鳥竜種 イヤンガルルガが施設の人達を襲いながら暴れてた。

「あっ！アニキ！」

ラディが双剣を構えながらこっちを向いてきた。しゃーないな

「とりあえず威嚇して…ん？」

「やれやれ…しょうがないのう……」

ともかく意識をこっちへ向けようと思ったがその前に誰かがイヤンガルルガのに対峙していた。

「活きがいいのは構わないが…おとなしくしとけ！」

ドグウツ！

「グアアツ！？」

そしてその人物はイヤンガルガの横顔を太い腕で思いっきり殴り倒し、イヤンガルガはそのまま痙攣しながら倒れた。

「まったく……おい！今度は逃げんようにしっかりとノッキングしておけ！ダンディーにな！」

「は、はい所長！」

所長？目の前にいるデカくてアフロの渋い顔したおっさんが所長かよ！

「んむ？もしやお前さんが美食ハンターとやらのモミジか？」

と、予想外にハジケた見た目の外見に驚いていると向こうが気付いて近づいてきた。

改めて近づくと圧巻だな……身長2m超えてるぞ

「ああ、美食ハンターをやってる紅葉だ。こっちは相棒のラディ」

「こんにちは所長さん！」

「ほう、元気がいいじゃないか！ワシはこのフォンロンガーデン所長、ダンディだ！わっはっは！見苦しいミスを見せてしまったな！」

豪快に笑う所長。とりあえずこの人はテンションの高い人とわかったファーストコンタクトだった。

追伸

キギリが帰った後……

「フォンロンガーデンですか…私も依頼がなければ行ってみたかったですよ…はあ」

「そんな落ち込むなよ……あれ？シルクは結局何の用だったんだ？」

「ああ、実はドンドルマからここに引っ越そうかと思ひまして…」

「えっ！？シルクさんが？わーい！この村僕以外の女の人いなかったから嬉しいや！」

「えっ？女の人だったんですか？」

「気付いてなかったの！？」

## フォンロンガーデン到着！（後書き）

グルメダニ

甲殻種

手の平サイズで、人からしか血を吸わないが、一度吸った人からは二度と吸わないという特徴を持ったグルメなダニ。まるごと揚げるとカリカリして美味らしい。

狩猟レベル 3

ファイティングファルコン（アイディアモンスター）

鳥獣種

翼を広げると全長14mにもなる巨大な鷹。本来はとても好戦的な性格で、空の番長と言われてる巨大カラスのエンペラークロウと争っていたらしい。

今はハンター界では絶滅したらしく、モンスター界で群れているという話である。フォンロンガーデンのやつは一人の狩猟屋が偶然フォンロンガーデンの中でヒナを見つけた。

肉は食材には向かないが羽は軽く、丈夫な上、場所によって鮮やかな色をしているので装飾品として貴族にも人気。

狩猟レベル 40（群れになると推定60）

## キギリの正体（前書き）

今回はキギリについてです。

ちょっと短いです。



## キギリの正体

「え〜っと……これは……」

「はっはっは！ ラデイ、モミジ！ さあ遠慮なんかいらんぞ！ わしのお気に入り料理だ！」

「は、はい！」

フォロンガーデン所長、ダンデイに勧められラデイは目の前のテーブルに乗っている巨大な物体 全長20mを超すハバネロブスターの丸焼きと、その周りにも置かれた様々な料理を見る。

ダンデイ所長と会った後、これからの話も含めて二人はとりあえず料理でも食ってゆけど、勧められ只今長いテーブルに置かれた大量の料理と格闘している最中である。

（って、こんな大量にあるけど……）

チラリとラデイは紅葉の方を見てみると

「辛っ！ でも美味しいからやめれん」

開始数分で、既に皿の山が周りに出来ていた。

「早っ!？」

「わっはっは！ いい食べっぷりじゃないかモミジ！ スパイシーランドの食材達は気にいったか？」

「辛くて美味い！　つとそういえば所長さん、さっきの話なんだが……」

料理に手を着けるスピードを止めず紅葉はダンデイに先ほどした質問の続きを聞く。

「ん、ああそうだな……ノッキングとキギリについてだったな。この二つは関係があるからまとめて話そうか」

ダンデイもまた、料理を酒の肴にしながら質問の続きを話はじめた。

ノッキング……この技術はもともとキギリが自身の知識と経験から編み出したモンスターの無力化だ。モンスターの体にある神経を刺激し、一時的に体の自由を奪うことでむやみに罠や麻痺毒を使うことなく捕獲できるもので、これによりモンスターをほぼ傷付けることなく、扱うことが出来き、ここの施設ではモンスターごとのノッキングの箇所についても調査している。

そしてその技術を生み出した張本人、キギリ・フウマは元々モンスターをいかにして効率よく弱点などを付けるか、暗殺系の技術のある種族に教わりながら育てられてきたらしい。

「へえ、ある種族ってなんですか所長さん？」

「うむ、確か……」

「アイルーの中でも桁違いの集団。卅一族っちゅーもんやで」

突然現れた声にその場にいた三人が振り返ると、この前と同じよう

に飄々とした態度と人懐っこい笑みをした狩獵屋キギリがいた。

「おおキギリ！噂をすればなんとやらだな！」

「相変わらず気配がなかったねキギリさん……」

「あはは、まあそれが特技みたいなもんやからな。よう来たなら  
ディちゃん、モミジはん」

この前と同じ、薄い気配を纏ったキギリはラディに近づくと頭を撫  
で、ペットのように扱う。

「んむ……っは！？なにやってんのキギリさん！」

「いや、つい猫みたいな感じで接してしまったわ。すまへんすま  
へん」

腕を振って払うラディをひょいとキギリは避けると近くの空にいる  
席に座る。

「よお、キギリ。何時からいた？まあ、いいけどよ。さっきの卍一  
族つつうのは一体なんだ？おっ、これ実が詰まってる」

「おっとそうやな。卍一族ってのはさっき言った通りあるアイルー  
の集団のことや。細かい掟とかは省略するけど、ナルガクルガつっ  
うすばしっこくてなかなか手強い飛竜種を、最低でも三匹だけで倒  
せることが卍一族に入る条件や。そいでもってその通常種や亜種と  
か狩れる実力で下忍・中忍・上忍、つまりは一族内でのランクが決  
まるんや」

そして、と一旦休んでからキギリは話を続ける。

「わいは赤ん坊の時、山中で捨てられている所を一族の村長に拾われて育てられたんや。ちゃんと技術を習ってナルガを狩ってから一族と認めてもらったんやけどな……」

「そしてキギリは人間でありながら桁外れの身体能力を誇っていたので、上忍の証であるナルガの希少種を狩れるまでに力をつけた、ってわけだ！」

「ってあんたかよ」

ちよつとシリアスな話だったのになぜか最後は、ダンデイが絞めたのでつい紅葉はつつこんだ。

「ま、わいの話はこれくらいでええやろ。それより所長、リーガルマンモスは現在エリア10におるで。凄かったわ、あそこは狩猟レベル20〜30の猛獣の住処やというのに、一回鼻で吸い込んだだけで何十匹も骨になってたで」

「ふむ、やはりこの島の主を誇るだけのことはあるのお。なかなか難しい依頼を任されたのうキギリ、それにモミジ」

「あむっ。な〜に、俺は美味しい肉を食うためにやって来たんだ。それくらいのリスクは……」

バリッ、と紅葉はハバネロブスターのプリプリした身と、激辛で歯ごたえのある殻を豪快にかぶり付き、

「承知の上だ！」

見事にテーブルの料理全てを空にした。

「つていつの間に!？」

ーフオロンガーデン7区・海岸沿いー

ギユアア!"

ブオオオ!"

何時も通り、白い砂浜と透き通った蒼い海が美しいこのエリアで、モンスター同士が互いに威嚇し合っていた。

片や、人より二回り程大きいトカゲに首の周りを黄色のスポンジ状のトサカを付けたような海竜種　ロアルドロスが仲間の、一回り小さいドロスを引き連れており

片やそれに対しているのは巨大な黒い顔に短いヒレの手足を付けたような、もっとも近いのはチョウチンアンコウのように頭から球体を吊るしている海竜種　チャナガブルの亜種が顔の大半を占める口を開けて威嚇していた。

このような光景は珍しくもなく、どちらも同じくらいの狩猟レベルなので、片方が引き下がれば終わるのだが……

ザバツ、ザバツ

ギュア？  
"

ブオ？  
"

今回は違った。

海の中から出てきた何かの方へ二匹は目を向ける。

「……」

そこには二本足で立っているアrikuiのような長い口と、焦げ茶色した毛を全身に生やした生物がいた。

ザツ、ザツ、ザツ

数分後……

アrikuiのような生物は砂浜を口から血を垂らしながら、歩いていた。

先ほどまで二匹がいた場所には少数のドロスト、大量に散らばった血と骨しか残っていなかった。

## キギリの正体（後書き）

モンスター紹介

ハバネロボスター

甲殻種

全てが様々な辛さを持った食材で作られているスパイシーランドに生息する巨大なロボスター。

鋏の力は強力で、容易く上位ハンターの防具を切断するほど。頑強な甲殻をしているが一度油で揚げるとカリカリして、かなりの激辛味なので中身の淡泊な身といっしょに食べると美味。

狩猟レベル35（成体）

## ブラックカーペット（前書き）

とりあえずごめんなさい

1ヶ月も遅れてしまった……



## ブラックカーペット

フォロンガーデン

ほぼ未知であり、数少ないハンター界からモンスター界への入り口がある大陸、フォロンの近くに寄り添うように存在する巨大な島である。

全体を環境や地形によって1〜10までの区に分けており、外側は険しく、高い崖に囲まれているため海上からの上陸は砂浜のある第7区以外ほぼ不可能な形状になっている。そして珍しい植物や猛獣が数多く存在していたため、ギルドやグルメ市場ではかなり重宝される場所である。

ーフォロンガーデン第5区ー

「ほお、これがあのブラックカーペットか」

そう言いながら周りを見渡す。

真っ黒な草、サラダにするとシャキシャキして美味しい黒草こくそくで覆われた草原が広がっており、まるで黒いカーペットのようだ。

おもむろに膝を着いて黒草を一筆りし、口に放り込んで噛むとほどのような苦味とシャキシャキした感触が心地いい。

ダンディ所長から料理をご馳走になった後、リーガルマンモスの場所が分かっている内に行った方がいいということで出発したのだが

……

さすがこの世界のビオトープガーデン。トリコのサーロインキノコや、モンハンのラオシャメロンなどの他にも見たことない食べ物がわんさかあり、そのせいでちよくちよくつまみ食いして遅れてしまう。

「わぁー、高級素材の黒草がこんなに……美味しいサラダが作れそうだな」

隣にいたラディを見ると、閃光玉などの戦闘道具や素材を入れる大きなリュックを持ちながら、目の前の草原に目を輝かせて興奮していた。

そういえば料理好きだったなラディ。妙なところで女の子っぽいのが萌えポイントだとかリリアさんが言ってたな

「二人共さつきから食うことばかりやな。ここいらは基本、大人数の草食獣ばかりやからまだええけど……気い付けや？」

そんな俺たちの様子に半分呆れたような表情をするキギリ。ちなみに今は服装が黒い忍者みたいな恰好と自前の気配の薄さで見事にこの平原に同化している。あのダンボールの蛇さんもびっくりだぜ。

「わかってるわかってる。な、ラディ」

「も、もちろんだよ！僕は料理に使いたい、って思っているだけだよ！アニキみたいにそんなにがつついてないよ」

「おいコラ、その言い方だとなんか俺がいやしい奴みたいな感じじ

やないか」

「いやそんな……ことあるよ！」

「うおっ！？言い切られた！まさかのラディの逆襲？」

「じゃあ聞くよ！アニキが僕の家で生活した時の食事で僕の方も遠慮なく食べてたよね？たまにあった村の人達からの依頼でも勝手に依頼品の一部食べて怒られたりしたよね？」

うぐっ！　なかなか痛い所突いてきたじゃないこの娘！　つか最近なんかアニキって呼び方意味無くね？　っていう位、最初と態度が違ってきたな。……よし、

「あっ、あんな所にココマヨの木が。よくしココマヨのソースを黒草にかけてみようぜ」

スムーズに話題変形をしてとりあえずその場を離れようとした。ふっ、なんとか乗り切れ……

「本当だ……って話を反らさないでよ！おまけに下手だよ！」

なかったよ畜生。

ラディに首根っこ捕まれて止められた。

「モミジはん、ちゃんと誤った方がエエで。ラディちゃんの方が正しいで」

「はいはいわかったよ。ごめんなさいラディ様、俺が悪かったです」

「ふんっ、わかればよろしい。これからは気をつけてよね」

そう言って最後はニコツ、と眩しい笑顔で笑うラディ。

ああ、なんか癒されるわ

「……はいはい二人共、茶番はそこらへんにしときいや。ここら辺にもたまたに強力な肉食獣が来るんやから……」

そろそろちゃんとハンターらしく警戒をするようにキギリが注意しようとした時……

プギィー！

「ん？」

突如近くから鳴き声がしたのでそちらを見ると、赤い毛皮をして鋭い二本の牙を下顎から生やした三匹の豚がこっちへ走ってきていた。

「あっ、あれって赤毛豚だ！ 美味いけど凶暴で家畜にできないから最高級の豚肉なんだよね」

「ありゃ、どうやらわいらの方へ来とるようやけど……」

「どうする？ 俺が威嚇しようか？」

赤毛豚は食ってみたいが今はいい。俺が威嚇すれば逃げて行ってくれると思うが……

「んにゃ、せっかくや。わいの実力、ちよいと知っておいた方がええやろ？」

そう言うときギリは突進してくる赤毛豚に向かって素早く走る。と、よく見るといつの間にギリの両手にはアイスピックのような鋭くて細長い針が握られており、とうとう赤毛豚達の直前まで来た瞬間

ビッ

その間をするりと滑らかに抜けると同時に両手をぶれさせ、

プギィ!?"

「おお!？」

「ノッキング、完了や」

直後、三匹ともいきなり身体を痙攣させそのまま地面に倒れた。

「えっ? えっ? キギリさんにしたの?」

その光景がラディは理解できないようだが当然だろう。ギリは赤毛豚が気づかない位のスピードで特定の神経と筋肉に針を刺して身体を一時的に麻痺……つまりノッキングを施したのだから。

「どや? わいこう見えてもやるときゃやるんやで」

そう言いながらノッキングの針を懷に仕舞うギリの所へ行き、赤毛豚がちゃんとノッキングされてるのを確認する。

「へえ、大したもんだな。さすがニャンコ先生、猫目キャラは意

外と実力者ってのを分かってる」

「いや、ニャンコ先生ってなんや？」

いや、なんか雰囲気とか容姿が猫っぽいし、アイルーに育てられたって言ってたしね。

「キギ……ニャンコ先生凄いね！　僕なんか何したか分かんないよ」

「なんかもう決定しとる！……まあ、今はそないなことええ。それよりも……」

キギりは倒れてる赤毛豚を一瞥し、眉をひそめて怪訝な顔をする。

「コイツらは隣の第6区にしかおらんはずや。わざわざこの区まで入ってこんはずやけど……」

「もしかして何かに追われていたとか？　例えば飛竜種とかだったり」

「おいラディ、そのセリフはフラグ……」

それはやばい、と思いラディのセリフを止めさせようとした瞬間、

ギュアア！

ブオオオオオ！！

「！？　うおっ！？」

「なんやっ！？」

「うわあっ!？」

いきなり横から大音量の砲吼と共に凄まじい空気の渦が地面を抉りながら襲いかかってきた。

「こ……のやろっ！」

まるで台風の中へ突っ込んだような力で吹っ飛ばされそうになるが、すぐさま地面に持っていた巨大傘を突き刺し踏ん張る。  
重さ100キロを超える傘によりなんとか耐えきるが、

「うわあああ……！」

「しもたゝあああ……！」

「あっ!？」

軽いラディとキギリは風圧に耐え切れず、遙か彼方へ吹っ飛ばされており、消えてしまった。

「グギャオオン！」

そして暴風が止まったのでその元凶の方を見ると、そこには頑丈そうな顎とずらりと並んだ切れ味が良さそうな牙がある凶悪な顔、皮膜があり太く、頑丈そうな白い鱗に覆われた前足が特徴的でゲームでも凶暴だった飛竜種 ティガレックスがこちらを見据えていた。

「……白いティガレックスか。どれ……」

ゲームには存在しなかった白いティガレックスへの警戒をしながら腰に着けているポーチの蓋を開け、一冊の本を開く。

この本はここへ入る前所長さんから渡されたフォロンガーデン全体の環境やモンスターの生態などを詳しく書かれた本で、この島にしか生息しない稀少なモンスターなどに対しては非常にありがたい。

……あつた！ティガレックス【稀少種】

内容は……

「ギャオオッ！」

と、やっとページを開いた所で白ティガレックスは片手を上げ、

ゴバツ！

勢いよく地面をぶん殴り、けっこうな大きさの岩を飛ばしてきた。ちっ！そりゃ待ってくれねえよな！

それに対しこちらは傘を引っこ抜き、広げて防御する。

ドゴドゴッ！とぶつかる音がするが傘には傷一つなく白ティガの攻撃は無意味に終わる。

「ギユアア！」

どうやら岩飛ばしは効果がないと思ったのか今度は前足を振り上げながらかなりのスピードで突進してくる。

あまり距離がないのですぐに目の前にくるが、

「なるほど……尻尾と鳴き袋が美味しいのか」



すでに情報を読み終わり、白ティガが傘に牙を立てかけた瞬間、

「グオオッ!？」

そのまま傘を畳まず全力で押し返した。

そしてカウンターをもろに食らい、白ティガが少し吹っ飛ぶと瞬時に傘を畳み鈍器にする。

ちっ、ノッキングはまだ早いしな

逃げるにしてもコイツはしつこそうだし……しゃーない、腹も減っているしな……

「食うか」

そう決めると、ちょうど体整を整えた白ティガの前に立つ。

白ティガも好都合とばかりに顎を開いて今度は俺自体に噛み付こうとしてくる。だが、

「甘いぞ貴様、俺はハンターであるとともに……」

ブオンッ!! と、その噛み付こうとした顔に2mを超す傘を振ってめり込ませ、再び吹っ飛ばす。

「!？」

「美食屋でもあるのだよ!」

## ブラックカーペット（後書き）

展開が無理矢理だ……

アイディアをバンバン使わせてもらいます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6314q/>

---

美食ハンター乱入！

2011年9月6日19時34分発行